

博士論文

敦煌識字寫本研究

平成 31 年 3 月

廣島大學大學院綜合科學研究科

綜合科學專攻

任占鵬

目次

序論

- 一 主題の意義及び研究方法 ……………1
- 二 敦煌識字寫本の定義 ……………2
- 三 凡例 ……………5

第一章 『上大夫』 ……………7

- 一 『上大夫』の學習 ……………8
- 二 『上大夫』と『牛羊千口』の關係…………14
- 三 『上大夫』の兩バージョンと『上大人』の關係…………17
- 小結…………19

第二章 『上土由山水』 ……………20

- 一 寫本の概要…………20
- 二 『上土由山水』の内容…………21
- 三 『上土由山水』の用途…………26
- 四 敦煌とトルファン寫本の習字詩…………28
- 小結…………30

第三章 『千字文』 ……………32

- 一 『千字文』の作者…………33
- 二 『千字文』の主な用途…………35
- 三 『千字文』の學習過程…………37
- 小結…………45

第四章 『正月孟春猶寒』 ……………47

- 一 寫本の概要…………47
- 二 『正月孟春猶寒』と書儀…………50
- 三 『正月孟春猶寒』の用途と學習…………51
- 小結…………57

第五章 『敦煌姓氏雜録』	58
一 『敦煌姓氏雜録』の内容	59
二 『敦煌姓氏雜録』の用途	62
三 『敦煌姓氏雜録』と社司轉帖	66
四 他の姓名寫本について	69
小結	72
第六章 『開蒙要訓』	74
一 『開蒙要訓』の編纂と用途	74
二 『開蒙要訓』の學習	78
小結	85
結論	87
参考文献	91
附録	97

序論

一 主題の意義及び研究方法

唐代中期以前の敦煌地區は、東西交通の中心的位置にあり、多くの文明がここで交わり、經濟は繁榮し、社會も安定していた。また、儒學が學問の中心に置かれていたことは他の時代と同じであり、それに関わる文化と教育も中原地區に劣るということはない。盛唐時期、敦煌の官學にも州學、州醫學、道學、縣學があり、私學に義學もあった。

その後、敦煌がチベットに占領されてからは、ほとんどの官學が廢止された。チベットの奴隸になるのを避けるため、僧侶になるという選擇をした官員や文人もあり、その後、敦煌の寺院の「三學院」が佛學や學問を傳播する新たな形の學校（今日の學術界は「寺學」と言われている）になった。そして、敦煌文獻により、寺學で學ぶ人数は少なくなかった。大中二年（848）、張議潮がチベットの統治を破り、漢人政權の歸義軍を建て、沙州地區で唐制の復興に力を盡した。そこでは改めて官學が設立され、中には州學、州陰陽學、縣學、伎術院があり、私學の中には郷學、坊學、社學、私塾も立てられた。歸義軍時期の寺學はそれ以前よりも發展し、計 10カ所もの寺學では、佛學と世俗の學問を教えていた。多くの名門大族の子弟が寺學で學習した経験があったという¹。

敦煌文獻中の識語を見ると、歸義軍時期に學童に對する呼び方が多種存在した。學生、童子、學生童子、學士、學士郎、學仕郎、學使郎、學郎、學郎大歌、學士童兒等である²。中でも、大くの場合、學士郎または學郎と呼ばれるため、學術界においてはこうした學童が書寫した識語を學郎識語と呼んでいる。現在纏められた 99 件の學郎識語の中で、40 點程度の學郎姓氏が見られている。中に、張、王、李、索、陰、薛、唐、鄧、趙、羅、安、康、石、汜、令狐、閻、宋、翟、杜、馬、吳、程、劉、梁等の敦煌名門の姓氏の他、多くの姓氏は大姓である。確かに、大族生まれの人からこそ、學校あるいは寺學で學習することができるだろう。張氏歸義軍にしても、曹氏歸義軍にしても、敦煌の大族と寺院は政權の重要な支えであり、また多くの敦煌大族子弟の學習目的は、歸義軍政權に入り、父業を受け續ぎ政務の處理や文書、手紙、記帳の作成、經書の書き寫し等の作業ができる官吏となるか、或いは寺院の僧侶になることで、商人や職人になる學郎は少ないようである。

寺學は、こうした當時の學郎にとって重要な啓蒙教育場所の 1 つと言える³。この教育ではまず文字を學習するところから始まる。敦煌文獻中には、唐五代時期の敦煌地區の識字教育に関する寫本が多く保存され、識字教育に關係する内容も少なからず見えている。こうした寫本からは、當時學郎の識字、習字の狀況を窺い知ることができる。例えば、各段階で使用されている蒙書と教材の内容、指導方法、學郎同士の今日で言えばペアワークともいえるべき學習方法等までを讀み解くことができる。ここまで唐五代時期の啓蒙教育狀況を詳しく

¹ 李正宇「唐宋時代的敦煌學校」、『敦煌研究』1986 年第 1 期、39-47 頁。

² 伊藤美重子『敦煌文書にみる學校教育』、汲古書院、2008 年、41-68 頁。伊藤美重子「敦煌の學郎題記にみる學校と學生」、『唐代史研究』第 14 號、2011 年、42-70 頁。

³ 金澄坤「唐五代敦煌寺學與童蒙教育」、『童蒙文化研究』（第一卷）、人民出版社、2016 年、104 頁。

理解することは、他の古代史研究ではできないことであろう。そのため、敦煌識字寫本に対する研究は非常に意義深いものだということができるのであろう。

敦煌識字寫本の中には、佛經や變文等も書かれている。例えば、P. 3070V に『諸星母陀羅尼經』があり、S. 4504V に『十願歌』、『讚大聖眞容七言詩』及び菩薩の名がある。また、S. 5441 に『捉季布傳文』がある。書寫者が識字をしている間に他の知識も勉強していることが分かる。しかし、これらは識字専用の教材ではなかった。本研究の対象は、識字専用の蒙書、または主要な用途が識字の教材である。

敦煌識字寫本に対する研究はこれまでも多く行われてきた。このため敦煌文獻中の大部分の識字寫本は既に発見されている。こうした中で、多くの寫本は研究が進められ、整理、分類、校録されている。さらに一部の蒙書では既に作者、資料の價值、流傳の状況やその影響に至るまで研究が進められている。さらに寫本の内容に関しては、音韻や字體等の角度にまで深く研究が行われている。しかし、先行研究の中にも不足がある。まず、識字教育に関連する寫本への注目度が低いことである。また、寫本そのものに對する検討が少ない。さらに、単一の蒙書や寫本に對する研究、或いは蒙書の比較研究が多かったが、単一の文獻間での書き換え等寫本間の關係についての研究が少ない。こうしたことの調査が當時の學郎の識字方法、目的及び識字過程を明かすことにつながることは言うまでもないが、こうした検討を行う研究はこれまでに見られていないのである。

本論は敦煌識字寫本の研究を通じて、當時の敦煌地區の學郎の識字、習字過程及び方法の理解、識字寫本の使用順序、新たな寫本用途を認識することが主な研究目的である。さらに當時の識字寫本に對してより一層の理解を深めることになる。研究方法は、まず、敦煌文獻の中、研究に関連のある寫本を集め、未整理の寫本に對する校録を行う。さらに寫本の書寫状況を詳しく分析し、書寫年代、書寫人數及び書寫者の身分、書寫目的等を把握する。また、史籍の記載と結び合せ、寫本に書かれている字體、難易度から、寫本の使用順序や識字教育中の地位を研究する。最後に、寫本の中に現れた違う内容と関連の他の寫本と結び付け、學郎の學習過程、學習方法と目的を探求する。

二 敦煌識字寫本の定義

「識字」とはどういうことか。中國の『漢語大詞典』に2つの解釋がある。1つは「文字を認識する」、もう1つは「文字の發音と意義を知り、昔からの意味と使い方を知る」であった¹。また日本の『大漢和辭典』（修訂版）では「字をしる。字を讀む」²、『日本國語大辭典』では「文字を讀めるようになること」³とある。辭書によると、識字という言葉の解釋は、現在の中國と日本では同じである。識字學習というのは文字を勉強し、文字の發音を勉

¹ 漢語大詞典編輯委員會漢語大詞典編纂處『漢語大詞典』（第十一卷）、漢語大詞典出版社、1993年、422頁。

² 諸橋轍次『大漢和詞典』（修訂版）卷十、大修館書店刊、昭和三十五年、589頁。

³ 日本國語大辭典第二版編集委員會小學館國語辭典編集部『日本國語大辭典』第二版第六卷、小學館、2001年、547頁。

強する過程だと定義することができる。

文字の識別と発音を分かるだけではなく、書寫することも必要である。識字教育というのは、識字と習字合わせた教育内容であろう。

習字とはどういうことか。

中國の『漢語大詞典』では「文字を練習すること。また文字練習する用の宿題でもある」¹、『日本國語大辭典』では「文字を練習する。又、手ならひ」²とある。『大漢和辭典』（修訂版）には「文字をならうこと。文字を正しく、美しく、速く書くための學習。現在、小、中學校では書寫といい、硬筆と毛筆によって指導され、毛筆中心の高等學校書道とは區別されている」としている³。

識字教育に文字の書寫を練習することによって、書寫がより正確、綺麗、迅速になる。古代には書道を重視していたため、學童の習字も重視していた。そのため、専用の習字教材が使われていた。

筆者の研究では敦煌文獻を中心にするため、中の識字教材（習字教材を含む）及び関連のある寫本を「敦煌識字寫本」と呼ぶ。

1962年、張志公の『傳統語文教育初探』より、敦煌文獻中の啓蒙識字に關係のある内容は「識字教材」と歸属している。『千字文』、『開蒙要訓』、『俗務要名林』、『雜字』、『上大夫』等が含まれている⁴。1992年、同氏の『傳統語文教育教材論—暨蒙書書目與書影』でも、同様の觀點が見られている⁵。

1988年、汪泛舟が「識字課本」を呈した。汪泛舟「敦煌的童蒙讀物」により、童蒙讀物が3つの種類に分けることができることを言っている⁶。その一は文字と文字の間に關連性がない單純な識字課本である⁷。その二は文章の内容に關連性があり、かつ押韻し、内容に意味を持たせている識字課本である⁸。その三は姓氏に關する識字課本である⁹。2000年、汪泛舟『敦煌古代兒童課本』が出版され、序言に敦煌の識字課本の分類についてが記載されている¹⁰。

近年、「敦煌識字類蒙書」という言い方がよく使われている。1991年、鄭阿財が發表した「敦煌蒙書析論」では、敦煌蒙書26種が纏められ、229件寫本が性質によって識字類、知識類、思想類に分けられている。さらに識字類蒙書を「習いかつ讀む識字書本であり、古代

¹ 『漢語大詞典』（第九卷）、1992年、646頁。

² 諸橋轍次『大漢和辭典』（修訂版）卷九、大修館書店刊、昭和三十五年、108頁。

³ 日本國語大辭典第二版編集委員會小學館國語辭典編集部『日本國語大辭典』第二版第6卷、1239頁。

⁴ 張志公『傳統語文教育初探』、上海教育出版社、1962年。

⁵ 張志公『傳統語文教育教材論—暨蒙書書目與書影』、上海教育出版社、1992年初版、中華書局、2013年修訂本。

⁶ 汪泛舟「敦煌的童蒙讀物」、『文史知識』1988年第8期、104-107頁。

⁷ この種類は『字書』（S. 6329）、『新集時用要字壹千叁佰言』、『諸難雜字一本』（P. 3109）、『難字』（P. 2948、S. 5690）等がある。

⁸ この種類は『千字文』、『開蒙要訓』、『李氏蒙求』等がある。

⁹ この種類は『百家姓』、『姓望書』（S. 5861）、『郡望姓氏書』（P. 3191）、『姓氏書』（P. 2995）、『姓氏錄』（北. 8418）、『姓氏雜寫』（P. 3070）等がある。

¹⁰ 汪泛舟編著『敦煌古代兒童課本』、甘肅人民出版社、2000年。

では字書と呼ばれている」と定義した¹。その後の同氏の「敦煌蒙書」にも同じ観点が見られている²。2002年、鄭阿財、朱鳳玉『敦煌蒙書研究』の中では、識字類蒙書を改めて「主に學童の識字を目的とした字書だ」と定義している³。また識字類蒙書として綜合識字類（『千字文』、『新合六字千文』、『開蒙要訓』、『百家姓』）、雜字類（『俗務要名林』、『雜集時用要字』）、俗字類（『碎金』、『白家碎金』）、習字類（『上大夫』）のように分けている。

鄭阿財、朱鳳玉に提出されている観点が前の研究より更に一步進んでいる。分類方法がより合理的である。特に雜字類と習字類の分類方法からは筆者を大いにな啓發を受けた。本論は鄭阿財、朱鳳玉の観点に基づき、敦煌寫本具體的な内容に合わせつつ、識字寫本中の『上大夫』、『上士由山水』、『千字文』、『正月孟春猶寒』、『敦煌姓氏雜録』、『開蒙要訓』を主な研究対象とする。『開蒙要訓』を除いて、他のは初學者の勉強教材として使われているが、學習中に使用する順序は同じではないと考える。本論では、『上士由山水』、『正月孟春猶寒』、『敦煌姓氏雜録』の内容を加えたが、『百家姓』及び雜字類、俗字類蒙書は検討していない。理由は下記通りである。『新合六字千文』は『千字文』の一種のため、『千字文』と一緒に検討する。『百家姓』が敦煌で知られたのは宋初である。『敦煌姓氏雜録』がこそ當時使用された姓氏教材である。『開蒙要訓』というのは、雜字類寫本の代表として知られ、寫本の量から見ると、雜字類で最も多く残されている。當時の雜字類寫本に対する學習過程及び學習目的をより反映しているだろう。そのため、本論では『開蒙要訓』を研究対象とする。『碎金』、『白家碎金』は俗字字典である。これらに対する學郎の學習寫本が未だ見当たらないため、本論では検討しない。『上士由山水』は『上大夫』を學習した後に使用する習字教材である。『正月孟春猶寒』は簡易な書儀であり、時令や手紙の學習で使われるものだが、識字教材と見なすこともできる。

本論では『上大夫』、『上士由山水』、『千字文』、『正月孟春猶寒』、『敦煌姓氏雜録』、『開蒙要訓』という難易度の順序で説明する。最初の啓蒙教育が習字から始まるのではないと考える。しかし、習字の前の段階について、敦煌文獻には記載されていないため、研究も困難である。敦煌識字寫本の内容は、習字や記憶或いは他の目的を持って書いたものである。そのため、學郎の習字段階から研究が可能である。『上大夫』、『千字文』、『開蒙要訓』寫本の中、同じ文字が複数回に書かれているものが見られている。それが習字の証據であろう。『正月孟春猶寒』、『敦煌姓氏雜録』の寫本の中で、前のように習字寫本が見られていないため、これらは習字教材ではなく、識字用のものだと分かる。『上大夫』寫本に書かれた文字が最も稚拙である。史料の分析から見ると、これは學郎習字用の最初の教材である。また、史料の記載により、『上士由山水』も習字教材として使われている。『上大夫』を練習する後の段階に使うのもであろう。『千字文』は當時で主要な識字、習字教材であり、字が多く、且つ複雑で、『上士由山水』を練習する後に使うのは普通であろう。『千字文』の勉強に通じて、習字能力が向上し、學習知識も勉強することができる。單純な習字から大量な識字に移る重要

¹ 鄭阿財「敦煌蒙書析論」、『第二屆敦煌學國際研討會論文集』、漢學研究中心編印、1991年、211-233頁。

² 鄭阿財「敦煌蒙書」、『敦煌與絲路文化學術講座』（第一輯）、北京圖書館出版社、2003年、128-152頁。

³ 鄭阿財、朱鳳玉『敦煌蒙書研究』、甘肅教育出版社、2002年。

教材である。『敦煌姓氏雜録』寫本の字から見れば、比較的に稚拙である。中の4件寫本に『上大夫』と一緒に書かれてあり、2件寫本に『千字文』と一緒に書かれてある。内容の難易度を考えると、一定の習字基礎を用いた學郎に對する教材であろう。『正月孟春猶寒』の寫本の中に、3件が『雜抄』と一緒に書かれている。『敦煌姓氏雜録』の勉強順序と近いだろう。『開蒙要訓』の文字が複雑で、難易度も高いである。寫本から見れば、上記述べた教材の後に使用するのである。この時期の學郎は一定の書寫能力を持ち、識字の量を擴大する段階になる。さらに習字能力も向上させ、將來の仕事のために準備しないとイケないであろう。

三 凡例

1. 敦煌文獻の所藏情報の提示方法を示しておく。

イギリスロンドン博物館藏敦煌文獻、スタイン(M. A. Stein) — 「S.」

イギリスロンドン博物館藏敦煌チベット文獻、Stein Tibetain — 「S. tib」

フランス國家圖書館藏敦煌文獻、ペリオ (P. Pelliot) — 「P.」

フランス國家圖書館藏敦煌チベット文獻、Pelliot Tibetain — 「P. tib」

ロシア科學院東方學研究所サンクトペテルブルク藏敦煌文獻 — 「Дх.」

イギリス元インド事務部圖書館藏敦煌文獻漢文部分 — 「ch.」

中國國家圖書館藏敦煌文獻 — 「BD」

北京大學圖書館藏敦煌文獻 — 「北大」

日本杏雨書屋藏敦煌文獻、羽田亨 — 「羽」

上海圖書館藏敦煌吐魯番文獻 — 「上圖」

臺灣中央研究院歷史語言研究所傅斯年圖書館藏敦煌遺書 — 「傅圖」

2. 文獻引用する際、下記のように略稱する。

『英藏』 — 『英藏敦煌文獻 (漢文佛經以外部分)』

『英敦』 — 『英國國家圖書館藏敦煌遺書』

『法藏』 — 『法藏敦煌西域文獻』

『俄藏』 — 『俄藏敦煌文獻』

『上圖』 — 『上海圖書館藏敦煌吐魯番文獻』




『國圖』 — 『國家圖書館藏敦煌遺書』

『北敦』 — 『國家圖書館藏敦煌遺書』

『經集』 — 『敦煌經部文獻合集』

3. 敦煌文獻を引用する時、卷號で表記した。例、S. 617 というのは、イギリスロンドン博物館藏敦煌文獻の番號 617 を指している。P. 3029 というのフランス國家圖書館藏敦煌文獻の番號 3029 を指している。引用した文獻がある卷號中の殘片の場合、p、p1、p2…で表示する。例、P. 3211p7、P. 3243p12。引用した文獻が寫本の背面にあるもの場合、卷號に「V」を追加する(「verso」の頭文字である)。例、P. 2738V、BD1942V。引用文獻が綴合された場

合、巻號の間に「+」で表示する。例、P. 3243+Дx. 19083R、Дx. 8107+Дx. 7902+Дx. 7861+Дx. 16781。

4. 校録と引用した敦煌文獻の中、寫本の文字が確認できない、或いは不完全の場合、「」で表示する。記號數は文字數と一致する。寫本に文字が欠けている場合、「□」で表示する。記號數は文字數と一致する。確認できない文字、完全に表示されていない文字や文字を欠けているところに、補うことができる場合、記號の後ろに（）をつけ、内容を補充する。例、 (索都衙)。寫本に脱字がある場合、[]で補う。例、「朱稱夜[光]」。寫本の文字に校正する場合、校正後の文字を（）に入れる。例、「文才比重仁（仲壬）」。寫本に確認できない文字の場合、直接に寫本の圖で表示する。例、「進退遊蓮」。

第一章 『上大夫』

敦煌寫本『上大夫』の全文は「上大夫、丘乙己。化三千、七十士。尔小生、八九子」である。南宋の『上大人』の全文は「上大人、丘乙己。化三千、七十士。尔小生、八九子。佳作仁、可知礼也」である。『上大夫』から『上大人』になって、内容が少し変わったが、用途は変更なく、學童の習字の寶典とされてきたようである。敦煌寫本『上大夫』の紹介について、1925年に劉復は『敦煌掇瑣』にP. 3145Vを校録した¹。ただ『上大夫』に關連する研究は遅かった。1987年になって王利器は劉復の校録した文から、4本の論文を相次いで發表し、大量の史料を引用して、『上大人』の流布、用途や文學の影響を紹介した²。劉銘恕は「上大人、丘乙己跋」に『上大夫』の傳播及び使用狀況を檢討し、敦煌寫本と宋代以降に残された本の異同が考察すべきだと言った³。鄭阿財、朱鳳玉は『上大夫』が習字類蒙書と指摘し、研究を進めた。彼らは7件の寫本を紹介し、新たに數點の資料を収集した。さらに、内容、用途、流布の面で王利器の觀點を繼續し、寫本の時代と俗文學に對する影響を檢討した⁴。劉長東は、先學の研究を踏まえ、寫本中の詩歌に注目し、『尚仕由山水』と『王子去求仙』等の五言詩は、『上大夫』と連携關係を持つ啓蒙教育の教材という觀點を提示した⁵。張涌泉主編『敦煌經部文獻合集』は15件の寫本を校録し、『牛羊千口』等が別の蒙書の内容と主張した⁶。海野洋平はかつて發見した20件の他⁷、さらに6件を發見し、P. 4900(2)とP. 3369Vを中心に、寫本の狀態を考察し、『上大夫』當初の内容及び變化を分析し、『牛羊千口』は『上大夫』の姉妹編として行われたものであることを指摘した⁸。また近年、丁志軍、徐梓、吳喬、鄧凱により『上大人』の用途や意味等多くの方面で研究が進められてきた⁹。

¹ 劉復輯『敦煌掇瑣』、國立中央研究院歷史語言研究所、1925年。黃永武博士主編『敦煌叢刊初集』第十五冊、新文豐出版公司、1985年、355頁。

² 王利器「跋敦煌寫本『上大夫』殘卷」、『文獻』1987年第4期、175-180頁。王利器「敦煌寫本『上大夫』殘卷跋尾」、『社會科學戰線』1990年第3期、322-324頁。王利器「試論『上大人』的用途」、『河北師院學報（社會科學版）』1992年第4期、122-125頁。王利器「『上大夫』備考」、『曉傳書齋集』、華東師範大學出版社、1997年、499-506頁。

³ 劉銘恕「敦煌遺書叢識」、杭州大學古籍研究所等編『敦煌語言文學論文集』、浙江古籍出版社、1988年、51-55頁。

⁴ 朱鳳玉「敦煌寫本蒙書『上大夫』研究」、『第五屆唐代文化學術研討會論文集』、麗文文化事業公司、2001年、87-104頁。鄭阿財、朱鳳玉『敦煌蒙書研究』、甘肅教育出版社、2002年、139-156頁。朱鳳玉『敦煌俗文學與俗文化研究』、上海古籍出版社、2011年、216-235頁。

⁵ 劉長東「論中國古代的習字蒙書—以敦煌寫本『上大夫』等蒙書為中心」、『社會科學研究』2007年第2期、188-194頁。

⁶ 張涌泉主編『敦煌經部文獻合集』第八冊『小學類字書之屬』、「訓蒙書抄（一）伯三一四五背」「訓蒙書抄（二）斯四一〇六背」、中華書局、2008年、4127-4142頁。

⁷ 海野洋平は先學の發見された寫本が21件と指摘され、S. 1313が含まれている。

⁸ 海野洋平「童蒙教材『上大人』の順朱をめぐって：敦煌寫本P. 4900(2)・P. 3369vに見る『上大人』黎明期の諸問題」、『歴史』第117號、2011年、1-29頁。「敦煌童蒙教材『牛羊千口』史料輯覽」、『一關工業高等專門學校研究紀要』第46號、2011年、7-30頁。「敦煌童蒙教材『牛羊千口』校釋—蒙書『上大人』の姉妹篇—」、『一關工業高等專門學校研究紀要』第47號、2012年、7-22頁。

⁹ 丁志軍「從習字訓蒙到大眾娛樂—論蒙書『上大人』功能的歷史演變」、『湖北民族學院學報（哲學社會科學版）』2012年第2期、123-126頁。徐梓「『上大人』淺說」、『尋根』2013年第6期、4-9頁。吳喬「從敦煌『上大夫』看唐代民間書寫」、『大眾文義』2013年第10期、62-63頁。鄧凱「『上大人』文本傳播中功能與涵義的變遷」、『中南大學學報（社會科學版）』2015年第5期、198-203頁。

先學によって発見された『上大夫』に関する寫本は 26 件、S. 747V、P. 4900 (2)、P. 2738V、P. 3369V、P. 3705V、S. 6960V、P. 2564V、P. 3797V、S. 5441、S. 5631V、P. 3145V、S. 1232V、S. 1472V、S. 4106V、S. 5754V、S. 6606V、S. 8668V、P. 2178V、P. 3806V、P. tib. 2219、BD1640、BD1774V、BD3955V、BD7089、Дx. 6050V、Дx. 8655V である。これに筆者が発見した 3 件 (S. 264V、S. 6019V、BD1745V) を加え、今日では 29 件となっている。

先學の研究により、『上大夫』の用途、流布、價值、影響等は、既に説明されている。寫本の状態については、海野洋平が 2 件のみ分析したが、残りの寫本は未だ十分に注目されていない。寫本の状態から、學郎がどのように『上大夫』を學ぶのかを見抜くことができる。また敦煌寫本では、『上大夫』と一緒に多くの内容が書かれているが、従来は『牛羊千口』、『上土由山水』だけが検討されてきたが、これらの内容は『上大夫』との関係について、さらに研究を進める必要がある。そして、劉銘恕は『上大夫』と『上大人』との異同を考察すべきだと指摘された。これについての研究が不足なので、『上大夫』から『上大人』までの變化の過程や原因を説明する必要もある。

一 『上大夫』の學習

敦煌寫本『上大夫』は宋代以降に『上大人』と變更された。その内容が一體どういう意味なのか。明清時代に既に意味を十分理解できず、あるいは個々人の理解によって説明されていた。

南宋・陳郁の『藏一話腴』は『上大人』の意味を以下のように自分の理解で説明している。

孩提之童才入學、使之徐就規矩、亦必有方、發於書學是也。故「上大人、丘乙己、化三千、七十士、尔小生、八九子、佳作仁、可知礼也」、殊有妙理。予解之曰：「大人」者、聖人之通稱也。在上有大底人、孔子是也。「丘」是孔子之名、以一個身己、教化三千徒弟、其中有七十二賢士、但言七十者、舉其成數也。「尔」是小小學生、八九歲底兒子、古人八歲始入小學也。「佳」者、好也。「作」者、為也。當好為仁者之人。「可」者、肯也。又當肯如此知禮節、不知禮、無以立也。若能為人知禮、便做孔子也做得。凡此一段也、二十五字、而「尔」字居其中、上截是孔子之聖也、下截是教小兒學做孔子。其字畫從省者、欲易於書寫、其語言葉韻者、欲順口好讀、「己」、「士」、「子」、「礼」四字音韻相葉也。「之」一字、乃助語以結上文耳。言雖不文、欲使理到、使小兒易通曉也。¹

上掲資料の下線部は、陳郁の『上大人』に對する意味の解釋である。これにより、陳郁が『上大人』が孔子であり²、「丘」が孔子の名であることを理解していたことが分かる。そして、

¹ (宋) 陳郁『藏一話腴』、(明) 陶宗儀等編『說郛三種』之『說郛』卷六十、上海古籍出版社、1988 年、911 頁。

² 敦煌寫本に「上大夫」と書かれてある。張涌泉主編『敦煌經部文獻合集』第八冊 (4130 頁) には、「孔丘は魯國の司寇と任職したことがあったため、上大夫と見なされる」とある。「上大夫」とは孔子を指摘している可能性が高いということである。

「丘乙己、化三千、七十士」の意味は孔子が一人で三千の弟子を教え¹、その中に七十二の賢士がいたということである²。「尔小生、八九子」の意味はあなた達が八九歳の學生であることである³。「佳作仁、可知礼也」というのは、學童が仁者になることが求められ、禮儀を知り、學習の目的を強調した。このように、『上大人』は儒家の勸學の意味を持っている。

ところで、『上大夫』の内容は簡単で、唐代には學童が最初に字を書く時の教材であった。當時に「半字」という言い方がある。

S. 1313 「大乘百法明門論開宗義記序釋」

言滿半滿於言派者、且如世小兒上學、初學『上大夫』等為半字、後聚多字成一字者、今盡識會為滿字。

「半字」とは、簡単な字のことを指し、「後聚多字成一字者」とは、簡単な字から複雑な字を構成させることができることを意味する。「滿字」とは円滿に理解できることで、學童が全ての字を認識すると、「滿字」の状態になるのである。

清代の王筠『教童子法』

蒙養之時、識字為先、不必遽讀書。先取象形、指事之純體教之。識「日」「月」字、即以天上日、月告之。識「上」「下」字、即以在上、在下之物告之、乃為切實。純體既識、乃教以合體字。又須先易講者、而後及難講者⁴。

ここで述べられた「純體」というのは「半字」のことである。漢字の構造から言えば、日、月、上、下四字は全て単一の構造であり、『上大夫』中の字と似ている。また「純體既識、乃教以合體字」から、「合體字」は「滿字」のことではないかと考えられる。また王筠は識字は容易な字から勉強するのであると言及した。

學童習字は、「描朱」あるいは「描紅」と呼ばれている。『上大人』は最初の習字の教材として用いている。具體的にどのように學ぶか、史料に記載されている。

南宋・陳元靚の『事林廣記』の丁集『速成門』中の『小兒寫字法』に『上大人』の學習方法が紹介される。

寫字時、先寫「上大」二字、一日不得過兩字。兩字端正、方可換字。若貪字多、必

¹ P. 3797V と Dlx. 8655V に、「丘一己」と書かれてある。陳郁の解釋と合致した。「一」という字が簡単過ぎて、又數字「一」と重複しているから、「乙」に変更されたと考えている。

² 「上大夫」寫本の中、「七十二」と書かれている寫本 16 件がある。より「七十二賢士」という陳郁の觀點を分かりやすくなる。

³ 寫本「上大夫」の 16 件に「女小生」と書かれ、3 件に「尔小生」と書かれてある。『集韻・語韻』「女、尔也、通作汝」。『古今韻會舉要・庚韵』「生、諸生弟子之称」。これらの解釋により、「尔小生」あるいは「女小生」の意味は「あなた達は學生である」という。

⁴ (清) 王筠『教童子法』、王雲五主編『叢書集成初編』、上海商務印書館、1937 年、1 頁。

筆劃老（潦）草、寫的不好。寫得好時、便放歸。午後亦上學¹。

ここでは、字を書き始める時、「上大」という2つの字から書き、一日に2つ以上の字を書かない、字をきちんと書き、キレイに書けるまで他の字に變えてはいけないということが述べられる。簡単な字であるが、厳しく練習を要求されたことが分かるのである。

では、敦煌の學郎は『上大夫』をどのように學ぶのか。學郎は入學したばかりで、年齢が若いので、字體がやや稚拙に見える。彼らは往々にして『上大夫』を寫本の餘白の所と背面に書き、紙を十分に利用して習字をした。師範は學郎達に1、2句だけ練習させる。例えば「上大夫、丘乙己」こちらの部分だけ練習させる。P. 2178V（圖1）では、「上大夫兵（丘）大大兵（丘）乙」が『燃燈文』の上邊に書かれている。BD1640（圖2）では、「上大夫丘乙己」が『維摩詰所說經』の上邊に書かれている。BD7089の「上大夫丘」は『妙法蓮華經』の上邊に書かれている。また、BD1745には「上大」、BD1774Vには「大夫丘」、S. 6019Vには「夫大丘」と書かれている。これらの寫本は全て初學者が練習したものと見られている。

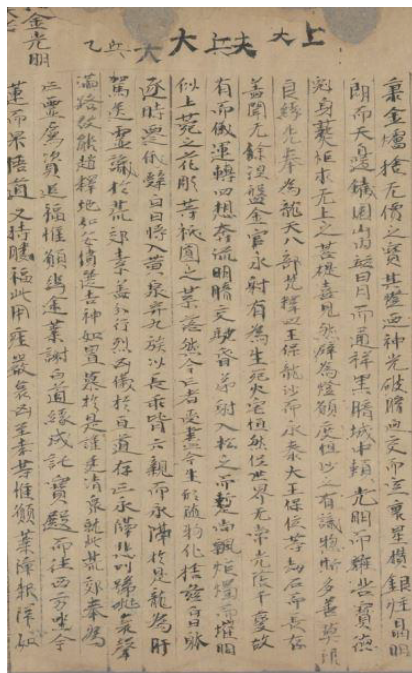


圖1 P. 2178V（部分）

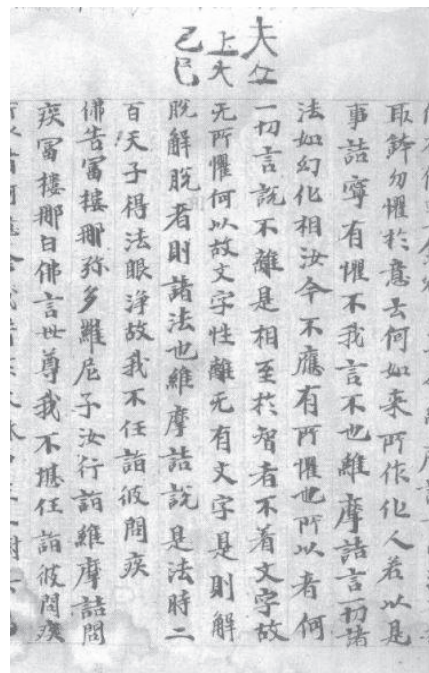


圖2 BD1640（部分）

習字は師範の教えから離れることができない。敦煌文獻の中に確認された數件の習字寫本からは、師範が範字を書き、學生は範字を模寫したことが分かる。P. 4900 (2)（圖3）は、敦煌文獻の中で唯一の『上大夫』の描朱として殘されている。

¹ （宋）陳元靚『事林廣記』、『和刻本類書集成』第一輯、上海古籍出版社、1990年、253頁。

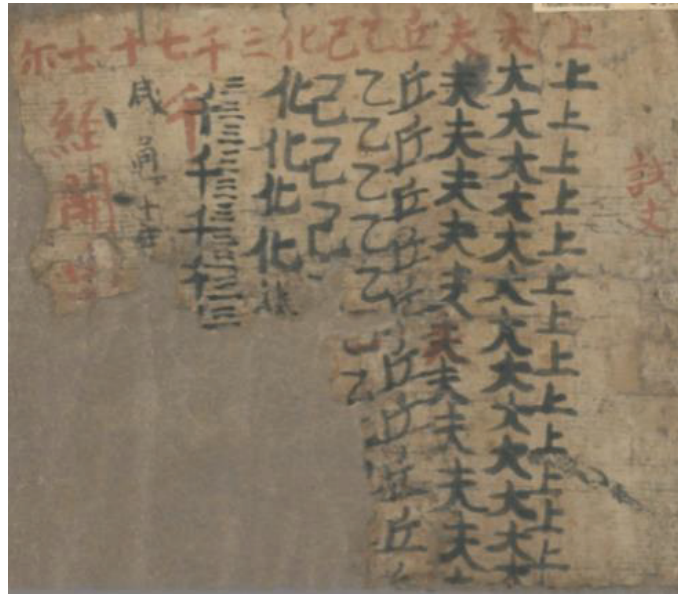


圖3 P.4900 (2)

この寫本により、初めに朱筆で「試文」を書き、各行ごとの首字も朱筆で書かれ、「上大夫、丘乙己、化三千、七十士、尔」の13字が残される。これが師範の範字なのであろう。範字ではあるが、書道の角度から見れば、精緻ではない。寫本は墨筆で範字の下に1文字ごとに1行が習字され、「千」字まで習字されている。「千」字の左側に朱筆の「千」字が書かれているのは、「千」の習字はここまでであると師範が書いたものであると推測している。その後、墨筆で「咸通十年」と書かれている。明らかに字體は前の習字より良好であり、師範の書いたものであるという可能性がある。最後に朱筆で書いた「經開」三字が残され、師範が學郎を励ました言葉であると推測する。習字の第3行「夫」、第5行「乙」、第6行「己」に朱筆の痕跡は學郎の習字を師範が改正したものだろう。これは『上大夫』の習字をしていた學郎に対するテストかもしれない。この寫本は「試文」と呼ばれている。

學郎はますます習字の數を増やして、『上大夫』の全文を書くだけでなく、他の内容も一緒に勉強することになる。S. 8668V (圖4) と S. 4106V (圖5) は、明らかに初學者が書いているもので、字體は非常に稚拙である。S. 8668V は『牛羊千口』と一緒に書かれている。S. 4106V には、『門來善遠』、『牛羊千口』、『上土由山水』、姓氏、數字、姓名が連続して書かれている。



圖4 S. 8668V

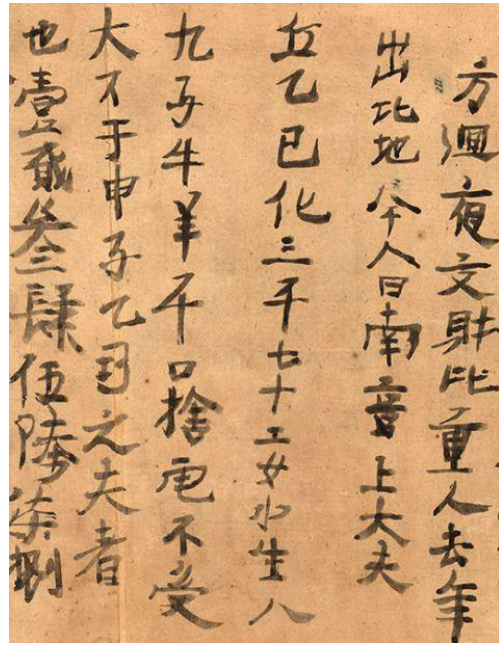


圖5 S. 4106V (部分)

その他、寫本に『上大夫』以外、BD3955の中に『敦煌姓氏雜録』が書かれている。

P. 2738Vの中には『千字文』、『尚想黃綺帖』、『正月孟春猶寒』、『牛羊千口』、「水」部首の詩、社司轉帖、敦煌の寺名と郷名等が連続して書かれている。

P. 3145Vの中には『牛羊千口』、『上土由山水』、『敦煌姓氏雜録』、姓名、敦煌の郷名等が連続して書かれている。

P. 3369Vの中には『牛羊千口』、『敦煌姓氏雜録』、姓名が連続して書かれている。

P. 3705Vの中には『牛羊千口』、『千字文』、『論語』、『正月孟春猶寒』、姓名、數字が連続して書かれている。

P. 3797Vの中には『牛羊千口』、『太公家教』が連続して書かれている。

S. 1232Vの中には『牛羊千口』が書かれている。

S. 1472Vの中には『牛羊千口』、社司轉帖、數字が連続して書かれている。

S. 5441の中には『捉季布傳文』、『王梵志詩』、數字が連続して書かれている。

S. 5631Vの中には『天生淳善』、『牛羊千口』、數字、社司轉帖が連続して書かれている。

以上の寫本では、『牛羊千口』、『上土由山水』、『千字文』、『敦煌姓氏雜録』、『正月孟春猶寒』、數字、社司轉帖の出現回数が多いため、それらは『上大夫』とほぼ同水準の教材として、初學者向けのものであったと考えられる。しかし、それらの用途はそれぞれである。『上大夫』、『牛羊千口』、『上土由山水』が専門の習字の教材として重視され、『敦煌姓氏雜録』、『正月孟春猶寒』、社司轉帖が比較的、識字の教材として應用を重視されていたと考えている。

數字も初學者の勉強の内容であり、基礎的な計算を學ぶ。『禮記』には、「六年、教之數與

方名」とある¹。子供が六歳の頃、数字と方位を學び始めたということである。『上大夫』はよく数字と一緒に書かれている。『上大夫』の寫本 P. 3705V には、「二一三四五六七八九十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九」と書かれている。S. 1472V、S. 5441 には「一二三四五六七八九十」と書かれている。S. 4106V の中に、「壹貳叁肆伍陸柒捌玖拾」とある。S. 5631V に「一二三四五六七十百千万億」とある。さらに『上大夫』に「化三千」「七十二」「八九子」の中で数字が残されている。これらの寫本により、『上大夫』と数字を結びつけて勉強するのは當時によくあったと考える。

『上大夫』と数字は、全て筆畫が簡單で、初學者の習字に適合されている。

元・謝應芳『龜巢稿』

字書之學訓者、率以『上大人』二十五字先之、以為點畫簡而易習也。…其末兩句之乖刺尤甚、故某不揣狂瞽、嘗易之數與方名、曰一二三四五六七八九十百千萬兆、曰東西南北上下左右前後、以字畫較之亦簡易也、待其手熟、即兼以壹貳叁肆伍陸柒捌玖拾伯阡萬字教之、以備公私計算之用²。

謝應芳は『上大人』の「佳作仁、可知礼也」という言葉が前文と非常に違和感があつて、数字と方位の内容に変更したという。元代の時に『上大人』と数字と一緒に勉強するという習慣が残されていたと言えよう。

『上土由山水』の内容は簡單で、初學者用の習字の材料であり、宋代以降に非常に流行していた。徐梓の『『上大人』淺說』に據れば、『『上大人』』はあまりにも短く、學生の習字は十分ではない。この 25 字を長期に單一、繰り返して書くと、飽きてしまうことがある。そこで内容が分かりやすく、筆畫の簡單な 2 首の五言絶句（『上土由山水』）を子供の習字に入れ、書く範圍を広げると、習字を深く考えることができ、學童の興味が引き起こし、『愛養』と『活機』の心遣いをすることもある」とある³。筆者も『上大人』の内容は短く、他の内容を補う必要があると考える。また、『上大夫』と『上土由山水』の中で、「上大夫」、「上土」、「中人」（「中人」は元「中土」で、重複の字「土」が避けられるため、「中人」に変更されたと推測している）というのは古代の官段である。『禮記・王制』には、「王者之制禄爵、公、侯、伯、子、男、凡五等。諸侯之上大夫卿、下大夫、上士、中士、下士、凡五等」とある⁴。これが、『上大夫』と『上土由山水』と一緒に書かれている理由の 1 つであると考えられる。

ある年齢の大きい學郎やその他の身分の人は、『上大夫』を勝手に書いたことがあり、書法が比較的良好と言われている。例えば、S. 264V『付法傳』の餘白の「上大夫」（3 字しか書か

¹ （漢）鄭玄注、（唐）孔穎達疏、龔抗雲、王文錦審定『禮記正義』卷二八、李學勤主編『十三經注疏』、北京大學出版社、1999 年、869 頁。

² （元）謝應芳『龜巢稿』卷十四、『影印文淵閣四庫全書』第一二一八冊、臺灣商務印書館、1986 年、329 頁。

³ 徐梓『『上大人』淺說』、6 頁。

⁴ （漢）鄭玄注、（唐）孔穎達疏、龔抗雲、王文錦審定『禮記正義』卷一一、李學勤主編『十三經注疏』、330 頁。

れない) や S. 5754V の「己、化三千、七十二」や P. 3806V の『上大夫』(全文) 等の書體が比較的良い。

寫本には『牛羊千口』の出現回数が最も多い。では『上大夫』とはどのような関係があるのだろうか。

二 『上大夫』と『牛羊千口』の関係

敦煌の『上大夫』寫本のうち、全文が残されているものは S. 4106V、S. 5631V、P. 3145V、P. 3806V の 4 件である。P. 3806V の結末が「可知其礼也」である以外、S. 4106V、S. 5631V、P. 3145V では「八九子」の後に「牛羊千口、舍宅不售、大王下首、甲子乙丑、之乎者也」の内容がある¹。また、文章の内容は不完全であるが、「八九子」の後に『牛羊千口』が書かれている寫本が 10 件残されている。具體的には以下の表に纏める。

寫本番號	P. 2738V	P. 3369V	P. 3705V	P. 2564V	P. 3797V	S. 1232V	S. 1472V	S. 8668V	P. tib. 2219	Дх. 6050V
「八九子」後の内容	牛☒(羊)	不受(售)、甲 牛☒(羊)万口、舍宅	牛羊千口	者也 牛羊千口、舍宅…之乎	牛羊千口、宅字	不受(售) 牛☒(羊)千口、舍宅	羊(牛)羊千口、舍	牛羊	牛	牛羊千☒☒(口)

全 13 件寫本の中で、寫本の半分を占めているのは『上大夫』と『牛羊千口』が一緒に書かれているものである。

張涌泉の觀點によれば、『牛羊千口』というのは別の蒙書であるという。一方、海野洋平は、これらが『上大夫』の姉妹篇であると主張している。確かに、宋代の『上大人』の全文は「上大人、丘乙己、化三千、七十士、尔小生、八九子、佳作仁、可知礼也」であり、『牛羊千口』がなかった。それに、『上大夫』は 3 字 1 句から成り、「止」が押韻されている。『牛羊千口』は 4 字 1 句から成り、「厚」「宥」「有」が押韻されている。この点から見れば、両者は関係のない 2 つの蒙書だろう。しかし、何故 13 件の寫本にも、両内容が一緒に書かれているのか。一體どのような関係があるのか。

『上大夫』と『牛羊千口』は同じレベルの習字教材である。

『上大夫』は 18 字から成り、筆畫が簡單で、學童の習字に利用されている。『牛羊千口』

¹ S. 4106V に「牛羊千口、捨(舍)宅不受(售)、大[王]下于(手)、申(甲)子乙丑、之夫(乎)者也」が書かれている。

は25字から成り、筆畫も比較的簡單で、同じく學童の習字に利用されていると言える。

「牛羊千口、舍宅不售、大王下首、甲子乙丑、之乎者也」の中では、「舍宅不售」という言葉を除いて、残りの字は全て比較的簡單で、「半字」と見なすことができる。特に「之乎者也」という4字が、作文する時欠かせないものであると言える。「半字」・「滿字」という言い方にも適している。

『上大夫』は儒家勸學の意味を持っている。では『牛羊千口』はどのような意味があるのだろうか。宋代以降、『牛羊千口』という語句は消えてしまった。そのため、現在ではこれを説明しようとしても困難なところがある。海野洋平は『牛羊千口』を研究する際、敦煌文獻に見られる「牛羊」・「千口」・「舍宅」・「大王」等の語句を調べていた¹。これにより、確かにこれらが當時によく使われた言葉であることが確認されたが、具體的な意味ははっきり説明されていない。

「牛羊千口」は、ある寫本に「牛羊万口」と書かれ、牛と羊が多く、豊かさを意味すると考える。

「舍宅不售」は、ある寫本に「舍宅不受」と書かれ、「售」と「受」は敦煌文獻の中でよく普通假借字として用いられていた。そのため、「舍宅不售」の意味としては、字面のまま、家宅を賣らないと理解できる。唐代の詩人寒山が「教汝數般事、思量知我賢。極貧忍賣屋、才富須買田」という詩を残している。「昔の人の考え方に、『賣屋』というのは家を没落させると思われていた」とは項楚の説明である²。従って、「極貧忍賣屋」一文から、「舍宅不售」の意味を推測することができる。これはどれだけ貧しくなっても住む所を賣ることはいけないと學郎に教えているのである。

「大王下首」は、ある寫本に「大王下手」と書かれ、「下首」と「下手」はいずれも地位の低い一方を指している。では「大王」は誰のことであろうか。1つ目に、君主あるいは諸侯王に對する敬稱のことである。敦煌文獻によると、歸義軍節度使は「大王」と呼ばれている。2つ目に、佛陀のことである。3つ目に、王羲之のことである³。4つ目に、周文王の祖父古公亶父を「大王」と呼ぶことがある。つまり、「大王」は社會的に地位の高い人や敬慕される人を指していると判断できる。「大王下首」というのは、社會的に地位の高い人と地位の低い人を意味しているのであろう。

「甲子乙丑」は、天干地支の略稱である。詩人の李白は「五歲誦『六甲』」と述べる⁴。「六甲」とは、六十甲子である。敦煌蒙書『孔子備問書』には「問曰：六十甲子。」「甲子、乙丑、丙寅、丁卯、戊辰…辛酉、壬戌、癸亥也」とある。敦煌文獻「六十甲子」に關する寫本は、S. 1815V、S. 3287、S. 3724V、P. 2255V、P. 3984V、P. 4711、BD490V、P. 2249V、P. 2556V、P. 2609V、P. 3305V、Дx. 2898、Дx. 5890V等が残されている。

¹ 海野洋平「敦煌童蒙教材『牛羊千口』校釋一蒙書『上大人』の姉妹篇一」、『一關工業高等專門學校研究紀要』第47號、7-22頁。

² 項楚『寒山詩注』、中華書局、2000年、384頁。

³ (唐)李綽撰、蕭逸校點『尚書故實』：「太宗酷好法書、有大王真跡三千六百紙」(『唐五代筆記小説大觀』上海古籍出版社、2000年、1158頁)。

⁴ (清)王琦注『李太白全集』卷二六『上安州裴長史書』、中華書局、1977年、1243頁。

「之乎者也」は、語氣助詞である。『千字文』の終わりに「謂語助者、焉哉乎也」という。作文する時の古人はこの言葉から離れられないと言える。古い諺に「之乎者也矣焉哉、用得成章好秀才」ともあった。

以上の5つの言葉の意味を纏めると、富貴であろうと貧乏であろうと、高貴であろうと低安であろうと、「甲子乙丑」「之乎者也」等の知識を學ばなければならないという意味になる。つまり、『牛羊千口』を用いることは識字させると同時に、學郎を励ますことができ、儒家の勸學効果がある。

次に、二者は仄聲で終わる。

『上大夫』は3字1句から成り、『牛羊千口』は4字1句から成る。下の圖のように。前者の「己」「士」「子」の3字は、いずれも上聲止韻に属されている。後者の「口」が上聲厚韻であり、「售」が去聲宥韻。「首」「丑」が上聲有韻であり、「也」が上聲馬韻である。兩者の韻目が違っているが、同じく仄聲で終わるため、読みやすいと考えている。

● [○] 上大夫、● [○] 丘乙己。(「己」上聲止韻)	● [○] 牛羊千口、(「口」上聲厚韻)
● [○] 化三千、● [○] 七十士。(「士」上聲止韻)	● [○] 舍宅不售、(「售」去聲宥韻)
● [○] 尔小生、● [○] 八九子。(「子」上聲止韻)	● [○] 大王下首、(「首」上聲有韻)
	● [○] 甲子乙丑、(「丑」上聲有韻)
	● [○] 之乎者也。(「也」上聲馬韻)

それが、『上大夫』が『牛羊千口』と一緒に書かれた理由と言えよう。13件の寫本の中で、全ての書き順が固定され、『牛羊千口』は必ず『上大夫』の後にある。もし、2つのが独立した内容であれば、13件全ての寫本で、前後を固定することもないだろう。S. 4106V と P. 3145V を例にすると、2つの寫本に同じく『上大夫』と『上土由山水』が書かれてある。S. 4106V では、『上土由山水』が『上大夫』の前に書かれている。P. 3145V には、『上土由山水』が『上大夫』の後に書かれている。兩者の書く順番が自由で、明らかに2つの蒙書と分かる。また、S. 1472V と S. 5631V を例にすると、2つの寫本に同じく『上大夫』と數字が書かれてある。S. 1472V では、數字が S. 1472V の前にある。S. 5631V では、數字が『上大夫』の後にある。兩者の書く順番も自由である。『上大夫』と『牛羊千口』の寫本については、兩者の書く順が逆さになっている寫本は未だ見られていない。今まで研究された敦煌文獻の中に、『牛羊千口』が単独で現れた寫本も見られていない。當時の敦煌では、『上大夫』と『牛羊千口』を一體として見なされていると考えられる。

『上大夫』は、6句の18字で、全體として纏まった意味があるが、あまりにも短い。徐梓は「短い蒙書に對して、前或いは後に内容を加えられ、直接に他の内容をその中に入れる

さえことが、古代の啓蒙教材の使用過程でよくある場合である」と考えている¹。当時の師範は『上大夫』が教材として短過ぎるため、同じく教育の意味を持つ『牛羊千口』を合體させ、新しい蒙書にしたと推測する。

三 『上大夫』の兩バージョンと『上大人』の関係

敦煌寫本『上大夫』の 29 件は、少ない字しか残されていない寫本を除き、よく見ると、實は内容が同じではないところがある。また、宋代以降の『上大人』は、『上大夫』とどのような関係があり、内容にどんな變化があるかを検討する必要がある。

(一) 敦煌寫本『上大夫』についての相違點

『上大夫』の全文は、「上大夫、丘乙己、化三千、七十士（或いは「七十二」）、尔小生（或いは「女小生」）、八九子」。寫本により、「七十士」と「七十二」、「尔小生」と「女小生」2つの箇所に相違點がある。このことについては徐梓が既に言及していたが、検討が行われていない²。「二」と書かれている寫本は 16 件ある。「士」と書かれているの寫本は 3 件ある。そして、「女」と書かれている寫本は 16 件、「尔」と書かれている寫本は 3 件ある（その中の P. 3806V には「二小生」と書かれ、「尔小生」に校正できる）。寫本の書かれた年代と関連内容を次のように挙げる。

寫本番號	寫本の書かれた年代	関連内容
S. 747V	元和十二年 (817)	七十二、女小生
P. 4900 (2)	咸通十年 (869)	七十士、尔
P. 2738V	咸通十年 (869)	七十二、女小生
P. 3369V	乾符三年 (876)	七十二、女小生
P. 3705V	中和二年 (882)	七十二、女小生
S. 6960V	同光三年 (925)	[七]十二、女少(小)生
P. 2564V	同光三年 (925)	七十二、女小生
P. 3797V	太平興國二年 (977)	七十二、女小生
S. 5631V	太平興國五年 (980)	七十二、女小生
P. 3145V	端拱元年 (988)	七十二、女小生
S. 1472V	10 世紀前期	七十二、女小生
S. 4106V	10 世紀中後期	七十二、女小生
P. 3806V		七十士、二(尔)小生
S. 5754V		七十二、女
S. 1232V		七十二、女小生

¹ 徐梓『『上大人』淺説』、6 頁。

² 徐梓『『上大人』淺説』、6 頁。

P. tib. 2219		七十二、女小生
Дx. 6050V		七十二、女小□ (生)
S. 6606V		七十士、女小子
Дx. 8655V		七十二、尔

この表により、P. 4900 (2) と P. 2738V の書かれた年代は咸通十年であり、P. 4900 (2) は「七十士、尔小生」と書かれ、P. 2738V は「七十二、女小生」と書かれている。当時の敦煌地域では2つのバージョンが同時に流行していたのであろう。また、S. 6606V と Дx. 8655V から、「七十士、女小生」と「七十二、尔小生」という混用の書き方が見られている。寫本の中で「二」と「女」が書かれていた件数が多く、敦煌地域では主に「七十二、女小生」のバージョンが流行していたという。

前文の通り、「己」、「士」、「子」はいずれも上聲止韻であり、「二」は去聲至韻である。「士」と「二」は仄聲だが、韻律の視角から見ると、「士」のほうがより『上大夫』の韻律に合わせていることが分かる。従って、「七十士」は最初のバージョンであり、「七十二」は學郎に「七十二賢士」のことを理解しやすくするために変えられていた。「女小生」の「女」は人稱代詞であり、「汝」にも書かれている。敦煌の變文では、「女」がよく使われ、「尔」の人稱代詞としての使い方は未だ確認されていない¹。当時の敦煌は「女」が普段に使われていたと考えられている。『上大夫』は敦煌が傳わると、郷に入っては郷に従い、「尔小生」が「女小生」になった可能性がある。

唐五代の時期に、『上大夫』は既に『上大人』に変更されていた。P. 3806 には、「上大夫、丘乙己。化三千、七十士。二 (尔) 小生、八九子。可知其礼也」とある。最後に「可知其礼也」とあるのは『上大人』に近い。

(二) 『上大夫』と『上大人』の関係

宋代以降の『上大人』の全文は、「上大人、丘乙己。化三千、七十士。尔小生、八九子。佳作仁、可知礼也」である。「丘乙己」の「己」、「七十士」の「士」、「八九子」の「子」、「可知礼也」の「礼」は、4字が上聲止韻であり、全て仄聲である。『上大人』の「人」、「化三千」の「千」、「尔小生」の「生」、「佳作仁」の「仁」は全て平聲である。「人」と「仁」が上平眞韻であり、「千」が下平先韻であり、「生」が下平庚韻であり、韻目は同じではないが、讀むと、リズムを感じられる。

最初の『上大夫』と『上大人』の相違点について、敦煌寫本には全て「夫」として書かれているが、宋代以降の文獻では「人」になる。年代から見れば、『上大夫』が先にあり、後に『上大人』が現れたと考えている。「人」と「佳作仁」の「仁」は同じ韻目である。「佳作仁」一文が増やされる時に「夫」が「人」になったのかもしれない。

¹ 筆者は敦煌變文の資料を調べて見ると、「女」は人稱代名詞として多く使われていることが発見されたが、「尔」は人稱代名詞として使われている例が未だ見つかっていない。

『上大夫』の内容は少なく、意味が不完全で、敦煌に『牛羊千口』と結びついて使われていた。最後に「佳作仁、可知礼也」という句が加えられて、全文は3文字で、リズムが統一されているだけでなく、子供に読みやすく、それに意味が完全になっている。P. 3806の終わりの「可知其礼也」から、『上大夫』は唐末五代に變化が始まったと分かる。南宋の陳郁の『藏一話腴』により、大體南宋の時に『上大人』が既に成形されていたと推測されている。

小結

敦煌の寫本から見ると、『上大夫』は初學者用であり、習字の起點であると言える。學郎は、寫本正面の餘白と背面を利用して習字し、少ない内容から全文に至るまで習字を行っていた。敦煌文獻の中に最も早い『上大夫』の「描朱」という寫本が保存され、當時の師範はどのような學郎に習字を教えていたのかを推測できる。學郎は師範の範字を模寫していた。師範は學郎の習字の状況によって評價を行っていた。『上大夫』はあまりにも短くて、單一を避けるため、師範は學郎に『上大夫』、『牛羊千口』、數字等を結びつけて練習させ、學郎の勉強に対する興味を高めるようになってきた。

敦煌寫本には、『上大夫』の後に『牛羊千口』がしばしば見られている。當時は『上大夫』と『牛羊千口』を一體にして、使っていたと考えている。傳世文獻には『牛羊千口』の記載がなく、敦煌文獻のみで見られている。この面白い現象は敦煌地域だけで流行していたのだろう。敦煌寫本では、『牛羊千口』の全文を書き上げたのは3件だけ見られている。一般的に「牛羊千口、舍宅」までが書かれ、後ろの部分を書きたくないだろうと考える。

敦煌寫本『上大夫』の内容について、寫本の間に相違点がある。ある寫本は「七十二、女小生」と書かれており、ある寫本は「七十士、尔小生」と書かれている。後者の方が『上大夫』の原容に近いと考えている。これは後世の『上大人』との類似からも分かる。時代によって、『牛羊千口』が消え、「八九子」の後に「可知其礼也」(P. 3806V)が現れた。南宋から『上大人』が出現し、最後には「佳作仁、可知礼也」となって、勸學の意味はより補完されている。

『上大夫』は宋代以降の識字教育に大きな影響を與えたが、唐五代の傳世文獻には何の記載もない。これより見て晩唐の民間文人や師範が創作した可能性があると考えて良いであろう。その内容は孔子とその三千弟子に教えることに関係があり、學郎に高尚な徳行を持つ人になることを励ましており、明らかに儒家勸學の意味がある。明清時代においては、文人と師範はもはや『上大人』の本來の意味が分からず、爲に様々な説が生まれた。何故なら、『上大人』の習字の機能だけがますます重視されたからで、本來の意味はもはや重要ではないと考えられたためである。

第二章 『上士由山水』

『上士由山水』は14句の五言詩から成る。宋代以降の史籍によれば、主に學童の習字教材として使われた文獻である。敦煌文獻にこれまでP. 3145V、S. 4106V、P. 2896V、P. tib. 2219V四件の寫本が発見されており、中でもP. 3145Vの内容は完全である。朱鳳玉「敦煌寫本蒙書『上大夫』研究」、鄭阿財、朱鳳玉『敦煌蒙書研究』では、『上大夫』に關する寫本を紹介するにあたって、P. 3145V、S. 4106V『上士由山水』の一部に校録を行っており¹、張涌泉主編『敦煌經部文獻合集』（第八冊）の「訓蒙書抄」（一）（二）は、P. 3145VとS. 4106Vの詳細な校録を行っている²。また、劉長東「論中國古代的習字蒙書—以敦煌寫本『上大夫』等蒙書為中心」は、『上士由山水』の前半部分（「上士由山水」から「文才比重仁」まで）の意味を検討し、道家思想の色彩を持ち、習字用の文獻であることを指摘した³。筆者は『上士由山水』が『上大夫』と同じように初學者向けの基礎的な習字教材であり、儒家の勸學の意義を持っている文獻であると考え。また劉長東が行った『上士由山水』に對する解釋は、再考の餘地があると考え。『上士由山水』の寫本の原始的な様相、及び使用狀況を明らかにすることによって、我々は、敦煌學郎の習字教育に更に深く理解することができるだろう。また、敦煌とトルファン文獻の習字に關する寫本のうち、詩歌が残されているものに注目することで、詩歌が啓蒙教育の中で果たした作用についての認識を深めたいと考える。

一 寫本の概要

1. P. 3145V

卷子。正面には17行が残され、非實用的な社司轉帖である。識語「戊子年閏五月録事張」が書かれている。先學により、唐から宋初にかけて、北宋の端拱元年（988）だけ閏五月があることが知られる⁴。背面には20行が残され、『上大夫』、『牛羊千口』、『上士由山水』、官職、姓名、僧官、敦煌の郷名、『敦煌姓氏雜録』の内容が連続して書かれている。筆跡により、正面と背面の書寫者は同一人であろう。また、背面の書寫年代は正面と同じく988年である。

2. S. 4106V

卷子。正面には249行が残され、『佛說法句經一卷』である。背面には76行が残され、字

¹ 朱鳳玉「敦煌寫本蒙書『上大夫』研究」、『第五屆唐代文化學術研討會論文集』、麗文文化事業公司、2001年、88頁。鄭阿財、朱鳳玉『敦煌蒙書研究』、甘肅教育出版社、2002年、140頁。朱鳳玉『敦煌俗文學與俗文化研究』、上海古籍出版社、2011年、217頁。

² 張涌泉「訓蒙書抄（一）伯三一四五背」「訓蒙書抄（二）斯四一〇六背」、『敦煌經部文獻合集』第八冊『小學類字書之屬』、中華書局、2008年、4127-4142頁。

³ 劉長東「論中國古代的習字蒙書—以敦煌寫本『上大夫』等蒙書為中心」、『社會科學研究』2007年第2期、188-194頁。

⁴ 竺沙雅章「敦煌出土『社』文書的研究」、『中國佛教社會史研究』（増訂版）、朋友書店、2002年、482-483頁。藤枝晃「敦煌曆日譜」、『東方學報』（京都）第45號、1973年、431頁。郝春文「敦煌寫本社邑文書年代匯考（二）」、『首都師範大學學報（社會科學版）』1993年第5期、79頁。海野洋平「敦煌童蒙教材『牛羊千口』史料輯覽」、『一關工業高等專門學校研究紀要』第46號、2011年、27頁。

體が非常に稚拙で、初學者の習字であろう。『門來善遠』、「壹貳叁肆伍陸柒捌玖拾」、『上士由山水』、『門來善遠』、『上士由山水』、『上大夫』、『牛羊千口』、「壹貳叁肆伍陸柒捌玖拾」、『敦煌姓氏雜錄』、姓名が連続して書かれている。『上士由山水』は、2編が書かれており、2編とも8句、「今日入南音」までと書かれている。海野洋平の推測によると、背面の書寫年代が9世紀或いは10世紀であるという¹。背面により、「令狐進子」という姓名はS. 2517『佛說呪魅經』(10世紀)²、S. 3982『癸亥年至乙丑年月次當番人納役簿』(963、964年)、Dx. 4278『十一郷諸人付麵數』(915或975年)という3つの寫本にも見られているので、書寫年代は10世紀中後期であると判断できる。

3. P. 2896V

卷子。正面は『大乘密嚴經』である。背面は于闐語で『善財譬喻經』、『于闐使臣上于闐朝廷書』、『抒情詩』が書かれ、漢字で餘白に「上士由山水」(五字のみ)と「從德」(字體は于闐語と同じである)、硬筆で「侯司空」「夫聞」「太子上興」「勅」等の語句が書かれている。

4. P. tib. 2219V

卷子。この寫本は元々P. 2415『七階佛名經』の修補紙であり、番號はP. 2415p5であった。正面には3行が残され、「三千、七十二、女小生、八九子、牛」(1行)、チベット語(2行)が書かれている。背面には2行が残され、硬筆で「坐竹林、王」、「張之中」と書かれている。両面の字體により、書寫者が同一人であることが確認できない。

二 『上士由山水』の内容

P. 3145VとS. 4106Vを中心に、『上士由山水』の具体的な内容を見よう。S. 4106に誤字が多く、且つ内容が不完全のため、P. 3145Vに基づいて、『上士由山水』を校録する。

上士由山水、中人坐竹林。天(王)生自有性、平子本留心。立行方回也、文才比重仁(仲壬)³。去年出北地、今日入南陰。未申孔父志、且作丁公吟。戸内三史、門前出五音。若能求白玉、即此是黄金。

全文は14句であり、押韻しており読みやすい。さて、『上士由山水』の意味を見てみよう。

「上士」、「中人」(「中人」は元「中士」で、重複の字「士」が避けるため、「中人」に変更されたと推測する)というは古代の官段である。『老子』には、「上士聞道、勤而行之。中士聞道、若存若亡。下士聞道、大笑之」とある⁴。「上士」と「中人」は、徳行の高い人を指

¹ 海野洋平「敦煌童蒙教材『牛羊千口』史料輯覽」、『一關工業高等専門學校研究紀要』第46號、24頁。

² S. 2517、S. 3982、Dx. 4278の書寫時代については土肥義和『八世紀末期～十一世紀初期・敦煌氏族人名集成一氏族人名篇・人名篇』からである(汲古書院、2015年)。

³ 『廣韻』により、「仁」が平聲眞韻であり、「壬」が平聲侵韻である。『上士由山水』の中で、句末の「林」、「心」、「陰」、「吟」、「音」、「金」は全て平聲侵韻である。従って、「壬」は「仁」より『上士由山水』の韻律に合わせると考えている。

⁴ 朱謙之撰『老子校釋』、中華書局編輯部編『新編諸子集成』(第一輯)、中華書局、1984年、166-167頁。

している。「上士由山水、中人坐竹林」という内容の中には、道德の高い人になるようにという學郎に対する期待が含まれていると見られる。

劉長東は「天生自有性、平子本留心」に對して、戰國時の韓平子の物語（『説苑・敬慎』¹）であると説明した²。「人は生まれつきに剛健と柔弱な所があるが、韓平子は柔弱性にポジティブな効用に気づいた」という。この説には再考の餘地がある。まず、韓平子の事績については史籍に記載が少なく、典型的とは言えない。そして、『説苑・敬慎』により、剛健と柔弱の關係に柔弱性にポジティブな効用に気づいたことは叔向の觀點であり、韓平子はそれに賛成しただけである。また、剛健と柔弱の説は學郎にとって難しいので、初學者に適合していないと考える。

「天（王）生自有性」について、S. 4106V に「王生自有性」と書かれ、『水東日記』にも「王生自有性」³とある。従って、「王生」の方が正しいと見られる。「王生」と「平子」は人名である。かつてはよく姓氏が王という人のことを王生と呼ぶことから、王生という有名な人がいたのであろう。

『漢書・張釋之傳』

王生者、善為黃老言、處士。嘗召居廷中、公卿盡會立、王生老人、曰「吾襪解」、顧謂釋之：「為我結襪。」釋之跪而結之。既已、人或讓王生：「獨奈何廷辱張廷尉如此。」王生曰：「吾老且賤、自度終亡益于張廷尉。廷尉方天下名臣、吾故聊使結襪、欲以重之。」諸公聞之、賢王生而重釋之⁴。

王生という老人が、ある日解けた靴下を張釋之に結んでももらいたいと言い、張釋之が跪いて結んだことであるという。このことによって、王生の思い通り張釋之は老人を尊敬することで重視されるようになり、王生も賢名を得た。史籍にはこの物語が多く記載されている。

『晉書・庾峻傳』には、「以釋之之貴、結王生之襪於朝、而其名愈重」とある⁵。『魏書・釋老志』にも、「（崔）浩事天師、拜禮甚謹。人或譏之。浩聞之曰『昔張釋之為王生結襪。吾雖才非賢哲、今奉天師、足以不愧于古人矣』」とある⁶。また、『長短經』、『唐摭言』及び『藝文類聚』、『太平御覽』等にも記載されており、詩歌にも引用されている。唐人許渾『灞上逢元九

¹ 『説苑・敬慎』には、「韓平子問于叔向曰：『剛與柔孰堅。』對曰：『臣年八十矣、齒再墮而舌尚存。老聃有言曰：「天下之至柔、馳騁乎天下之至堅。又曰：人之生也柔弱、其死也剛強。萬物草木之生也柔脆、其死也枯槁。因此觀之、柔弱者生之徒也、剛強者死之徒也。」夫生者毀而必復、死者破而愈亡、吾是以知柔之堅於剛也。』平子曰：『善哉。然則子之行何從。』叔向曰：『臣亦柔耳、何以剛為。』平子曰：『柔無乃脆乎。』叔向曰：『柔者紐而不折、廉而不缺、何為脆也。天之道微者勝。是以兩軍相加、而柔者克之、兩仇爭利、而弱者得焉…』平子曰：『善』とある（（漢）劉向撰、向宗魯校證『説苑校證』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1987年、245頁）。

² 劉長東「論中國古代的習字蒙書—以敦煌寫本『上大夫』等蒙書為中心」、『社會科學研究』2007年第2期、191頁。

³ （明）葉盛撰、魏中平點校『水東日記』、中華書局、1980年、106頁。

⁴ 『漢書』卷五十、中華書局、1962年、2312頁。

⁵ 『晉書』卷五十、中華書局、1996年、1393頁。

⁶ 『魏書』卷一一四、中華書局、1974年、3053頁。

處士東歸』には、「何人更結王生襪、此客虛彈貢氏冠」¹、薛逢『上吏部崔相公』には、「公車未結王生襪、客路虛彈貢禹冠」とある²。これらから見ると、王生が張釋之に靴下を結んでもらう物語は後世に美談とされた。その後王生も名流千古になった。「王生自有性」というのはこの物語を指す可能性が高く、學郎が王生のように賢明な人になるよう説くものであったと考える。

「平子本留心」中の「平子」は「王生」に對應できる有名な人であろう。宋代の前に「平子」に關する有名な人の中に、晋代の王澄が指摘された可能性が高い。王澄の字は平子である。王澄の兄王衍は當時、かなり有名な評者であり、王澄、王敦、庾敳に對して、「阿平第一、子嵩第二、處仲第三」と評した。王澄が一番偉いことが分かった。しかし、王澄は非常に傲慢である。彼は荊州刺史をしている間、「日夜縱酒、不親庶事。雖寇戎急務、亦不在懷」と見られた。

『晉書・王澄傳』

會元帝征澄為軍諮祭酒、於是赴召。時王敦為江州、鎮豫章、澄過詣敦。澄夙有盛名、出於敦右、士庶莫不傾慕之。兼勇力絕人、素為敦所憚。澄猶以舊意侮敦。敦益忿怒、請澄入宿、陰欲殺之。而澄左右有二十人、持鐵馬鞭為衛、澄手嘗捉玉枕以自防、故敦未之得發。後敦賜澄左右酒、皆醉、借玉枕觀之。因下床而謂澄曰：「何與杜弢通信？」澄曰：「事自可驗。」敦欲入內。澄手引敦衣、至於絕帶、乃登于梁、因罵敦曰：「行事如此、殃將及焉。」敦令力士路戎扼殺之、時年四十四、載屍還其家。劉琨聞澄之死、歎曰：「澄自取之」³。

晋元帝は王澄を軍諮祭酒として杜弢を討伐すると命じた。赴任中、江州を通る時、豫章の王敦に訪問した。しかし、王澄は王敦を侮辱して、殺害された。殺された罪名は杜弢と通信したことがあるという。劉琨は王澄のことを自業自得と言った。

『晉書』は王澄に對して「肆情傲物、對鏡難堪、終失厥生、自貽伊敗」と評した⁴。王澄の傲慢は失敗の重要な原因であろう。「平子本留心」中の「留心」というのは注意ということである。この一句の意味は王澄のような傲慢ではいけなく、いつも注意しなければならない、ということである。

「立行方回也、文才比重仁（仲壬）」について、劉長東の觀點によると、「回也」というのは孔子の弟子顔回であり、「仲壬」は後漢の王充であるという。「習字蒙書が顔回と仲壬を選んで目的は學郎の志を立てさせるためであり、徳行と學問の面で二人のように励んでいる」と述べる⁵。「行」は徳行である。「立行方回也」というのは徳行の面で、學郎は顔回のように

¹ 『全唐詩』卷五三四、中華書局、1960年、6100頁。

² 『全唐詩』卷五四八、6325頁。

³ 『晉書』卷四三、1241頁。

⁴ 『晉書』卷四三、1246頁。

⁵ 劉長東「論中國古代的習字蒙書—以敦煌寫本『上大夫』等蒙書為中心」、『社會科學研究』2007年第2期、191頁。

徳行を立てらなければならない、というのだろう。王充は博學で有名である。『後漢書・王充傳』に、「(王充) 後到京師、受業太學、師事扶風班彪。好博覽而不守章句。家貧無書、常遊洛陽市肆、閱所賣書、一見輒能誦憶、遂博通衆流百家之言。…著『論衡』八十五篇、二十餘萬言、釋物類同異、正時俗嫌疑」とある¹。「文才」は學問である。「比」は比較するの意味である。「文才比重仁(仲壬)」というのは王充のように學問を勉強するということとなる。

「去年出北地、今日入南陰」について、「北地」というのは地名、或いは北の方を指す。「南陰」というのは南部地區を指して、「北地」と比較できる。S. 4106V に「今入曰南音」と「今人曰南音」兩方と書かれているが、『經集』は「今日入南音」と校正されている。「南音」とは南方の音樂、虞舜の「南風」、南方の發音を指す²。しかし、「音」が詩の中に現れた「門前出五音」の「音」と重複しているため、「南陰」がより正確であろう。「去年出北地、今日入南陰」という意味は去年、北の方から離れて、今日から南の方に入ることである。その上、去年、北の方のものを學んで、今から南の方のものの勉強を始めることと理解できる。

S. 4106V には『上土由山水』が2回書かれ、いずれも「今日入南音」までである。詩歌がこれで終わったと誤解されたことがある。劉長東は『上土由山水』の内容に対する解釋も「今日入南音」までとなる。しかし、P. 3145V により、次の「未申孔父志、且作丁公吟。戸内三史、門前出五音。若能求白玉、即此是黃金」は前の内容と押韻が同じであり、全て『上土由山水』の一部であると考えられる。

「未申孔父志、且作丁公吟」について、「未」は「未だ…していない」の意味である。「申」は「發揮」の意味がある。「孔父」は孔子に対する尊稱である。『舊唐書・禮儀志』によると、「自周公制禮之後、孔父刊經已來、爰殊厭降之儀、以標服紀之節」とある³。「志」は「志向」である。つまり、「未申孔父志」は孔子の志向を未だ發揮できないという意味になる。「且作丁公吟」について、『景德傳燈錄』卷二二には、「問、如何是和尚家風。師曰：石橋那畔有遮邊無、會麼。僧曰：不會。師曰：且作丁公吟」とある⁴。「且」は「今」の意味がある。「作」は「起こる」というのである。「丁公」は誰を指しているだろうか。唐・李瀚の『蒙求』という本は、歴史の物語によって學童を教育する啓蒙書である。その中には「丁公遽戮、雍齒先侯」という句がある。「丁公遽戮」は楚漢戦争の時代、劉邦が楚國の將軍丁公を殺したことを指す。

『史記・季布欒布列傳』

季布母弟丁公、為楚將。丁公為項羽逐窘高祖彭城西、短兵接、高祖急、顧丁公曰：「兩賢豈相戾哉。」於是丁公引兵而還、漢王遂解去。及項王滅、丁公謁見高祖。高祖以

¹ 『後漢書』卷四九、中華書局、1965年、1629頁。

² 漢語大詞典編輯委員會漢語大詞典編纂處編纂『漢語大詞典』(第1卷)、上海辭書出版社、1986年、893頁。

³ 『舊唐書』卷二七、中華書局、1975年、1024頁。

⁴ (宋)道原纂『景德傳燈錄』、大藏經刊行會編『大正新修大藏經』冊51、新文豐出版公司、1983年、384頁のc5。

丁公徇軍中、曰：「丁公為項王臣不忠、使項王失天下者、乃丁公也。」遂斬丁公、曰：「使後世為人臣者無效丁公」¹。

丁公は楚國の將軍であり、彭城の西で作戰する時、劉邦の「兩賢豈相戾哉」と言う言葉で劉邦を自由にした。項羽敗戦後、劉邦は丁公が項羽に不忠であるという理由で殺した。後世の人を丁公に倣わせないようにするためである。「吟」は「嘆息」である。「且作丁公吟」というのは今、丁公のように嘆息する。つまり、「未申孔父志、且作丁公吟」というのは孔子が學習の対象であり、丁公の不忠を學んではならないことも言っている。

「戸内三史、門前出五音」について。

「戸内」は家である。「三史」について、敦煌寫本『雜抄』により、「何名三史。『史記』、『前漢』、『東觀漢記』」とある。或いは『史記』、『漢書』、『後漢書』と指摘されていることもある。

長慶二年（822）二月、諫議大夫殷侗の上奏により、

歷代史書、皆記當時善惡、系以褒貶、垂裕勸戒。其司馬遷『史記』、班固、範曄『兩漢書』、音義詳明、懲惡勸善、亞於六經、堪為世教。……近日以來、史學都廢、至於有身處班列、朝廷舊章、昧而莫知、況乎前代之載、焉能知之。伏請置前件史科²。

この提案は唐穆宗の許可を得て、『史記』、『漢書』、『後漢書』の三史科は科擧制度の科目になった。殷侗は「三史」に「懲惡勸善、亞於六經、堪為世教」という役割があると考えた。また、「戸内三史」の意味は家に「三史」がある。「門前」は「戸口」である。「出」は「流れる」という意味がある。「五音」は「宮商角徵羽」のことである。敦煌寫本『雜抄』には、「何名五姓（聲）。宮商角徵羽。五聲作何聲色。黃聲宮、白聲商、青聲角、赤聲徵、黑聲羽」とある。敦煌寫本『孔子備問書』にも、「何謂五姓（聲）。宮商角徵羽、此之是也」とある。これらから、「五音」或いは「五聲」は啓蒙教育の内容の1つであろうと考えられる。「門前出五音」は戸口に「五音」が流れていることである。「戸内三史、門前出五音」というのは「三史」と「五音」の重要性を強調し、學郎に歴史や音樂を學習することを奨励するものである。

最後に「若能求白玉、即此是黃金」が本詩の主旨である。學問の重要性を強調し、學習をするよう促しているのである。具體的には高尚な徳行、豊富な學問を持つ人が白玉や黃金を手に入れることができるという。

P. 3145V『上士由山水』の後に詩が一首、「黃金千万斤、用盡卻還貧。不如勤學問、大寶自隨身」とある。「貧」というのは平聲「諄」韻であり、「身」というのは平聲「眞」韻である。『上士由山水』の押韻と相違がある。また、「黃金」この2文字が「即此是黃金」と重複している。以上のことから、この詩歌が單獨であることが判断できる。詩歌の意味は黃金

¹ 『史記』一〇〇、中華書局、1959年、2733頁。

² （宋）王溥撰『唐會要』、中華書局、1955年、1396頁。

を使い切った時あるが、學問を身につけると、使い切れない寶物になるという。

三 『上士由山水』の用途

敦煌寫本 P. 3145V、S. 4106V には『上士由山水』の他に、『上大夫』、『牛羊千口』、『敦煌姓氏雜錄』、姓名、數字等が連続して書かれている。これらは初學者の習字、識字の蒙書として、ほぼ同水準の學習内容であると言える。寫本の状況を見ると、P. 3145V に『上士由山水』は基礎的な習字教材『上大夫』と『牛羊千口』の直後に書かれ、S. 4106V に『上士由山水』は『上大夫』と『牛羊千口』の前に書かれていることから、『上士由山水』も基礎的な習字教材として使われていたのであろう。

元・李治『敬齋古今註・拾遺』

「文出升平世、禾生大有年。四克今日月、六合古山川。反朴次三五、古文丁一千。王功因各定、大作不相沿。主化布于下、人心孚自天。上方求士切、公亦立仁先。才行苟並至、位名尤兩全。末由弓治手、安比父兄肩。幸及布衣仕、宜希守令先。尺刀元並用、丹白具同研。去吏多甘老、休兵坐力田。干戈包已久、永ト本支延。」歐陽永叔戲為也。小兒初作字、點畫稍多、即難措筆、必簡易則易為力。故小學有「上士由山水、中人坐竹林」之語。歐公此詩、當亦為兒輩設也¹。

『文出升平世』という詩歌は歐陽修が作った學童の習字詩であり、筆畫が簡單であり、内容が『上士由山水』より長いものである。李治によると、『文出升平世』と「上士由山水、中人坐竹林」というのは、子供が文字を書き始める時に使用した習字書であると推測できる。

明・葉盛『水東日記』卷十『描朱』

「上大人、丘乙己、化三千、七十士、尔小生、八九子、佳作仁、可知礼也」。「尚仕由山水、中人坐竹林。王生自有性、平子本留心」。「王子去求仙、丹成入九天。山中方七日、世上已千年」。已上數語、凡郷學小童、臨仿字書、皆昉於此、謂之描朱。爾傳我習、幾遍海内、然皆莫知所謂。或云：僅取字畫簡少、無他義。或云：義有了了可解者、且有出也²。

『尚仕由山水』は『上士由山水』の變體であると言われている。これは明代の郷學に學童の「描朱」教材として使われている。敦煌寫本 P. 3145V と似ていて、『上大人』の後に書かれている。これらの書寫順序により、學童は『上大人』を勉強してから、『上士由山水』を勉強するという學習順序と推測できる。『王子去求仙』という物語は、晉代の神話から生まれ、唐末五代に流行し始めた。敦煌の莫高窟 366 窟（元番號 C165、P163）の入り口の壁にこの

¹ (元) 李治『敬齋古今註・拾遺』、王雲五主編『叢書集成初編』、上海商務印書館、1935年、119頁。

² (明) 葉盛撰、魏中平點校『水東日記』、105-106頁。

詩が書かれている。宋・李濤『次韻平埜王子厚登相山不及相過』には、「兒童傳好語、王子去求仙。我住亦邇只、君胡不惠然。相望百裡外、一別五年前。會聚渾閒事、鷺鷗盟要堅」とある。この詩歌により、『王子去求仙』は當時に流行していた子供達の啓蒙詩歌と分かる。

『上土由山水』は民國の時期にも一部の地域での習字教材として使われていた。

王利器「敦煌寫本『上大夫』殘卷跋尾」

舊時四川、幼童發蒙習字、塾師以土紅筆寫「一二三」等字、命學童依樣描寫、謂之「拉扁擔」、拉伸了、然後摹格反複寫「上下十卜丁、人千寸斗平」十字、久之、又換寫「王子去求仙、丹成入九天。山中方七日、世上已千年」。大概由於四川是道教盛行之地、……故幼學習字、亦受其影響、與受儒家影響之「上大人、孔乙己」、異其趣矣¹。

これにより、舊時の四川の師範は先に數字「一二三」等を範字として書き、學童に「描紅」させた。次に「上下十卜丁、人千寸斗平」を、學童に繰り返して模寫させた。長い時間を経て、『王子去求仙』の内容に変更してさらに練習させたという。

ところで、現代では「遊走雪」という名前の人が、『私塾六年』という文で、彼の民國時期に習字教育を受けた過程を中國のブログに記録した。

我七歲啓蒙自十三歲失學、共讀私塾不到六年。任何開蒙學生能夠第一本書都要先從「人之初」開篇。初學習字是用毛筆、師範寫好一二三四五六七八九十字頭、學生然後謀（摹）寫、這叫學寫扁擔字。一次字頭至少謀（摹）寫一個月。二次字頭是謀（摹）寫「上土由山水、中人坐竹林」。三次就要謀（摹）寫多一點壁（筆）畫的「王子去求仙、丹人入九天」²。

彼は七歳で啓蒙教育を受け、當時は先ず『三字經』から始まった。習字を始める時、師範が數字「一二三四五六七八九十」の範字を書いた後に、學童は毛筆で模寫した。一カ月で數字を模寫した後、「上土由山水、中人坐竹林」を模寫した。次は「王子去求仙、丹人入九天」を模寫した。

民國の時期に、學童は習字を始めてする時、師範の書いた範字から模寫しなければならなかった。練習の順番から言うと先に數字から始まるのが普通である。次に「上下十卜丁、人千寸斗平」と「上土由山水、中人坐竹林」等を學習し、更に少し複雑な『王子去求仙』を學習する。學童の學習は簡単な字から複雑になって、習字能力が徐々に向上すると言う。

また、宋代以降の資料により、「上土由山水、中人坐竹林」という2句より、「上土由山水、中人坐竹林。王生自有性、平子本留心」という4句がよく見られ、敦煌寫本P. 3145Vのように全文が書かれているものが見えなかった。何故なら、『上土由山水』の全文が長過ぎであ

¹ 王利器「敦煌寫本『上大夫』殘卷跋尾」、『社會科學戰線』1990年第3期、324頁。

² http://blog.sina.com.cn/s/blog_40ea0211010005r0.html.

り、學童にとって難しいので、興味が低下したためであろう。従って敦煌寫本 S. 4106V を見ると、『上士由山水』が8句に書かれていた。學童は長さの一定した詩歌を練習したほうがいいと考えたのであろう。

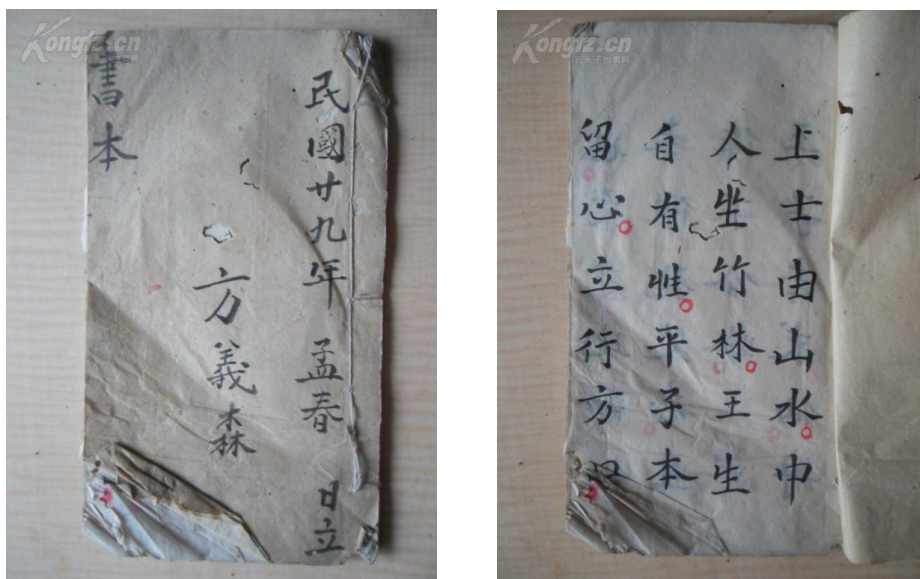


圖 1

筆者は中國の「孔夫子舊書網」という古書を賣るウェブサイトで民國二十九年（1940）の小冊を見たことがある¹。ホームページに登録していると、冊子の寫眞（圖 1）で、「民國廿九年、孟春、日立」、「方義森書本」という表紙から、書寫時間と作者が分かってくる。第 1 頁には「上士由山水」から「立行方回」までと書かれている。残念なことに、この古い小冊の實物が賣り切って、實物を見ることができなかつたため、寫眞二枚の内容しか確認できなかった。しかし、「立行方回也」という内容は民國の時期にまだ流布していたと分かる。

四 敦煌とトルファン寫本の習字詩

詩歌と啓蒙教育には密接な關係がある。朱鳳玉の「敦煌詩歌寫本原生態及文本功能析論」と鄭阿財「敦煌吐魯番文獻呈現的唐代學童詩學教育」により、詩歌と言うのは、詩歌の創作、歴史、地理、道德、習字の面に對する教育用途があると指摘されている²。敦煌とトルファン文獻から見ると、習字のために編纂した詩歌が残され、しかも一部の流行した詩歌も習字の對象として使用されていた。

敦煌文獻に同じ部首の字で編纂した五言詩が残されている。『送遠還通達』と『沉淪淝浪波』から始まった五言詩に對して、『英藏』、『法藏』、『俄藏』、『敦煌秘笈』等には命名され

¹ <http://www.kongfz.cn/16587214/pic/>.

² 朱鳳玉「敦煌詩歌寫本原生態及文本功能析論」、『敦煌研究』2018 年第 1 期、9-16 頁。鄭阿財「敦煌吐魯番文獻呈現的唐代學童詩學教育」、『童蒙文化研究』（第三卷）、3-23 頁。

ていないが、『國圖』のBD1957Vには『送遠還通達』を『走字旁遊戯詩』¹と、傳圖 15Vには『五言詩・送遠還通達』と命名した。張新朋はこのような詩歌を「聯邊詩」と呼んでいる。傳圖 15Vの命名に基づいて、張新朋はこの詩歌を『送遠還通達』と呼び、S. 3287V、S. 4444V、S. 5513V、P. 2738V、俄Φ. 126V、BD150V、BD1957V、傳圖 15V3、羽 663Vという9件の敦煌寫本に詩歌を發見したが、その用途については言及していなかった²。筆者はこれら詩歌の主な用途について、實は習字にあると考えている。

9件寫本の中で、S. 5513Vの内容は最も多かった。「送遠還通達、逍遙近道邊、路逢遐邇過、進退~~遊~~遊蓮。延進~~遊~~迎逐、遂這遣逢迴。造隨遷籛、籛速述遮。遶~~遊~~逍、運」である³。S. 3287V、P. 2738V、BD1957V、傳圖 15Vでは、詩歌の中に「送遠還通達、逍遙近道邊。遇逢遐邇過、進退速遊連」という内容が含まれている。

羽 663V、正面は『正月孟春猶寒』と『雜抄』である。背面が模糊で、内容を確認できる箇所が10行しか残されておらず、正面の書寫者と同じではない字體である。「南無東方佛、南無南方佛、南無北方佛、南無西方佛」、識語「淨土寺學郎曹延祿」、『送遠還通達』、姓名、「於」の習字等が連続して書かれている。『送遠還通達』に関する習字が4行残され、その中に「遠」の字が3行書かれている。識語により、この寫本の書寫者は學郎曹延祿である。

S. 3287V、正面は『千字文』、學郎詩『今日書他智(紙)』、『尚想黃綺帖』(『王羲之顛書論』)、『十五願禮佛懺』、『六十甲子納音性行法』、曲子、『李涉法師勸善文』である。背面は主に『子年擘三部落百姓汜履倩等戶手實』であり、また『千字文』、『送遠還通達』及び『尚想黃綺帖』の内容が2行残されている。正面と背面には、『子年擘三部落百姓汜履倩等戶手實』を除く他の内容は書寫者が同じであると推測できる。

S. 5513V、正面は『開蒙要訓』である。背面には13行の『開蒙要訓』と『送遠還通達』の内容が残されている。正面と背面の書寫者が同じであると判断できる。正面と背面の『開蒙要訓』の内容が亂され、同じ部首の字を並べる方式で字を學習した。書寫者は『開蒙要訓』の内容を故意に部首で分類して、また部首「走」を加えるという、識字効率を高める方法を使用した。

P. 2738V、正面は『太公家教』である。寫本の背面に『千字文』、『尚想黃綺帖』、社司轉帖、『沉淪淝浪波』、『正月孟春猶寒』、敦煌の郷名と寺名、蘭若の名、『千字文』、『學問當時苦』、『送遠還通達』、『沉淪淝浪波』、社司轉帖、「咸通十年己丑六月八日男文英、母因是」、『上大夫』、『尚想黃綺帖』が連続して書かれている。字體により、寫本の正面と背面の書寫者が同一人ではないと推測する。背面に書寫者は「沉淪淝浪波、浮流潯渡灘。江河清冰」という内容を2回書き、『沉淪淝浪波』と命名した。

BD150V、正面は『大乘稻竿經』であり、背面は「送遠還通」4字と「南北東西」4字が1行に書かれている。字體により、寫本の正面と背面の書寫者が同一人ではない。

これらの寫本により、『上大夫』、『千字文』、『正月孟春猶寒』、敦煌の郷名と寺名、「南北

¹ 任繼愈主編『國家圖書館藏敦煌遺書』第27冊「條記目錄」、北京圖書館出版社、2006年、9頁。

² 張新朋「敦煌詩苑之奇葩—敦煌文獻中的『送遠還通達』初探」、『敦煌研究』2016年第5期120-124頁。

³ 張新朋「敦煌詩苑之奇葩—敦煌文獻中的『送遠還通達』初探」、『敦煌研究』2016年第5期122頁。

東西』、『開蒙要訓』等は當時の習字と識字の内容であると分かる。さて、『送遠還通達』と『沉淪深浪波』も同じ用途であるが、文字は比較的難しいため、『開蒙要訓』の使用段階と同じであると考えている。なお、これらの詩歌の形式が、より學郎の學習興味を高めることができると思う。

王羲之の書道の作品は唐代に風靡した。彼の詩歌も學郎の習字に使われた。敦煌寫本 P. 3305 p 5V は『蘭亭詩習字』である。これの正面に 34 行が残され、「侯益屬舍子電乾駒東宮黃須鷹我乃盛矣」という習字内容である。1 文字を 2 行に書き、習字の右側に朱筆で同じ文字を 1 回書いている。背面に 34 行の習字内容が残され、1 文字を 2 行に書き、各行に約 16 文字を書いている。内容としては『蘭亭詩』の「其常、修短定無始、造新不暫停、一往不再起」である。習字の右側に朱筆で同じ文字を 1 回書いている。正面と背面の書寫者が同一人と判断する。なお、寫本の第 1 列と第 2 列に少し間隔が見られている。それは、書寫者が先に各行の頭字を書いて、それから下に習字を行ったと考える。

ここに『蘭亭詩』について簡単に説明する。『蘭亭詩』の内容は「合散固其常、修短定無始。造新不暫停、一往不再起。於今為神奇、信宿同塵滓。誰能無此慨、散之在推理。言立同不朽、河清非所俟」である。王羲之が創作した 6 點の『蘭亭詩』中の 1 つである。

また、トルファンから出土した文獻の中に『唐寫古詩習字殘片（岑德潤五言詩等）』¹ 1 件が残されている。この寫本は番號 2006TZJI:006、2006TZJI:007、2006TZJI:073 と 2006TZJI:074 四件から綴合した。正面は西州の官文書である。背面に 3 つの内容が書かれている。1 點目は「□簾鉤未落、斜棟桂猶開。何必高樓上、清景夜徘徊」である。李肖、朱玉麒は第 1 首を『南朝或隋・佚名「詠月」詩』と命名した。2 點目は隋代の詩人岑德潤の『詠魚』:「□（劍）影侵波□（合）、□□（珠光）帶水□（新）。□（蓮）東自可□（戲）、□（安）用上龍□（津）」である²。そして、3 點目は「夜故人」「來訪」という 5 字の習字が残されている。各字が 3 回ぐらい書かれている。李肖、朱玉麒によると、この寫本は詩歌を對象に習字を行った寫本である。この寫本と敦煌寫本 P. 3305P5V『蘭亭詩習字』から、當時の學郎が詩歌を對象に習字を行った方法を窺うことができる。

小結

敦煌寫本 P. 3145 によれば、『上士由山水』は 14 句の五言詩から成り、儒家勸學の目的を持つ文獻であった。その内容は、王生の賢明、顔回の徳行、王充の學問を學ぶものであり、學郎をそれらの賢人を目指すよう励ますものとなっている。反対に、王澄の傲慢、丁公の不忠を學んではならないことも指摘している。更に、「三史」や「五音」等を勉強するのも必要とされ、學郎が勉強を好み、徳の高い人になることを望むものとなっている。

¹ 李肖、朱玉麒「新出吐魯番文獻中的古詩習字殘片」はこの寫本を『唐寫古詩習字殘片』と命名した（『文物』2007 年第 2 期 63 頁）。榮新江、李肖、孟憲實主編『新獲吐魯番出土文獻』（上）はこの寫本を『唐寫古詩習字殘片（岑德潤五言詩等）』と命名した（中華書局、2008 年、356 頁）。

² 李肖、朱玉麒「新出吐魯番文獻中的古詩習字殘片」、『文物』2007 年第 2 期、62-65 頁。榮新江、李肖、孟憲實主編『新獲吐魯番出土文獻』（上）、356 頁。

『上土由山水』は、初學者の習字教材として使われていた。敦煌寫本中に、『上土由山水』、『上大夫』、『牛羊千口』、『敦煌姓氏雜錄』、姓名、數字等が併寫された文獻が見られているが、これらは初學者の習字、識字の蒙書として、同水準の勉強内容であると言えよう。民國時期に、學童は習字を始めたばかりの時、師範が先に數字を練習させ、次に「上下十ト丁、人千寸斗平」と「上土由山水、中人坐竹林」等を練習させ、續いて少し難度のあがった『王子去求仙』の内容を練習させていたのである。學童の習字に使われている教材には順番があると考えられ、簡単な字から複雑な字に移っていくことで、學童の習字能力徐々に向上させるものとなっている。

『上土由山水』や『王子去求仙』等の詩は、主に基礎的な筆畫の文字であり、『上大夫』と似て、初學者の習字に非常に適合している。これらの内容には意味がある。『上土由山水』と『上大夫』は儒家の勸學の意味であり、『王子去求仙』は道家の物語である。しかし、歴史の發展によって、それらの習字用途が強化されていった。それはまさに葉盛の話に如く、「爾傳我習、幾遍海内、然皆莫知所謂」であり、内容の持つ具體的な意味の重要性は低くなっていったのである。

第三章 『千字文』

『千字文』は千年にわたって受け継がれていきた文獻である。敦煌とトルファンに『千字文』の寫本が発見されると、學者達は相繼いで研究を進め、今日までに多くの成果を生み出してきた。このことに関しては、張新朋『敦煌寫本「開蒙要訓」研究』の中に先行研究に対する纏めがある。¹日本や臺灣にも、敦煌とトルファンの『千字文』に関連のある論文や著作があり、近年にも新たな研究成果が出てきた。台靜農「蔣善進眞草千字文殘卷跋」²。小島憲之「海東と西域：啓蒙期としてみた日本上代文學一斑」³。雷僑雲『敦煌兒童文學』第二章『敦煌兒童字書』第一節『千字文』⁴。小高裕次「東アジア漢字文化圏における識字教育の一例—『千字文』『百家姓』と『新集金碎掌置文』」⁵。張娜麗『西域出土文書の基礎的研究—中國古代における小學書・童蒙書の諸相—』中第Ⅱ部『紙文書から見た童蒙書—敦煌出土の遺文』⁶。王元軍「説説敦煌本『千字文』」⁷。張新朋「吐魯番出土『千字文』殘片考」⁸、「若干新認定『千字文』寫卷敘録及綴合研究」⁹、「大谷文書中十三則『千字文』殘片之定名與綴合」¹⁰、「吐魯番、黑水城出土『急就篇』『千字文』殘片考辨」¹¹、「東亞視域下的童蒙讀物比較研究—以『千字文』與『開蒙要訓』之比較為例」¹²、「吐魯番出土『千字文』敘録—中國、德國、英國收藏篇」¹³。高美林「敦煌『篆書千字文』字形研究」¹⁴。海野洋平「童蒙教材としての王羲之『皀書論』(『尚想黃綺』帖)：敦煌寫本・羽 664 ノ二 R に見るプレ『千字文』課本の順朱」¹⁵。常蓋心「從敦煌寫本看『千字文』在唐五代時期的使用」¹⁶等である。

このように、『千字文』に関する研究成果は多いが、敦煌の『千字文』についての研究は少ない。先行研究の成果を踏まえ、本章ではまず『千字文』の作者について検討する。次に、『千字文』の主な用途について検討する。最後に敦煌寫本から、當時學郎が『千字文』を學習した過程、方法、及び異なる學習段階の學郎による『千字文』の利用の實態を検討する。

¹ 張新朋「敦煌寫本『開蒙要訓』研究」、浙江大學博士學位論文 2008 年、10-12 頁。張新朋『敦煌寫本「開蒙要訓」研究』、中國社會科學出版社、2013 年、22-26 頁。(以下、頁の番號は 2013 年に中國社會科學出版社の『敦煌寫本「開蒙要訓」研究』からである)

² 『敦煌學』第一輯、1974 年、113 頁。

³ 岩波書店編『文學』51 (12)、1983 年、1-20 頁。

⁴ 學生書局、1985 年。

⁵ 『東アジア言語研究』(6)、2003 年、30-38 頁。

⁶ 汲古書院、2006 年。

⁷ 『中國書法』2013 年第 6 期、166-169 頁。

⁸ 『文獻』2009 年第 4 期、11-16 頁。

⁹ 『敦煌學輯刊』2008 年第 1 期、48-55 頁。

¹⁰ 『敦煌研究』2013 年第 5 期、67-72 頁。

¹¹ 『尋根』2015 年第 6 期、19-25 頁。

¹² 『浙江社會科學』2015 年第 11 期、107-113 頁。

¹³ 金滢坤主編『童蒙文化研究』(第二卷)、人民出版社、2017 年、55-72 頁。

¹⁴ 廣西大學碩士學位論文、2014 年。

¹⁵ 武田科學振興財團杏雨書屋編『杏雨』(20)、2017 年、117-173 頁。

¹⁶ 金滢坤主編『童蒙文化研究』(第三卷)、人民出版社、2018 年、265-280 頁。

一 『千字文』の作者

『千字文』のバージョン及び作者を比定する研究は数多い。最も広く認知されているのは周興嗣の次韻バージョンである。「天玄地黄、宇宙洪荒」から始まる。1つの観点から考えられるのが、作者は鐘繇であり、後世に残された字體を書き出したのは王羲之であり、次韻したのは周興嗣とする見解である。筆者はこの観点から研究を行い、その信頼性を検討する。まず『千字文』の作者は鐘繇であるかを考察する。

P. 2721 『雜抄』の「論經史何人修撰制注」

『千字文』、鐘繇撰、李暹注、周興嗣次韻。

S. 5961 『新合六字千字文』

鍾鍊撰集『千字文』、唯擬教訓童男。

「鍾」を「鐘」に書いたことが見られ、それは当時の敦煌で混用していたと考えられる。「鍾鍊」を書いたのは、誤字であり、實は「鐘繇」の可能性もある。これらにより、『千字文』の作者は鐘繇であろう。

弘安十年（1287）の上野本『注千字文』の序文により、

『千字文』者、魏太尉鐘繇之所作也。…故歴代寶之、傳以為訓、藏諸秘府。逮於永嘉年、失據遷移丹陽、然川途重阻、江山遐險、兼爲石勒避逐、驅馳不安。又逢暑雨、所載典籍、從茲糜爛、『千字文』幾將湮沒。晉中宗元皇帝恐其絶滅、遂敕右軍琅琊之人王羲之繕寫其文、用為教本。但文勢不次、音韻不屬、及其將導、頗以為難。至梁武帝受命、令員外散騎侍郎周興嗣推其理致、為之次韻也¹。

『注千字文』の作者は梁代の李暹であるという。李暹については、9世紀末に藤原佐世が著作した『日本國見在書目録』の「小學家」の中に、「千字文一卷、李暹注」という内容が残されている。一方、元和三年（1617）の『纂圖付音増廣古注千字文』の冒頭には「梁大夫内司馬李暹」とある。「暹」は「暹」の誤字である。また、上野本『注千字文』の序文で、李暹が自分の経歴と著書過程を書き出している。それによると、東魏武定年間（543-550）秘書省郎中の李暹が、皇帝に命じられ、楚城に出使する途中、侯景の亂に遭遇してしまい、梁に行けず、戻ることもできなかった。仕方なく關中に入り、西京（西魏の都城）に30年住んでいた時に『注千字文』を書いたという²。李暹は東魏の人であるため、「『千字文』者、魏太尉鐘繇之所作也」という記述が比較的信頼できる。

¹ 小川環樹、木田章義『注解千字文』、岩波文庫、1984年、336頁。黒田彰、後藤昭雄、東野治之、三木雅博編著『上野本注千字文注解』、和泉書院刊、1989年、55頁。

² 東野治之「李暹『注千字文』について」、五味智英、小島憲之編『万葉集研究』第13集、塙書房、1985年、223頁。東野治之著『遣唐使と正倉院』、岩波書店、1992年、250頁。

『宋史・李至傳』

上嘗臨幸秘閣、出草書『千字文』為賜、至勒石、上曰：「『千文』乃梁武得破碑鐘繇書、命周興嗣次韻而成、理無足取。若有資于教化、莫『孝經』若也。」乃書以賜至¹。

これにより、『千字文』について、梁武帝が鐘繇の碑文を得、周興嗣に次韻させたという説がある。

ところで、『古事記』に、應神天皇十六年（285）、百済の王仁の獻書に関する物語を記載してある。

科賜百濟國、若有賢人者貢上、故受命已貢上人、名和迺吉師。即『論語』十卷、『千字文』一卷、並十一卷、付是人即進貢²。

『日本書紀』と『古語拾遺』にも、應神天皇年間（270年から312年）、王仁來日のことが記載されている。そこに記された『千字文』の日本傳來時期と内容の眞偽に對しては、既に多くの議論の蓄積がある³。尾形裕康によれば、『古事記』に記載された『千字文』は『古千字文』である。尾形裕康の家に9部を藏して、全て王羲之の本である。その中、『王右軍宋拓千字文』（上海求古齋書帖局本）の首題には「魏太尉鐘繇千字文、右軍將軍王羲之奉勅書」と、次に「二儀日月、雲露嚴霜、夫貞婦潔、君聖臣良」と書かれており、周興嗣の次韻の本と異なる。尾形裕康氏は、『古千字文』は鐘繇が創作した古本であると判断し、正倉院に保管された天平勝寶八年（756）六月二十一日傳教大師（767-822）が唐から持ってきた書目『御經藏寶物聖教等目錄』に記載された王羲之の『千字文』を模寫した『古文千字文一卷』そのものであるとした⁴。そして、『古事記』に記載された『千字文』が鐘繇の書いた古いバージョンであれば、285年に日本に傳わった可能性があるということである。

その次に、王羲之と『千字文』は何の関係があるかを考えよう。

『雜抄』には王羲之とは言及されていない。『梁書・周興嗣傳』によれば、周興嗣の『次韻王羲之書千字』と記載され、王羲之は『千字文』を書き寫したことがある⁵。日本に残された2つのバージョン⁶に李暹『注千字文』の序文で、鐘繇の作品『千字文』を書き寫したのは王羲之であると言及されている。

これらから見れば、確かに『千字文』は書家の鐘繇に書かれていて、歴代の統治者に秘藏され、朝鮮と日本にも傳わっている。不幸なのは、永嘉の亂に遭遇し、『千字文』を守るた

¹ 『宋史』卷二六六、中華書局、1985年、9176頁。

² 『古事記』、東京五洲出版社、1997年。

³ 尾形裕康「教育上から見た千字文の研究」、『日本學士院紀要』第11卷第3號、138頁。尾形裕康『我國における千字文の教育史的研究』（本編）、校倉書房、1966年、第63-66頁。符力「關於『千字文』的製作、別本以及對『千字文』傳入日本一事的淺見」、『四川外語學院學報』1989年第3期、80-85頁。王鐵鈞「王仁獻書說辨疑」、『江西師範大學學報』（哲學社會科學版）第38卷第3期、2005年、16-20頁。

⁴ 尾形裕康『我國における千字文の教育史的研究』（本編）、63-83頁。

⁵ 『梁書』卷四九『文學傳上』、中華書局、1973年、698頁。

⁶ 弘安十年（1287）の上野本『注千字文』と元和三年（1617）の『纂圖付音增廣古注千字文』である。

めに、晉・中宗元皇帝の命に應じて、王羲之が書き寫し、その後皇子の啓蒙と書道の勉強のため、梁武帝は周興嗣に命じ、編纂して、次韻したものが、現在一般に知られている『千字文』である。

二 『千字文』の主な用途

『千字文』の流行時間が最も長く、影響が最も大きかったのが、識字、習字蒙書である。手本としてよく知られており、広く使われているため、日常生活、文書整理、軍事手配、書籍の編集等にもその影響が見られる。

李暹『注千字文』の序により、『千字文』が王羲之によって書かれた後、教材とされていた。「教本」というのは書道で学ぶ教材とされるわけである。李綽『尚書故實』の記載によれば、梁武帝は周興嗣に命じ、『千字文』を次韻させて流布させたのは、皇子の書道を教えるためである¹。なお、鐘繇と王羲之に関わりがあるため、『千字文』はその誕生から書道の教材とされたのであり、啓蒙教育とはあまり関係がないと考えられる。

南朝の陳時代に、王羲之の七世孫智永が「臨得眞草千文、好者八百餘本、浙東諸寺、各施一本」であり²、『千字文』の流布を促進した。敦煌文獻 D x. 8783+ D x. 5847+ D x. 8903+P. 3561 『眞草千字文』³は、貞觀十五年(641) 蔣善進の模寫であり、非常に貴重な資料である。『隋書・經籍志』には、『篆書千字文』と『草書千字文』が記載されており、作者が明記されていないのである。

唐・武平一『徐氏法書記』

太宗於右軍之書、特留睿賞。貞觀初、下詔購求、殆盡遺逸。萬機之暇、備加執玩。「蘭亭」「樂毅」、尤聞寶重⁴。

唐太宗は特に王羲之の書道をよく好んだ。そのため、王羲之の書いた『千字文』が文人墨客に大きな影響を與えるのは必至であった。

唐代の釋貫休は「喜書『千文』、世多傳其本、雖不可以比跡智永、要自不凡」であった⁵。

釋文楚は「在元和間、所書『千文』、落筆輕清、無一點俗氣、飄飄若飛雲之映素月、一見使人冷然有物外之興」であった⁶。

¹ (唐) 李綽撰、蕭逸校點『尚書故實』、上海古籍出版社本社編『唐五代筆記小説大觀』(下)、上海古籍出版社、2000年、1170頁。

² (唐) 張彥遠『法書要録』卷三何延之『蘭亭記』、人民美術出版社、1984年、125頁。

³ 張涌泉主編『敦煌經部文獻合集』第八冊「小學類字書之屬」、中華書局、2008年、3934-3935頁。

⁴ (唐) 張彥遠『法書要録』卷三武平一『徐氏法書記』、114-115頁。

⁵ (宋) 佚名撰、桂弟子譯注『宣和書譜』卷一九『釋貫休』、湖南美術出版社、1999年、349-350頁。

⁶ (宋) 佚名撰、桂弟子譯注『宣和書譜』卷一九『釋文楚』、352頁。

唐代の多くの有名な書道家は全て『千字文』を書いたことがある。天秀の『千字文総述』の統計によると、史籍に記載のある書道家は31名もあった¹。唐代以降、書道家の模写において重要な作品とされてきた『千字文』の作品数は、数え切れないほどある。

書道家は『千字文』を模写するが、學童は識字と習字のために『千字文』を學んでいる。

唐代武則天の時、「并州人毛俊誕一男四歳、則天召入内試字、『千字文』皆能暗書。賜衣裳放還、人皆以為精魅所托」という物語がある²。四歳の子供が『千字文』を暗唱暗記するとは、誇張したところがあるかもしれないが、『千字文』は当時の啓蒙教育の間に浸透していたことが見て取れるだろう。唐末の進士顧蒙は、淮浙の農民蜂起に遭遇した際、「避地至廣州、人不能知、困於旅食、以至書『千字文』授於龔俗、以換斗筲之資」であった³。「龔俗」とは一般的な大衆を指す。孟郊の『勸善吟』により、「知君方少年、少年懷古風。藏書拄屋脊、不惜凡龔」とある。この「凡龔」と「龔俗」とは意味が近い。これらの資料から見れば、一般的な大衆も『千字文』を學ぶことができたことが分かる。

清・陸世儀『思辨録輯要』卷一

先儒教小兒習字、先令影寫趙子昂『大字千字文』、稍長、習智永『千字文』。每板影寫十紙、既畢、後歇讀書一二月。以全日之力、通影寫一千五百字、添至二千三千四千字、如此一二月乃止。必如此方能日後寫多、運筆如飛、不至走樣、亦是一法⁴。

清代の學童が習字する時、『千字文』は主な習字書の1つであった。最初に、趙孟頫の『大字千字文』を習う。大きな文字を書くのは、字の結構を把握しやすく、且つ正しく美しく書けるためである。その後、智永の『真草千字文』を習い、書道の水準を向上させる。「每板影寫十紙」の「板」は木の板である。そこには書道の名家の『千字文』が刻んである。現在の印刷された手本に似たものである。習字のための手本であるため、板の字が大きいのであろう。『大字千字文』と呼ばれ、一板の字数があまり多くないと考えられる。「影寫」とは、學童が紙を板の上に置いて模写することである。學童は一板ごとに10枚の紙を書く。『千字文』を書き上げるには、一定の時間を要する。そして、1、2カ月の讀書をしながら習字を續けるのである。一日1500字を書き、その後少しずつ増えていくのだが、習字は1、2カ月ほど續けなければならない。

『千字文』の内容は幅廣く、読み書きの過程で、學童は知識を習得することになる。

¹ 天秀『千字文総述』、紫禁城出版社、1990年、31-39頁。

² (唐)張鷟『朝野僉載』卷五、中華書局、1979年、110頁。

³ (五代)王定保『唐摭言』卷十「韋莊奏請追贈不及第人近代者」、上海古籍出版社、1978年、118頁。

⁴ (清)陸世儀『陸桴亭思辨録輯要』、王雲五主編『叢書集成初編』、商務印書館、1936年、2頁。

李暹『注千字文』

『千字文』要略：義括三才、包覽百家、意存省約。上論天地、下次人倫。義及九州、泛論五岳。日月星辰之度、建首明王三皇封禪之書、亦在其內。前漢後漢之事、次第俱論。秦始刻碑之勳、於斯辨釋¹。

『千字文』に注をする目的は、「以曉愚蒙」である。『千字文』は4字1句、250句から成る。内容から見ると、天文に関する句が14句、果物1句、野菜1句、植物6句、動物3句、神話傳説18句、歴史と地理に関する句が81句、人物典故33人、禮儀と德行に関する句が110句、農業知識6句、日常生活8句である。その中には宮廷の雄大さ、豪華さと官員の立派な生活を描き、學郎に「學優登仕、攝職從政。存以甘棠、去而益詠」と励ます。歴史、禮儀、德行の内容が最も多いことから、『千字文』は内容から見ると、德行類の蒙書に似ており、勸學の意味が全文を貫いている。『千字文』の學習は、「樂殊貴賤、禮別尊卑。上下和睦、夫唱婦隨」を目的とするのである。

三 『千字文』の學習過程

敦煌文獻には、『千字文』は約140件（118件に綴合することができる）が残されている²。トルファン文獻にも73件が残されていることから³、當時に最も普及した習字の蒙書であると推測される。敦煌『千字文』は、121件の普通本⁴以外、貞觀十五年には蔣善進が模寫した『眞草千字文』（ $\text{Dx. 8783} + \text{Dx. 5847} + \text{Dx. 8903} + \text{P. 3561}$ ）、『篆書千字文』（ $\text{P. 3659} + \text{P. 4702}$ ）、『注千字文』（ P. 3973 、 S. 5471 ）、『新合六字千文』（ S. 5961 、 S. 5467 、 $\text{P. 3875Ap7} + \text{P. 5031p21}$ ）、『漢藏對音千字文』（ P. 3419A （ P. tib1046 ））、 Ch. 86. ii. back （ IOL.C. 132 ））がある。

121件の『千字文』普通本は102件に綴合することができる。『敦煌秘笈』の4件を加えて106件になる。寫本により、2つの書き方がある。1つ目の書き方は1文字につき、1回書くものであり、書く能力はまちまちである。それらの寫本は84件ある。そのうち、完全な寫本は4件残されている。S. 5454、P. 3416、S. 3835、P. 3108である。不完全だが、内容が多く保存されている寫本は18件、P. 2759+P. 2771+P. 4066V、P. 2888、P. 3170、P. 3062、P. 3211V、P. 3614、P. 3626、P. 3743、P. 4809、P. 4937V、S. 3287、S. 4948V、S. 5592、S. 5711V、上圖110V、 $\text{Dx. 11092} + \text{Dx. 19085R}$ 、 Dx. 6028 、羽51等である。これらの書く能力は様々であるが、全體から見れば、一定水準の筆寫能力を持っている書寫者であると考えられる。不完全かつ内容が比較的少ない寫本は62件あり、その中の34件の字體がやや稚拙である。2

¹ 小川環樹、木田章義『注解千字文』、336頁。

² 張新朋『敦煌寫本「開蒙要訓」研究』、第126頁。張新朋は敦煌寫本『千字文』に對する詳しい紹介をした。常蓋心「從敦煌寫本看『千字文』在唐五代時期的使用」（『童蒙文化研究（第三卷）』、266頁）により、これまで残されている敦煌寫本『千字文』は160件となっている。

³ 張新朋「吐魯番出土『千字文』殘片考」、『文獻』2009年第4期、11頁。

⁴ 張新朋『敦煌寫本「開蒙要訓」研究』、第131-156頁。

つ目の書き方は、1字を何回も書き、時に1字を2、3行にわたって書かれている。25件が残されている¹。

以上106件寫本の中、P. 3170、S. 5592、上圖 110V、S. 5594、S. 5829、P. 2677P1、P. 3168V、P. 4899V+P. 5546V、S. 5814、Дx. 10422、Дx. 11092+Дx. 19085R、羽 51、Дx. 528BV が精緻に書き上げられており、書寫者は高い書道の能力を持っていると考えられる。特に、Дx. 269+Дx. 9365、Дx. 8107+Дx. 7902+Дx. 7861+Дx. 16781、Дx. 12661+Дx. 18950 は、書寫能力が高く、學郎の寫本ではないと考えられる。P. 3170「歲三月十九日顯德寺學士郎張成子書記也」、P. 3211V「乾寧三年丙辰歲次二月十九日靈圖寺學士郎汜賢信書記之耳」は、それぞれ學郎の識語がある。

ここまで、敦煌寫本『千字文』の状況を簡単に紹介した。これを踏まえ、次に寫本を中心に『千字文』學習過程を検討する。

啓蒙教育は讀書と習字で始まる。

『元史・王恂傳』

恂性穎悟、生三歲、家人示以書帙、輒識風、丁二字。母劉氏、授以『千字文』、再過目、即成誦²。

王恂は三歳から自宅で啓蒙教育を受け、すぐに「風」「丁」を覚えた。母より教育を受け、『千字文』を暗唱することができた。孔穎達は「八歳就學、日誦千餘言」と言われ、孫思邈「七歳就學、日誦千餘言」と言われるように、古人は、子供の頃から朗讀を重視する教育を受けていた。

清・陸世儀『思辨錄輯要』卷一

凡人有記性、有悟性。自十五以前、物欲未染、知識未開、則多記性少悟性。自十五以後、知識既開、物欲漸染、則多悟性少記性。故人凡有所當讀書、皆當自十五以前使之熟讀、不但四書五經、即如天文、地理、史學、算學之類皆有歌訣、皆須熟讀。若年稍長、不惟不肯誦讀、且不能誦讀矣³。

十五歳前の子供の記憶力が良いため、多くの本を讀ませて、熟讀させるのである。

『千字文』を熟讀する以外に、『千字文』の習字も行う。敦煌寫本『千字文』の中の34件は、書體が稚拙であることから、習字時間が長くないだろう。習字が始まったばかり頃には、『千字文』を使っていたことが窺われる。『思辨錄輯要』には、清代の學童の習字について述べており、趙孟頫の『大字千字文』から習字していたことがわかったが、その面から考えると、唐代から清代にかけて、『千字文』の學習方法はあまり變化していないと考える。

¹ 上圖 110V、P. 3243、P. 2647V について、2つの書き方が両方あるため、重複計上している。

² 『元史』卷一六四、中華書局、1976年、3843頁。

³ (清) 陸世儀『陸桴亭思辨錄輯要』、王雲五主編『叢書集成初編』、2頁。

千字文勅自外散騎侍郎周興嗣次韻天地玄黃宇宙
 洪荒日月盈異辰宿列張
 寒來暑往秋收冬藏閏餘成
 歲律呂調陽雲騰致雨露
 結為霜金生麗水玉出崑崙

P. 2457V

千字文勅自外散騎侍郎周興嗣次韻
 玄黃宇宙洪荒日月盈異辰宿列張寒來暑往
 意覺張勅元頤杜皮竟他承苗孔好王宮馬列
 意覺張勅元頤杜皮竟他

BD9089V (部分)

千字文勅自外散騎侍郎周興嗣次韻
 天地玄黃宇宙洪荒日月盈異辰
 宿列張寒來暑往秋收冬藏閏
 餘成歲律呂調陽雲騰致雨露
 結為霜金生麗水玉出崑崙
 重榮界壘海賦河淡練

P. 2059V (部分)

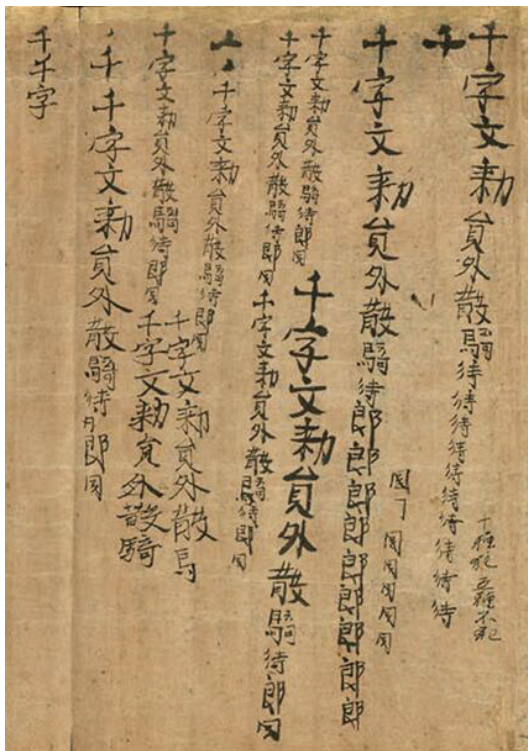
千字文勅自外
 千字文勅自外

BD1942V (部分)

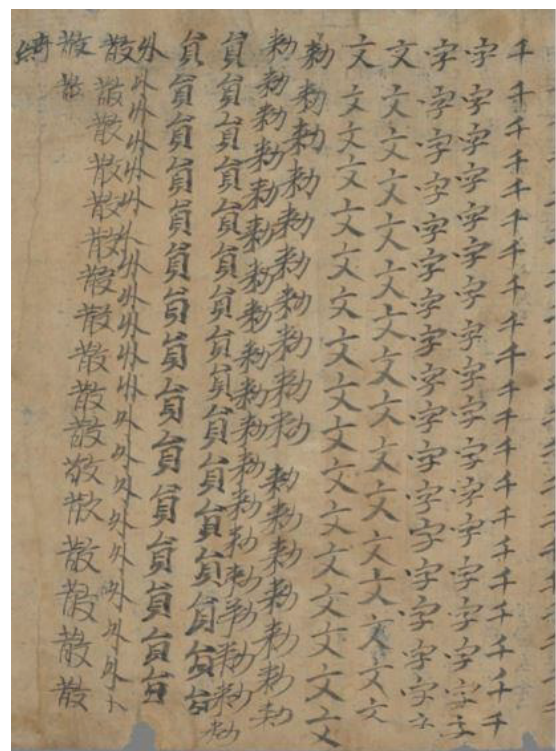
宋・陳元靚『事林廣記』

寫字時、先「上大」二字、一日不得過兩字。兩字端正、方可換字。若貪字多、必筆劃老草、寫的不好。寫得好時、便放歸。午後亦上學¹。

『上大人』を習字する時、學童には一日に2字しか書かせない。上手に書けたら、他の字を練習することになる。敦煌『千字文』寫本の中、「千字文、勅散騎員外郎周興嗣次韻」という文句や、始めの十數句だけを書かれているものが見られている。それらが示すのは、學郎が勉強を始めたばかりの頃にはあまり多くの内容を練習させないことの表れであろう。例えば、P. 2457V、P. 2769V、P. 3211V、S. 335V、S. 2894V、S. 4696V、S. 4901V、S. 5139V、羽707R、北大 D126V、S. 12492、BD1942V、BD4083V、BD9089V、P. 2059V、P. 2738V、P. 3391V、P. 3692V、P. 3705V 等がある。



S. 335V (圖1) (部分)



P. 2647V (圖2) (部分)

練習の繰り返しは、初學者にとって欠かせない行為である。S. 335V (圖1) では、正面に「四分律刪繁補闕行事鈔略解」が書かれ、背面に主に「依根本部差分房舍臥具人並安居法」が書かれている。そのうち、背面には、學郎が空白を利用して10行の『千字文』を書いたものだが、各行に「千字文、勅員外散騎侍郎」を書寫している。書體がやや稚拙であり、「侍」を「待」と誤寫しているところもある。P. 2647V (圖2) には、書き終えていない『千字文』が5編ある。第5編は字の繰り返し練習になっている。内容は「千字文、勅員外散騎(騎)

¹ (宋) 陳元靚『事林廣記』、長澤規矩也編『和刻本類書集成』第一輯、上海古籍出版社、1990年、253頁。

侍郎周興嗣次韻、天地玄黃、宇宙」である。各字ごとに2行練習し、「散」字の後に第1列だけを書き寫している。最後まで書き上げておらず、「騎」を「綺」に誤寫している。P. 2647Vのような稚拙な習字寫本は、Dx. 5169+Dx. 5171+Dx. 2201+Dx. 2204+Dx. 2507+Dx. 3095+Dx. 2482、Dx. 5185+Dx. 1896、Dx. 5614+P. 5031、S. 6173V、P. 3114、P. 3849p、P. 3243P13等が確認される。

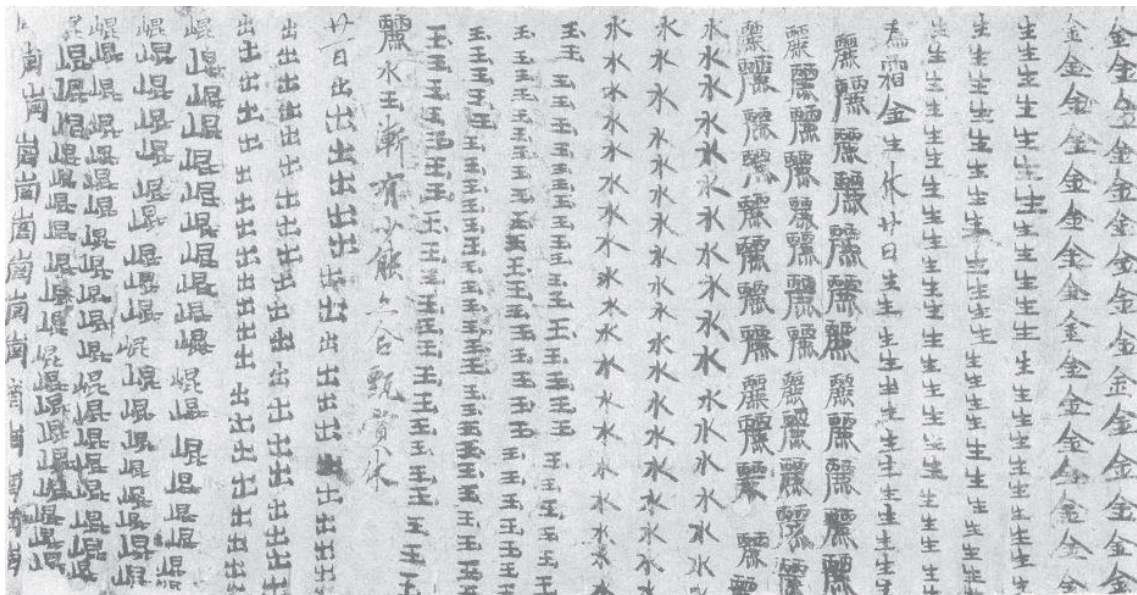


圖3 S. 2703 (部分)

習字には師範の教えが欠かせない。S. 2703 (圖3)¹、「光、果、玕、柰、李」から、「玉、出、岷、崗」まで、各字ごとに3、4行が書かれ、各行には約10から20字が書寫されている。行頭と行の真ん中の一つの字が上筆であることから、師範の範字と推測できる。學郎は毎日3、4字を練習して後、師範が「休」と日付を書く。例えば、圖3の中で、學郎は「為」「霜」「金」「生」の4字を3行ずつ書き終えた後、「為霜金生」という4字を書いた。今日はこの4字を書いた、ということを表しているだろう。師範が「休廿日」と書き、その日の習字が終わりを表している。習字の「麗、水、玉」の後に、「漸有少能、亦合甄賞」が書かれている。これは師範の評価であろう。

P. 3114 (圖4)では、20行が残されている。行頭には師範の範字が書かれている。各字ごとに2行の習字を行っている。内容は「千字文勅員外散騎侍郎」であり、習字の能力が高くない。

¹ 李正宇「一件唐代學童的習字作業」、『文物天地』1986年第6期、15頁。楊秀清「淺談唐、宋時期敦煌地區的學生生活—以學郎詩和學郎題記為中心」、『敦煌研究』1999年第4期、143頁。張新朋『敦煌寫本「開蒙要訓」研究』、160頁。

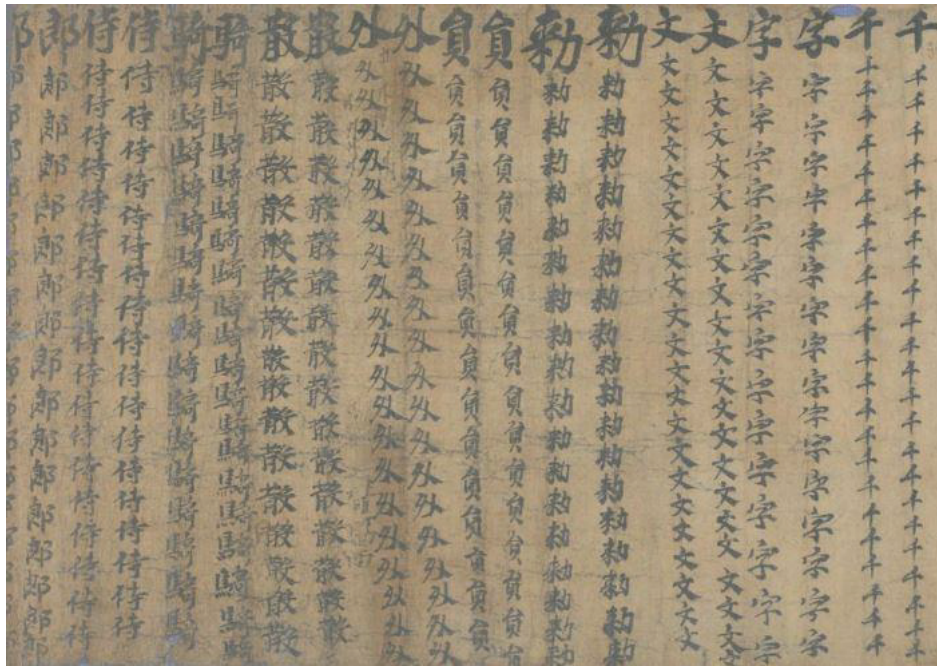


圖 4 P. 3114

S. 5723 は、12 行を残す寫本であり、行頭において同じく師範の範字で「徳建名立、形端表政、空谷傳」と書かれている。「建」字を 2 行にわたって練習した以外、他の字は 1 行ずつ練習されており、よくできた習字と考えられる。



圖 5 S. 4852 (部分)

高い習字能力を持っている場合、學郎は自ら手本を照らしながら練習することもできる。S. 4852（圖 5）では、殘存 22 行、「殷湯、坐朝問道、垂拱」との内容である。各字を 3 行ほどわたって書き、第 1 列と第 2 列に間隔がある。第 1 列は學郎が先に書いた範字であり、第 2 列からは練習の内容である。S. 5657V では、殘存 14 行、「霜、金生麗水、玉出崑」との内容である。各字を 2 行ほど書いている。書道の水準が高い學郎だろうと推測できる。

一定の習字基礎を身につけて、學郎は『千字文』の全文を書き、更に訓練を積む。陸世儀が述べているように、「先儒教小兒習字、先令影寫趙子昂『大字千字文』、稍長、習智永『千字文』。每板影寫十紙、既畢、後歇讀書一二月。以全日之力、通影寫一千五百字、添至二千三千四千字、如此一二月乃止。必如此方能日後寫多、運筆如飛、不至走樣、亦是一法」なのであった¹。敦煌寫本中、『千字文』全文が書かれているのは 4 件ある。比較的多くの内容を保存しているのは 18 件あり、それぞれも書體がしっかりしており、明らかに初學者が書いたものではない。これら 22 件は、學郎が「以全日之力」で模倣しようとしている作品であろう。『千字文』には一千字あるが、陸世儀によれば「添至二千三千四千字」であり、一千字以外にも學郎は様々な内容を書くことが必要とされる。『千字文』が書かれている寫本の中で、上圖 110 には『開蒙要訓』、『雜字』、『咸通六年（865）二月廿一日燉煌鄉百姓汜佛奴狀』も書かれている。P. 3416 には『孝經』も書かれている。S. 3835 には『太公家教』と『百鳥名』が書かれている。P. 2738V には『尚想黃綺帖』（王羲之『額書論』）、社司轉帖、『沉淪深浪波』、『正月孟春猶寒』、敦煌の郷名と寺名、蘭若の名、『學問當時苦』、『送遠還通達』、『上大夫』が連続して書かれている。S. 3287V には學郎詩『今日書他智（紙）』、『尚想黃綺帖』、『十五願禮佛懺』、『六十甲子納音性行法』、曲子、『李涉法師勸善文』が連続して書かれている。これらのことから、學郎は異なる内容を同じ寫本に書いているのは、宿題であった可能性も考えられよう。習字能力を高めるために、「日後寫多、運筆如飛、不至走樣」ということである。習字と同時に、識字や暗記することもできる。陸世儀が「凡弟子學寫倣書、不獨教他字好、即可兼識字及記誦之功」²と述べる通りである。

『千字文』を練習する時、他の方法を利用することもある。

P. 4066V+P. 2759V+P. 2771V に、8 編の『千字文』がある。ただし、P. 4066V と P. 2759V は直接に綴合するのではなく、中間に欠落があるため、完全ではない。第 1 編に残されたのは「近恥」から、最後の「焉哉乎也」までである。學郎は全文を書いたと推測できる。第 2 編の中間は欠落しているが、首尾は完全である。同じく全文が書かれていたと推測できる。残りの 6 編は全て不完全である。特に最後の 4 編は、書體が稚拙であり、書儀の内容も混ざっている。張新朋によると「こちら 8 編は全て同一人で書かれているが、前の 3 つを書き寫すのはまじめに行っており、字跡が整っている。4 つ目からの文字は比較的にぞんざいで、しかも誤字も多い。學童の書字への氣力が低下し、むやみに落書きをした」ものである³。しかし、筆者は、書寫者が 3 人いるとの立場に立つ。

¹ （清）陸世儀『陸桴亭思辨錄輯要』、王雲五主編『叢書集成初編』、2 頁。

² （清）陸世儀『陸桴亭思辨錄輯要』、王雲五主編『叢書集成初編』、2 頁。

³ 張新朋『敦煌寫本「開蒙要訓」研究』、133 頁。

前4篇は、確かに字が似ているが、2人で書いたものとする。1、3編は1人、第2、4編は1人である。第1編には「**拜**」があり、3編目には「**律**」があり、書き方が同じである。第2、4編の「律」は全て「**律**」になる。第3編の「**崇**」では、4編目には「**崇**」と書いてあり、書き方も違う。そして、第1と3編の墨色が濃く、それに對し第2、4編は薄い。

他の人が後4篇を書いており、稚拙な文字である。それらは前に書き出したものとは全く違う。後4編に「散騎侍郎周興嗣此韻」と書いてある。「待」と「此」が誤字である。最後から3番目の内容に、「**宗**」「**城**」「**李**」「**人**」は誤字である。前4編にはない間違いである。習字する気が消失したとしても、このような間違いはほしくないはずであることから、前の2人の學郎が明らかに長い時間習字していたことが読み取れる。彼らは交替で『千字文』を書き出しているのである。3人目の學郎の習字は時間が短く、こちらの寫本で『千字文』を4回書くが、全て短い。書くことができたのは最初の部分だけであった可能性もある。また、寫本に書儀の内容もあることから、その勉強も行っていたことが分かる。

P. 3211Vは、4點の識語が書かれているが、最も完全なのは「乾寧三年丙辰歲次二月十九日靈圖寺學士郎汜賢信書記之耳」である。『千字文』に47行が残され、各行約13字であり、100字ごとに寫本の上の空白に「**一百**」が書かれている。いくつかの本文の右側に注があり、校訂、注音、字を補っている。例えば、「**枇杷**」に「**琵琶**」と注音し、「**葉**」を「**葉**」と校訂し、「**絳**」に「**降**」と注音し、「**餐**」の右側に「**飯**」を補っている。學郎が『千字文』を書き上げた後、もう一度勉強する中で精査し、脱漏を補う作業を行なったのであろう。

一部の寫本に誤字があり、ある程度學郎の學習状況の反映を読み取ることができる。P. 2059Vの「**潤**」「**城**」「**楊**」「**裘**」「**光**」「**朱**」「**界**」の誤字が見られる。羽742Rでは、「**宇宙弘荒**」「**日月盈側**」「**晨宿列張**」「**閏餘誠歲**」「**玉出崑光**」「**鱗潛羽翔**」「**龍師父帝**」「**吊民罰罪**」等に、「**側**」「**晨**」「**誠**」「**光**」「**翔**」「**父**」「**罰**」の誤字が見られる。羽707Rでは、「**辰宿烈張**」「**潤餘誠歲**」「**鱗潛羽翔**」等に、「**烈**」「**潤**」「**誠**」「**翔**」の誤字が見られる。P. 3658の「**辰宿烈張**」では「**烈**」、P. 2667Vの「**劍號矩闕**」「**菜重界量**」では「**矩**」「**界量**」、S. 4504Vでは「**垂拱平**」の「**平**」、S. 10275Vでは「**散騎侍郎**」の「**待**」である。これらは全て誤字であり、同音あるいは發音が近い字に書かれていることが多い。勉強方法としては、學郎同士が協力して、一人が読み上げ、もう一人が書き出している可能性がある。『千字文』の字を完全に把握していないため、聞きながら内容を書く時に、書き間違いが起ると考えられる。もちろん、學郎の不注意も誤字が多い原因になる。

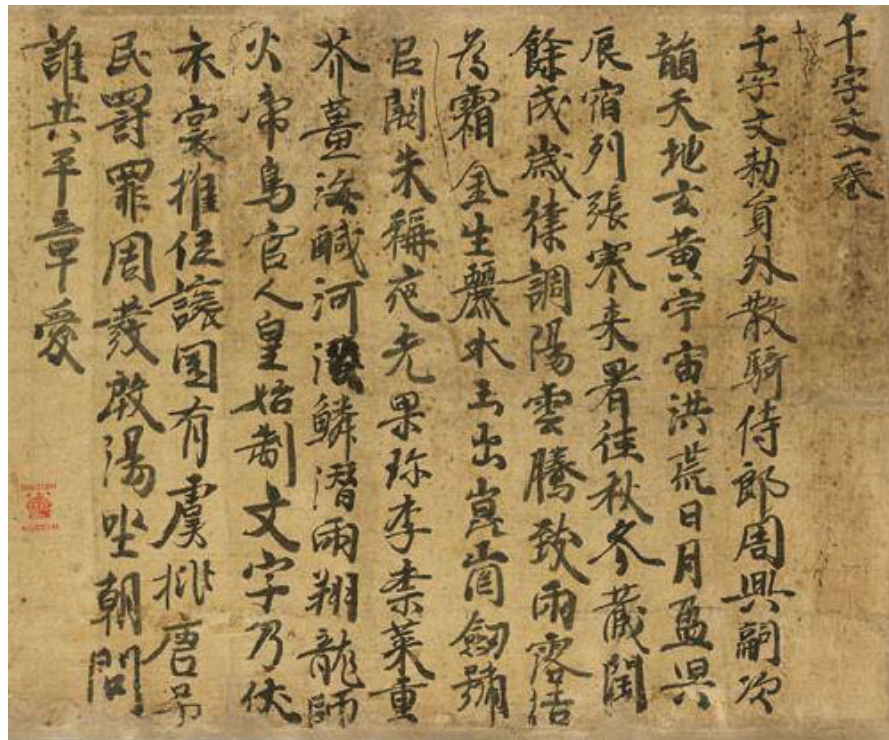


圖6 S. 5814

精緻に書かれている寫本にも、誤字が見られる場合がある。例えば、S. 5814 (圖6) の「朱稱夜光」「乃伏衣裳」「有虞桃唐」「吊民罰罪」「誰共平章」には、「朱」「伏」「桃」「罰」「誰共」、Dx. 10422 の「玉出崑」では「崑」、P. 4899V+P. 5546V の「[鱗]潛羽祥」「垂共平章」では「祥」「共」、S. 5711 の「散奇侍郎周興嗣自」「宇宙共光」「神宿列張」「劍號鋸闕」では「奇待」「自」「共」「神」「鋸」である。南宋・樓钥の『攻媿集』には、「近世讀書、或至苟簡率意、誦習字有不識者始加閱視、有訛謬終身不自覺知」とある¹。學郎達は長い間勉強し、書道の水準が高くなったものの、頻繁に誤寫をすることから、學習の粗雑なところが見られている。

小結

『千字文』の最初の作者は鐘繇である。晉・中宗元皇帝時期、『千字文』は危うく破棄されかけたが、王羲之が改めて書き寫したため、保存された。梁武帝の時、周興嗣が『千字文』を次韻した。その後、書道を練習するための皇子の手本とされた。陳朝の王羲之の七世孫智永は、『真草千字文』800冊を模寫し、浙東の寺に配り、『千字文』の流布が促された。『千字文』は習字の手本としてもよく知られており、識字文獻でありかつ習字蒙書も兼ねている。

敦煌寫本『千字文』により、千年前の敦煌學郎が『千字文』を學ぶ過程と方法が浮び上がる。學郎はまず『千字文』を暗唱して、師範の指導のもと習字を行なっていたらう。習字を始めたばかりの場合、『千字文』の冒頭の文を書き、「千字文、散騎侍郎周興嗣次韻」と

¹ (南宋) 樓钥『攻媿集』卷七三『跋趙共甫古易補音』、『四部叢刊・集部』、民國涵芬樓刊本。

書くだけであり、その練習を繰り返して、徐々に上手な書き手になる。もちろん、師範は範字を書き、學郎に模寫させる。一般的に、1字が1行から3行まで書かれていた。師範は學郎の習字に対して評価を行い、進歩のある學郎に對し贊辭を送るとともに、學郎が一定の基礎を備えた後に、自分で練習するようになる。學郎の習字能力はさらに向上し、多くの字を書くことができるために、師範は一日のうちに二三千字を書き寫させていた。敦煌文獻に書寫されている寫本の中に、多くの内容が書かれている。例えば、『孝經』、『尚想黃綺帖』、『正月孟春猶寒』、『開蒙要訓』、『太公家教』、『百鳥名』、『送遠還通達』、社司轉帖等である。それは、大量の書寫によって、習字しながら、識字、暗唱するのではないのだろうか。

第四章 『正月孟春猶寒』

『正月孟春猶寒』に関する敦煌寫本はこれまで P. 2738V、P. 3705V、P. 2633、S. 1163V、羽 663R、P. 4994V、S. 10275、羽 712 の 8 件が確認されている。P. 2633 に「正月孟春猶寒一本」という題が残されているため、類似の寫本に『正月孟春猶寒』との擬題を冠することにする。その内容は「正月孟春猶寒、二月仲春漸暄、三月季春極暄、四月孟夏漸熱、五月仲夏盛熱、六月季夏極熱、七月孟秋猶熱、八月仲秋漸涼、九月季秋霜冷、十月孟冬漸寒、十一月仲冬嚴寒、十二月季冬極寒」である。8 件のうち、2 件には學郎の識語がある。寫本の内容は、短く読みやすく、文字の習得や書簡の常套句が並ぶ実用性が高いものであることから、『正月孟春猶寒』は敦煌地域の學郎に識字や時令學習、手紙を書くための學習材料として使用されていたものと考えられる。

一 寫本の概要

8 件の寫本について以下の通りである。

1. P. 2738V

卷子。正面には 119 行が残され、比較的整っている。内容は『太公家教』である。背面には 114 行が残され、やや稚拙であり、『千字文』、『尚想黃綺帖』、『上大夫』、社司轉帖、敦煌の郷名と寺名及び『正月孟春猶寒』等が連続して書かれている。識語「咸通十年己丑六月八日男文英母因是」から、背面の書年代は 869 年と推測できる。筆跡から判断すると、正面と背面を書寫した人物は同じではない。背面を書寫したのは、初學者ではないと予測できるが、『正月孟春猶寒』一文の中に「冬」を誤って「東」としているところから、知識水準は高くはないことが予想される。圖録と IDP の寫眞を参考に、寫本を校録する。

正月孟春

正月孟春猶寒、二月仲春漸暄、三月季春極暄、四月孟夏漸熱、五月仲夏盛熱、六月季夏極熱、七月孟秋猶熱、八月仲秋漸涼、九月季秋霜冷、十月孟東（冬）漸寒、十一月仲東（冬）嚴寒、十二月季東（冬）極寒。

2. P. 3705V

卷子。正面には 105 行が残され、比較的整っており、『論語卷第四』、姓名、『雜字』等書かれている。背面には 75 行が残され、亂雑であり、『千字文』、『論語』、『上大夫』、『雜字』、數字、姓名、『正月孟春猶寒』等が連続して書かれている。識語「中和二年十二月學生 〇」がある。「中和二年」から、背面の書寫はおよそ 882 年である。圖録と IDP の寫眞を参考に、寫本を校録する。

正月孟春猶寒、二月仲春漸暄、
正月孟春

3. P. 2633

卷子。正面には106行が残され、比較的整っており、『斷齶新婦文』、『正月孟春猶寒一本』、『酒賦』、『崔氏夫人訓女文』、『楊滿山詠孝經壹拾捌章』が連続して書かれている。最後に識語「辛巳年五月五日汜員昌、龍賓上」がある。『正月孟春猶寒一本』は15行あり、『正月孟春猶寒』、『雜抄』、『宣宗皇帝御製勸百寮』が含まれている。後ろに識語「正月孟春猶寒一本、書手判官汜員昌記」が書かれている。これら2つの識語からは、正面の内容は辛巳年汜員昌が書寫していた。李正宇「敦煌學郎題記輯注」は、「辛巳年」を922年とする。

背面には燃灯文稿の數行、「酒賦一本、江州刺史劉長卿」、「正月孟春猶」、「太公家教一卷」、「辛巳年十二月壹日立」、「辛巳年二月十三立契慈惠鄉百姓康不子…」、社司轉帖等が連続して書かれている。書寫された上記内容の筆跡は正面と同じである。よって、「辛巳年」に書寫された可能性が高い。また、「壬午年正月九日淨土寺南院學仕郎」[㊦]という識語がある。

「辛巳年」の次は「壬午年」である。「學仕郎」[㊦]は「壬午年」にこの寫本を手に入れ、識語も加えた。後ろに「□(斷)齶新婦文一卷并」、「孝經一卷并矛(序)」、「南無章花來向」と便物歴や契約等、字體はよい。書寫したのは同一人ではないだろう。圖録とIDPの寫眞を参考に、寫本を校録する。

正月孟春猶寒、二月仲春漸暄、三月季春極暄、四月孟夏漸熱、五月仲夏盛熱、六月季夏極熱、七月孟秋猶熱、八月仲秋漸涼、九月季秋霜冷、十月孟冬漸寒、十一月仲冬嚴寒、十二月季冬極寒。年周十二月、伏惟某官、尊體起居萬福。

4. S. 1163V

卷子。正面には65行が残され、『太公家教』である。最後に識語「庚戌年十二月十六日永安寺學仕郎張順進自手寫記」がある。「庚戌年」について、高國藩「敦煌寫本『太公家教』初探」では890年と主張する。汪泛舟「『太公家教』考」では、初めて「學仕郎」という言葉が確認されるのが天祐二年(905)からであることから、この「庚戌年」は乾祐三年(950)と主張した。李正宇「敦煌學郎題記輯注」や、池田温『中國古代寫本識語輯録』等も950年と比定している。本論も950年との見解に従う。

背面には「開蒙要訓一卷」、社司轉帖、便麥歴、『太公家教』、『門來善遠』、『正月孟春猶寒』、識語「庚戌年五月一日」[㊦]「進書記」等が連続して書かれている。筆跡からは、背面と正面の筆跡は似ている。「庚辰年五月一日」[㊦]「進書記」中の名前は永安寺學仕郎張順進であろう。書寫年代は950年である。圖録とIDPの寫眞を参考に、寫本を校録する。

正月孟春猶寒、二月仲春漸暄、三月季春極[㊦](暄)。

學文之家 正月孟春☒(猶)□(寒)、二月仲春漸暄、三月季春極□(暄)、四月孟夏漸熱、五月☒☒(仲夏)□□(盛熱)。

5. 羽 663R

卷子。正面には 20 行が残され、『正月孟春猶寒』と『雜抄』が書かれている。背面には見るところが 10 行が残され、「南無東方佛、南無南方佛、南無北方佛、南無西方佛」、識語「浄土寺學郎曹延祿」、『送遠還通達』、姓名、「於」の習字等が連続して書かれている。筆跡によれば、正面と背面を書寫したのは同一人ではないだろう。識語から、背面の書寫者は浄土寺學郎曹延緯であろう。曹延緯は歸義軍統治者曹氏の子弟である。書寫年代について、金澄坤「唐五代敦煌寺學與童蒙教育」は顯德五年(958)とした。本論もこれに従う。圖録と IDP の寫眞を参考に、寫本を校録する。

正月孟春猶寒、二月仲春漸暄、三月季[春]極暄、四月孟夏漸熱、五月仲夏盛熱(熱)、六月季夏極熱(熱)、七月孟秋猶熱、八月仲秋漸涼、九月季秋霜冷、十月孟冬漸寒、十一月仲冬嚴寒、十二月季冬劇寒。

6. P. 4994V

卷子。正面には 16 行が残され、整っており、『毛詩』卷第九が書かれている。背面には 18 行が残され、首題の「諸雜記字録為用後流傳」とあり、『正月孟春猶寒』、『雜抄』、『王昭君』が書かれている。筆跡から判断すると、正面と背面を書寫したのは同一人ではない。圖録と IDP の寫眞を参考に、寫本を校録する。

諸雜記字録為用後流傳

正月孟春猶寒、二月仲春漸暖、三月季春極暄、四月孟夏盛(漸)熱、五月仲夏盛熱、六月季夏極熱、七月孟秋已熱、八月仲秋漸涼、九月季秋霜冷、十月孟冬漸寒、十一月仲冬盛(嚴)寒、十二月季冬極寒。

7. S. 10275

卷子。正面には 4 行が残され、『正月孟春猶寒』が書かれている。背面には 6 行が残され、『千字文』と行人轉帖が書かれている。圖録と IDP の寫眞を参考に、寫本を校録する。

□□□(正月孟)☒(春)猶寒、二月仲春漸暄、三月季□□□(春極暄)、□(四)☒(月)孟夏漸熱(熱)、五月仲夏盛熱、□□□□□□(六月季夏極熱)、七月孟秋猶熱、八月仲秋漸涼、□□□□□(九月季秋霜)冷、十月孟冬漸寒、☒☒☒☒☒☒☒☒(十一月仲冬嚴寒)(後缺)

8. 羽 712

卷子。正面には4行が残され、比較的整っており、『正月孟春猶寒』が書かれている。圖録とIDPの寫眞を参考に、寫本を校録する。

正月孟春猶寒、二月仲春漸暄、三月季春極暄、□□□□（四月孟）夏漸熱
（後缺）

上記寫本の中、4件は完備しているが、4件は完備していない。また、2件の書寫者は學郎と判断できる。S. 10275と羽712に欠損部分があるため、張敖『新集吉凶書儀』の一部分の可能性がある。寫本年代から見れば、最も早いのは869年、最も遅いのは958年である。約百年の間、『正月孟春猶寒』は敦煌地域に流布していたことが分かる。

『正月孟春猶寒』は、十二カ月、節氣や氣温を並べている。それは、現存する敦煌書儀の時令文と似ている。趙和平の『敦煌寫本書儀研究』によれば、「節氣と時令の用語を並べ、…明らかに一般的な正規の書儀の通例である」とされる¹。P. 2633の中、『正月孟春猶寒』には「年周十二月、伏惟某官、尊體起居萬福」と書かれている。そのため、『正月孟春猶寒』は書儀であると判断できる。

二 『正月孟春猶寒』と書儀

書儀は、手紙を書く際に使われる参考書のことである²。書儀の源流について、周一良「書儀源流考」は西晋・索靖の『月儀』、あるいはもっと早くに遡るものとする³。實は、最初十二カ月を綱目とする本は『禮記・月令』であり、その中で孟春、仲春、季春等十二カ月の氣候を必要することが記載されている。唐代の書儀の中にも『禮記・月令』が引用されている。武則天の時期の書儀P. 3900は、毎月の時令文の後、『禮記』を引用している。例えば、『禮・月令』云：律中無射……とある⁴。また、唐前期のP. 4024は、内容は「一月為辜。『月令』云：律中黃（後に欠かせない）」⁵となっていることから、時令文の源流と編集は『禮記・月令』に関係があると推測される。

唐五代に残った一部の書儀に、時令文がある。例えば、唐前期の『朋友書儀』、P. 3900武則天時期の『書儀』、鄭餘慶『大唐新定吉凶書儀』（以下『鄭書』と略稱する）、唐末張敖の『新集吉凶書儀』（以下『張書』と略稱する）、五代無名の『新集書儀』等である。それらの時令文は異なる内容がある。また、『朋友書儀』、『張書』、『新集書儀』中に、『正月孟春猶寒』に類似する文句が確認される。『朋友書儀』の最初の時令文には『正月孟春猶寒』はないものの、後ろの模範文に「正月孟春猶寒、分心兩處、相憶纏懷…」や「二月仲春漸暄、離心抱

¹ 趙和平『敦煌寫本書儀研究』、新文豐出版公司、1993年、112-113頁。

² 周一良、趙和平『唐五代書儀研究』、中國社會科學出版社、1995年。

³ 周一良「書儀源流考」、『歷史研究』1990年第5期、第95頁。周一良、趙和平『唐五代書儀研究』、第94頁。

⁴ 趙和平『敦煌寫本書儀研究』、154頁。

⁵ 趙和平『敦煌寫本書儀研究』、432頁。

恨、尉（慰）意無由…」¹等の内容が認められる。

十二カ月の模範文の第一言は『正月孟春猶寒』と全て同じであり、『張書』の『吉儀卷上』²の中の時令文には、

春日青陽、律呂名正月太簇、二月夾鐘、三月姑洗。

正月孟春猶寒、首春餘寒、初春尚寒、早春薄寒；

二月孟春漸暄、中春已暄、青春稍暄、春景暄和；

三月季春極暄、暮春甚暄、晚春劇暄、末春暄暖。

夏日朱明、律呂名四月仲呂、五月蕤賓、六月林鐘。

…

『正月孟春猶寒』は『張書』の時令文の十二カ月の第一言を合わせて構成した。つまり、『正月孟春猶寒』の形式と言えば、『張書』と最も類似している。『正月孟春猶寒』は『張書』から発展してきた可能性が指摘できよう。趙和平の統計によれば、『張書』には合計 12 件の寫本があり（上巻 8 件、下巻 4 件）、張敖が別々に書いた『新集諸家九族尊卑書儀』を加えると、全部で 13 件の寫本となる³。最も早い識語は S. 2200 の「大中十年（856）九月十一日未時」であり、最も遅いのは P. 3886 の「維大周顯德七年（960）歲次庚申七月一日大雲[寺]學郎鄧清子自手記」である。前後約百年の開きがあることから、敦煌地域に『張書』の影響が非常に大きかったことが分かる。そして、P. 2646 の書寫者は學郎張懷通であり、P. 2622 の書寫者は學郎李文義である可能性があり、P. 3886 の書寫者は大雲寺學郎鄧清子である⁴。これら學郎が書寫した寫本に『張書』は確かに教材として使われていたのである。また、先述の如く、『張書』中の時令文の形式は 6 字また 4 字であり、覚え歌に近い形式であることから、簡潔さと流暢感が感じる。『正月孟春猶寒』の角度から見ると、3 件の寫本が學郎によって書寫されている。更に、寫本の書寫年代から見ると、最も早いのは P. 2738V であり、「咸通十年（869）己丑年六月八日男文英母因是」との識語がある。『張書』寫本では、書寫年代について最も早いのは S. 2200—大中十年（856）である。咸通十年より約 13 年早いことから、『正月孟春猶寒』は『張書』から出て、簡易版の書儀として學郎の勉強に使われたことと推測される。

三 『正月孟春猶寒』の用途と學習

敦煌の書儀の用途の一つとして、學郎が手紙を書く際の教育が挙げられる。『張書』の序言には、「今采其的要、編其凶吉、録為兩卷。使童蒙易曉、一覽無遺、故曰纂要書儀、敘之

¹ 趙和平『敦煌寫本書儀研究』、101、102 頁。

² 趙和平『敦煌寫本書儀研究』、519-520 頁。

³ 趙和平『敦煌寫本書儀研究』、546-549 頁。

⁴ 趙和平「敦煌寫本書儀略論」、中國敦煌吐魯番學會編『敦煌吐魯番學研究論文集』、漢語大詞典出版社、1990 年、598-599 頁。周一良、趙和平『唐五代書儀研究』、35-36 頁。

云耳。」とある。張敖がこの書を編集した目的の一つは、「童蒙」教育にあった。趙和平は、敦煌寫本中に書儀が多く保存されている背景を検討し、書儀が敦煌地域の童蒙教材として使われたため、「學仕郎」あるいは「學郎」がよくその内容を讀んで書寫したと指摘し、敦煌石室によって、これらのものが今日までよく保存されたものと指摘している¹。書儀の編集者から現在の研究者まで、敦煌の書儀は啓蒙教育に用いる材料であるとの知見は一貫している。

『隋書・經籍志』によれば、『勸學』一卷の後に「蔡邕撰……又『幼學』二卷、朱育撰。『始學』十二卷、吳郎中項峻撰。『月儀』十二卷、亡」²と注釋を施している。この『月儀』は、後漢から晋代までのものの可能性がある。『隋書』では、『月儀』は小學類に分類されている。『勸學』、『幼學』、『始學』と併記されていることから、『月儀』の性質は啓蒙教育と關連があったのだろう。また、『南史・任昉傳』の記載には「生昉、身長七尺五寸、幼而聰敏、早稱神悟。四歲誦詩數十篇、八歲能屬文、自制『月儀』、辭義甚美」とある³。任昉は、宋・齊・梁三朝を経験し、「神悟」と稱された人物であり、八歳にして『月儀』を創作したとされる。八歳より幼い頃から書儀を學び、八歳には既に書儀の内容とその形式に精通していたからこそ、『月儀』を創作することができたのだろう。

書儀を勉強する際、まず年月日、春夏秋冬、時令知識から勉強する。時令文は、索靖『月儀』と『唐人月儀帖』にはなかったが、初唐の『朋友書儀』から現れている。『朋友書儀』の冒頭には『辯秋夏春冬年月日』とあり、その後「年、唐虞曰載、夏曰歲、商曰祀、周曰年、亦曰稔、齡、并可通用……」と書かれ、次いで「月」「日」「春時」「夏時」「秋時」「冬時」のそれぞれに解釋がある。この編集方式からは、蒙書の特徴が窺われる。『鄭書』の『年敘凡例第一』が『朋友書儀』を参照して模倣しており、内容も類似している。

『正月孟春猶寒』の内容は、春夏秋冬、十二カ月だけである。比較的簡単な時令知識であるが、その内容は、學郎が把握しなければならない内容となっている。『正月孟春猶寒』の言葉を例とすれば、月、時令、氣温という3つの情報が含まれている。この内容は、敦煌蒙書に反映している。『雜抄』に「四時」、「八節」の内容及あり、『孔子備問書』にはより豊富な内容が書寫されている。

『孔子備問書』⁴

何為（謂）為春、
春：正月、二月、三月為春、暖也。
何謂為夏、
四月、五月、六月為夏、夏暑熱也。

¹ 趙和平「敦煌寫本書儀略論」、中國敦煌吐魯番學會編『敦煌吐魯番學研究論文集』、598頁。周一良、趙和平『唐五代書儀研究』、35頁。

² 『隋書』卷三二『經籍志一』、中華書局、1973年、942頁。

³ 『南史』卷五九、中華書局、1975年、1452頁。

⁴ 鄭阿財、朱鳳玉『敦煌蒙書研究』、甘肅教育出版社、2002年、201-202頁。

何謂為秋、
七月、八月、九月、秋者涼冷也。
何謂為冬、
十月、十一月、十二月為冬、冬者極寒也。
何謂四孟、
孟者始也。正月孟春、四月孟夏、七月孟秋、十月孟冬、此是四孟。孟者極也、盛也。
何謂四仲、
仲者中也。二月仲春、五月仲夏、八月仲秋、十[一]月仲冬、此是四仲也。
何謂四季、
季者、末也。三月季春、六月季夏、九月季秋、十二月季冬、此四季末也。

ここでは、春夏秋冬、気温及び四孟、四仲、四季を詳しく説明している。『正月孟春猶寒』には、基本的にこれらの内容が含まれるが、さらに簡単であり、時令学習のための学習材料として使用されていたものと考えられる。

敦煌文獻に『正月孟春猶寒』に關するものは8件ある。次に、寫本の状態から學郎の勉強の方式を分析する。

P. 2738V は、内容が最も豊富であり、年代も最も早い。『上大夫』、『千字文』、『尚想黃綺帖』は習字教材である。社司轉帖の書寫は識字と文書訓練のためである。敦煌の郷名と寺名及び『送遠還通達』、『沉淪淝浪波』を書寫するのは、識字と習字のためだろう。この内容からは、識字と習字が主要な目的であったこと、書寫者は學郎であったこと、その書寫者は識語に言う「男文英」という人物であった可能性が考えられる。

P. 3705V の内容も豊富である。書寫順序は『雜字』、『千字文』、姓名、『論語』、數字、姓名、『正月孟春猶寒』、姓名、「中和二年」、『上大夫』である。『雜字』に「小麥、青麥、豌豆…」、「鏹鍋鐵鏗…」等があり、筆跡が整っている。他の内容は、字體がやや稚拙であることから、別の人物が書寫したと考える。筆跡の稚拙な部分は年若い學郎が書寫し、随意に書寫した識字學習内容と考えられる。

この2件の内容は主に識字と習字である。『正月孟春猶寒』の用途の1つは、學郎の識字のためである。現在の教育制度で説明すると、およそ小學校低年級の學生の學習内容にあたる。

P. 2633 には5編の内容がある。第2編は『正月孟春猶寒一本』（圖1）であり、『正月孟春猶寒』、『雜抄』、『宣宗皇帝御製勸百寮』が含まれている。書寫者は書手判官汜員昌である。羽663R、P. 4994V の内容と P. 2633 中の『正月孟春猶寒一本』の内容とは相似ている。同じく『正月孟春猶寒』と『雜抄』の一部分が連続して書かれている。

以下は『正月孟春猶寒一本』を校録する。

正月孟春猶寒、二月仲春漸暄、三月季春極暄、四月孟夏漸熱、五月仲夏盛熱、

六月季夏極熱、七月孟秋猶熱、八月仲秋漸涼、九月季秋霜冷、十月孟冬漸寒、十一月仲冬嚴寒、十二月季冬極寒。年周十二月、伏惟某官、尊體起居萬福。何名四時、春夏秋冬。何名八節、立春、春分、立夏、夏至、立秋、秋分、立冬、冬至。何名三才、天地人。何名三光、日月星。何名五岳、東岳泰山、西岳華山、南岳衡山、北岳恒山、中岳嵩高山。何名四瀆、江河淮濟。何名三川、秦川、洛川、蜀川。何名八水、浮水、渭水、灞水、滻水、澧水、澇水、潦水、滴（瀟）水¹。何名五行、金木水火土。何名五姓（聲）²、宮商角徵羽。何名五常、溫良恭儉讓。何名五德、仁義禮智（信）³。何名六藝、禮樂射御書數。何名五色、青黃赤白黑。何名五菓、胡桃、石榴、栗子、雞頭、菱角。何名五穀、房芒角穗散。宣宗皇帝御製勸百寮。遠非道之財、誠過度之酒。傲（傲）慢莫起於心⁴、讒佞勿宣於口。學必近善、交義擇友。骨肉貧者莫疏、他門雖富勿厚。常思己過之非、每慮未來之各（咎）⁵。克己儉約為先、恥（處）衆[謙]恭為首⁶。暫食祿而忝切、效農力而未有。

正月孟春猶寒一本

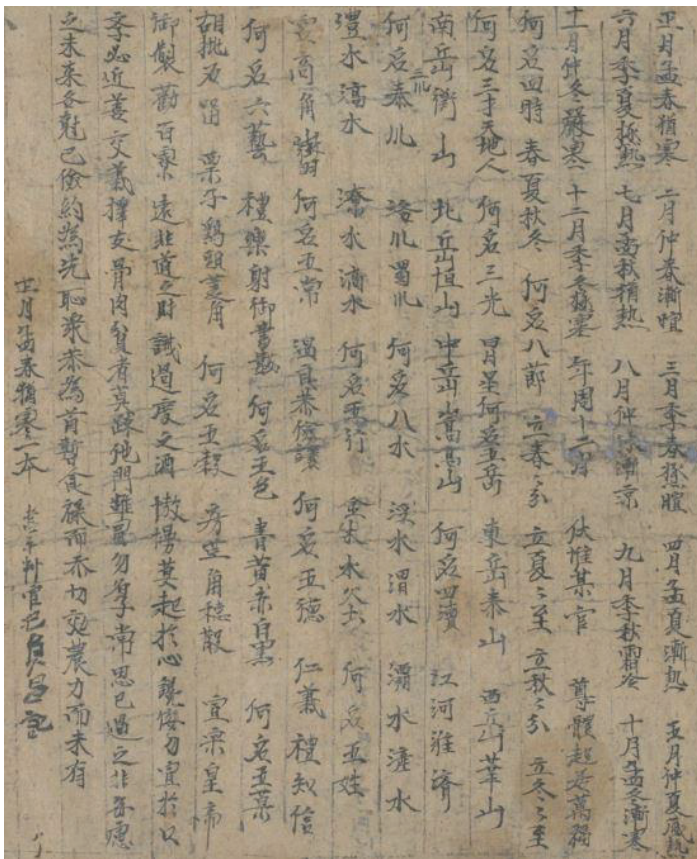


圖 1 P. 2633 (部分)

¹ P. 3671『雜抄』より校正。
² 姓、通「生」、『敦煌蒙書研究』に「聲」と校正。
³ P. 3649『雜抄』より校正。
⁴ P. 3806Vより校正。
⁵ 原作は「每慮之未来各」であり、P. 3806Vより校正。
⁶ P. 3806Vより校正。

『正月孟春猶寒』の後ろには、1問1答の形式で、四時、八節、三才、三光、五岳、四瀆、三川、八水、五行、五姓、五常、五德、六藝、五色、五菓、五穀、三農、五味が紹介されており、時令、天文、地理、道德、食物等日常生活知識の内容が含まれている。全て16問16答から成り、全て『雜抄』の内容である。『雜抄』はまた、『珠玉抄』、『益智文』、『隨身寶』と呼ばれることがある。中晩唐時代の敦煌に流行していた教育百科寶典であり¹、様々な内容が含まれていることから、『孔子備問書』の形式と類似する²。一問一答の形式は、唐代佛教典籍の形式と関連しており、特に釋門論疏、解釋名相と法數の問答形式に影響を受けたと言われる³。この文章が平易に読めるのは、そのためである。

その中に15問15答は『雜抄』に由来しているが、『雜抄』と比べると、内容の順序が異なっている。『雜抄』の内容の順は、「論三川、八水、五岳、四瀆」「論九州、九經、三史、三才」「論六國、六藝、五味、五辛」「論五谷、五果、五射、五德」「論五姓（聲）、五行、三老、三備」「論三光六暗（物）六齊（氣）三農元正三朝」…「辯四時八節」である⁴。編集者が『雜抄』の内容から比較的簡単に実用的な内容を抽出し、利用者がより便利に学習できるため、一定の方法によって再配列している。また陳麗萍により、「何名五常、温良恭儉讓」が『雜抄』の内容ではないと指摘されている⁵。敦煌に流布した『雜抄』がこの言葉を脱落されていたのかもしれないが、その一方で、それは本来『雜抄』にはない文句であり、編集者が補足した可能性も考えられる。なお、古代の「五常」は、「仁義禮智信」を意味し、「五德」は「温良恭儉讓」を意味する。しかし、『雜抄』の各寫本に「何名五德、仁義禮知（智）信」と書かれており、「五常」と「五德」の内容が入れ換わっていることが分かる⁶。傳寫の過程で、多くの寫本がこの常識を混乱したのであろう。

羽663R（圖2）に『正月孟春猶寒』と『雜抄』（一部分）が連続に書かれている。「何名四時」から「何名三才」まで、16問16答が残されているのだが、P.2633と比べると、「何名三光」と「何名五行」がなく、「何名三農、春蚕、夏麥、秋禾」と「何名五味、辛甜酸咸苦」が加えられている。

P.4994V（圖3）には、『正月孟春猶寒』、『雜抄』（一部分）、『王昭君』がある。『雜抄』（一部分）に、5問5答が残されている。「何名」という言葉を省略し、「四時、春夏秋冬」と書寫しており、より簡略化されたものであることが指摘できる。5問は「四時」、「八節」、「三才」、「四瀆」、「五岳」である。

上記3件の寫本の内容は、淵源が同じと考えられる。何者かが『正月孟春猶寒』と『雜抄』とを纏めたのであろうが、果たして両者にいかなる関連があるのか。『正月孟春猶寒』は書儀の中の時令文である。『雜抄』の中に「何名四時」、「何名八節」も時令と関連する知識で

¹ 那波利貞「唐鈔本『雜抄』攷—唐代庶民教育史研究の一資料—」、『支那學』10、1942年、1-91頁。那波利貞著『唐代社會文化史研究』、創文社、1974年、197-268頁。

² 鄭阿財、朱鳳玉『敦煌蒙書研究』、182頁。

³ 鄭阿財、朱鳳玉『敦煌蒙書研究』、183頁。

⁴ 鄭阿財、朱鳳玉『敦煌蒙書研究』、170-172頁。

⁵ 陳麗萍「日本杏雨書屋藏羽663R號敦煌文書的定名」、『魏晉南北朝隋唐史資料』31輯、2015年、282頁。

⁶ 陳麗萍「日本杏雨書屋藏羽663R號敦煌文書的定名」、『魏晉南北朝隋唐史資料』31輯、283頁。

ある。両者の内容には類似性があると考えられる。『雑抄』全文を見ると、「何名四時」、「何名八節」は「辨四時八節」という題目の下にある。『朋友書儀』の『十二月相辯文』は『辯秋夏春冬年月日』から始まっている。「辯」と「辨」が互換されることから、両者の題目の形も類似しているであろう。これらの関連から、『正月孟春猶寒』と『雑抄』とを一緒に書寫するようになったのであろう。また、『正月孟春猶寒』は主に6字から成る。この部分の『雑抄』は主に4字あるいは5字から成り、読みやすく、覚えやすいものとなっている。

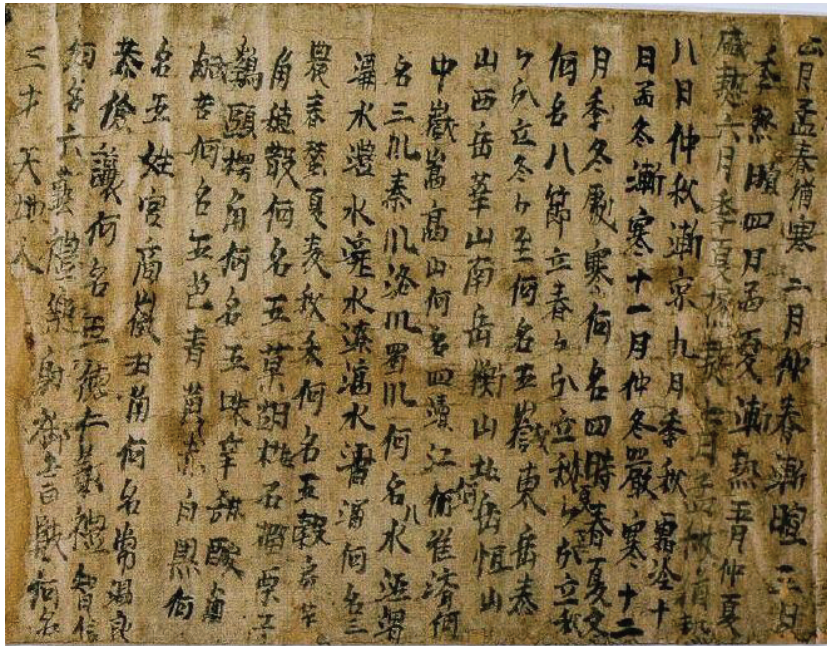


圖 2 羽 663R

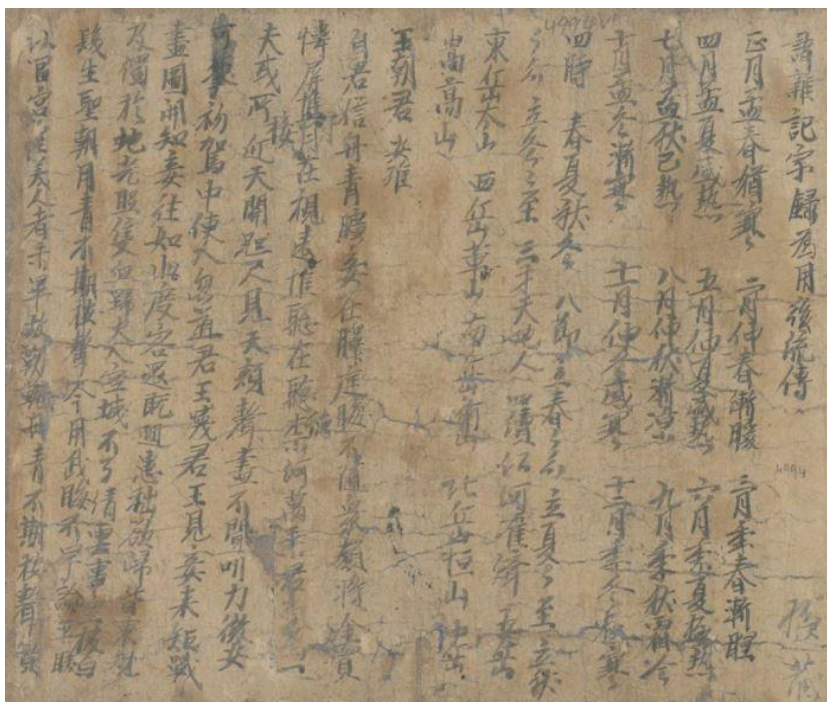


圖 3 P. 4994V

小結

『正月孟春猶寒』は9世紀に作成された最も簡易な書儀である。既存の敦煌書儀から見ると、『正月孟春猶寒』の内容は、張敖の『新集吉凶書儀』の時令文に類似しているものの、書寫年代が『張書』より遅いため、『張書』に基づいた可能性が指摘できる。書儀は、學郎の教育に役立つ。『正月孟春猶寒』の内容は十二カ月の時令文であり、手紙を書くことや、言葉遣い、挨拶用語の學習、延いては行政文書や文章の執筆に役立つ。P. 2738V、P. 3705Vからは、學郎は『正月孟春猶寒』、『上大夫』、『千字文』、『雜字』、社司轉帖、數字、姓名等の習字、識字學習の内容が一緒に書かれているため、それらがほぼ同水準の教材であると言える。『正月孟春猶寒』は習字用のものではなく、社司轉帖と同じように、実用的なものである。學郎は識字と同時に、季節や氣候等知識を身につけるのであり、P. 2633、羽 663R、P. 4994Vからは、『正月孟春猶寒』と『雜抄』の「四時八節」「論三川、八水、五岳、四瀆」等の内容が結びついており、日常の知識を學ぶ簡単な教材を構成したものとなっている。

第五章 『敦煌姓氏雜録』

姓名の勉強は啓蒙教育の中でも必要不可欠なもの1つである。漢代の『急就篇』でも開編は姓名に始まるのはそれを表していると言えよう。宋代には『百家姓』を『千字文』、『三字經』と合わせて「三百千」と稱されようになり、後の時代にまで代々受け継がれている。このような姓氏の教材は実に9、10世紀に見られており、敦煌文獻に残されている。これらの敦煌寫本の中の姓氏は往々にして「張王李趙」を編首とし、他の各種の雜書と併記されていて、あまり目立たない。そのため十分に學界の關心を得られず、わずか數本のみが取り上げられ、『殘姓氏書』、『姓氏書』あるいは『敦煌姓氏等習字雜寫』とされる。筆者はこのような寫本を『敦煌姓氏雜録』と稱する¹。全ての寫本は合計152の姓が残り、多くのは敦煌地區の漢族と胡族の大姓、敦煌地區學郎が姓名を學ぶ際の重要な蒙書と見なすことができる。

一部の寫本については、先行研究によって既に言及されている。王仲榮「敦煌石室出殘姓氏書五種考釋」では、P. 2995の内容に関して、中原の姓氏もあり、西域の姓氏もあるとした²。陳祚龍「中古敦煌的書學」もP. 2995を校録した³。汪泛舟「敦煌的童蒙讀物」はP. 2995とP. 3070Vについて紹介し⁴、郝春文主編『英藏敦煌社會歷史文獻釋録』はS. 865VとS. 1392を校録した⁵。以上の研究は、整理、校正及び簡単な説明に留まり、具體的な検討は見られなかった。張涌泉主編『敦煌經部文獻合集』は、『百家姓』と照合し、『敦煌百家姓』と名づけた上でこれらは張氏歸義軍支配時に生まれた可能性があるとし、16件の寫本に對して校録を行った⁶。海野洋平「敦煌童蒙教材『牛羊千口』史料輯覽」では、P. 3145に對して校録と簡単な検討が行われた⁷。先行研究は校録に集中するもので、識字の角度から検討されることはほぼなく、寫本に對する具體的な分析も不足している。筆者はこれらの先行研究を踏まえ、『敦煌姓氏雜録』の18件の内容からその編纂方式、創作年代を分析し、またこれらの寫本によって表現される當時の敦煌の姓氏郡望を検討したい。また、識字教育の視點から『敦煌姓氏雜録』の用途、學習方法、社司轉帖の關係について分析し、敦煌文獻の中での姓名の學習に關する寫本を収集し、當時の學郎の姓名の學び方や學習目的を知ることを試みたい。

¹ 鄭阿財の指摘を参考に『敦煌姓氏雜録』と稱する。

² 王仲榮「敦煌石室出殘姓氏書五種考釋」、北京大學中國中古史研究中心編『敦煌吐魯番文獻研究論集』第三輯、北京大學出版社、1986年、18頁。王仲榮『崑崙山館叢稿』、中華書局、1987年、460頁。

³ 陳祚龍「中古敦煌的書學」、『敦煌資料考屑』、臺灣商務印書館、1987年、174-176頁。

⁴ 汪泛舟「敦煌的童蒙讀物」、『文史知識』1988年第8期、105頁。汪泛舟編著『敦煌古代兒童課本』、甘肅人民出版社、2000年、5頁。

⁵ 郝春文、金澄坤編著『英藏敦煌社會歷史文獻釋録』（第四卷）、社會科學文獻出版社、2006年、377頁。

郝春文、趙貞編著『英藏敦煌社會歷史文獻釋録』（第六卷）、社會科學文獻出版社、2009年、57頁。

⁶ 張涌泉主編『敦煌經部文獻合集』第八冊『小學類字書之屬』、中華書局、2008年、4006-4018頁。

⁷ 海野洋平「敦煌童蒙教材「牛羊千口」史料輯覽」、『一關工業高等專門學校研究紀要』第46號、2011年、27-28頁。

一 『敦煌姓氏雜録』の内容

『敦煌姓氏雜録』はこれまで 18 件の寫本が発見されている。P. 3369V、S. 1392、P. 3070V、BD5673V、P. 2331V、P. 3692V、S. 4504V、P. 3197V、P. 4525 (16) V、P. 3145V、S. 4106V、P. 2995、P. 3558V、S. 865V、S. 4443V、S. 5104、BD3955V、羽 29V である。その中の 15 件に「張王李趙」が見られ、13 件が「張王李趙」を冒頭句としている。

ほとんどの寫本は最初の 22 字だけが同じなのであり、『敦煌經部文獻合集』は「張王李趙。陰薛唐鄧、令狐正等。安康石平、羅白米史。曹何。」と校録している。この後の内容は同じではなく、また句讀もできない。當時 4 字を 1 句とするのが一般的であった。例えば、最も流行していた『千字文』や『開蒙要訓』では、「張王李趙。陰薛唐鄧、令狐正等」という句讀となっており、4 字ずつであることに問題がない。しかし、「安康石平、羅白米史」という句は明らかに押韻せず、また「曹何」の後ろにある内容は連携していないことから、前の内容「白米史」とつながっていることになる。そのため、筆者は「安康石平羅、白米史曹何」と句讀しているのだが、次に、比較的完全な寫本 P. 2995 を例にして、平仄、押韻の分析を行う。

張王李趙、天下不少。(「趙」「少」が上聲小韻)

陰薛唐鄧、令狐正等。(「鄧」が去聲嶝韻、「等」が上聲海韻)

安康石平羅¹、白米史曹何。(「羅」「何」が平聲歌韻)

前 4 句はいずれも仄聲韻となり、4 字 1 句の韻語を構成している。特に「張王李趙」は、陰平、陽平、上、去の 4 聲調となり、読みやすい。前 4 句は敦煌の漢族の大姓を並べている。「安康石平羅、白米史曹何」を見ると、「羅」と「何」も同じ韻であり、いずれも平聲であり、読みやすい。2 つの言葉の中には、西域の胡姓と漢姓が羅列されている。その中には「平」という姓があるが、ある寫本では「吉」になっている。この 2 姓は漢姓であるが、ここでは胡姓の可能性が大きい。

まず、「張王李趙」を検討する。後漢の『風俗通義』によると、「張王李趙、皆黃帝之後也」とある²。後漢・張奐の『誠兄子書』には、「不自克責、反云張甲謗我、李乙怨我、我無是過、爾亦已矣」とある³。「張王李趙」という言葉は早くから確認され、「張甲」「李乙」という人を代稱する語が流行していたことが分かる。『梁書・範縝傳』には、「苟無本於我形、而可遍寄於異地、亦可張甲之情、寄王乙之軀、李丙之性、托趙丁之體」とある⁴。今よく使われている「張三李四」と似ている。唐・寒山子の詩による「張王李趙權時姓、六道三途事似麻」と

¹ 「平」、ある寫本に「吉」と書かれている。

² (漢) 應劭『風俗通義』、(宋) 劭思『姓解』卷二、王雲五主編『叢書集成初編』、上海商務印書館、1935 年、55 頁。(漢) 應劭撰、王利器校注『風俗通義校注』「佚文」卷「姓氏」:「張王李趙、黃帝賜姓也」、中華書局、1981 年、496 頁。

³ (漢) 張奐『誠兄子書』、(唐) 歐陽詢撰『藝文類聚』卷二三「鑒誠」、上海古籍出版社、1965 年、422 頁。

⁴ 『梁書』卷四八、中華書局、1973 年、668 頁。

ある¹。漢代から唐代にかけて、「張王李趙」は既に流布していたが、敦煌もその例外ではなかったのである。

『敦煌姓氏雜録』が書かれた寫本の時代を見ると、一番早いのはP. 3369V、乾符三年(876)であり、最も遅いのはS. 4443V、10世紀後期であることから、その時代はちょうど歸義軍の統治時代にあたる。また「張王李趙」から冒頭で書かれていた寫本の作成年代は、張氏が歸義軍を立てた後であると推測する。張議潮がチベット統治を覆した後、地元の民衆に民族の歸屬感を求めて、張氏の功勞に対する宣傳効果も期待できるので、「張王李趙」という流行の俗語を『敦煌姓氏雜録』に置かれたと考えられる。

「張王李」の三姓は、沙州の最盛の望族である。張氏は敦煌の首望と呼ばれ、張議潮が歸義軍を建てた後、聲望は最盛期に達した。王氏というのは太原王氏と呼ばれ、有名な人物として河西都統王和尚が擧げられる。李氏というのは隴西李氏と呼ばれた。李明振は張議潮の婿である。張承奉の統治時期、李明振の息子李弘願、李弘定、李弘諫は實際の歸義軍政權を握っていた。「張王李」三姓の人数が最も多い。土肥義和「8世紀末—11世紀初頭燉煌近在氏族人名姓別數一覽」によると、敦煌文獻には張姓が2789人、王姓が1232人、李姓が1078人で、上位3位となっている。「張王李」について、その敦煌文獻に表れた數が「張王李」の社會的地位と一致している。趙氏は「張王李」の地位や名望より顯著ではないが、それも望族に違いない。

「陰薛唐鄧」、「令狐」という5姓は、沙州地域でも大姓であり、有名な人物を輩出した。P. 2625『敦煌名族志』には陰氏の志が残され、「隋唐已來、尤為望族」とある。S. 2052『新集天下姓望氏族譜』によれば、「涼州武威郡出六姓、索、石、賈、安、廖、陰」とある。陰氏が第6位にある。姜伯勤氏によると「敦煌陰氏は、張氏歸義軍の擁立を支持するだけではなく、曹氏歸義軍の擁立をも支持した」とされる²。敦煌薛氏について、姜氏は「亦不乏毫宗」と指摘している³。唐氏については、悟眞は869年から895年に都僧統を務めた。敦煌文獻にある唐氏の最高位の人物である。鄧氏は、歸義軍の時期に索氏、曹氏と結婚したこたがある。また、莫高窟第390窟は鄧氏の家窟である。令狐氏は太原令狐氏と呼ばれていた。姜氏はP. 4660「前河西節度都押衙兼馬歩都知兵馬使銀青光祿大夫檢校太子賓客監察御史右威衛將軍令狐公邈眞讚」と五代の第258窟の供養者識語「亡父衙前正兵馬使銀青光祿試殿中監令狐進義」を引用して、「令狐氏任兵馬使一職者頗有其人」と指摘している⁴。そのため、令狐氏はずっと歸義軍で軍業を務め、強い勢力を持っていたと考えられる。

『敦煌姓氏雜録』は、編纂時にわざわざ西域の各民族、特に「昭武九姓胡」を取り入れ、敦煌地域の獨特な民族の特徴を呈している。『新唐書・西域傳』には、「枝庶分王、曰安、曰曹、曰石、曰米、何、曰火尋、曰戊地、曰史、世謂『九姓』、皆氏昭武」とある⁵。「安康石平

¹ 項楚『寒山詩注』、中華書局、2000年、527頁。

² 姜伯勤「敦煌邈眞讚與敦煌名族」、饒宗頤主編『敦煌邈眞讚校録并研究』、新文豐出版公司、1994年、22頁。

³ 姜伯勤「敦煌邈眞讚與敦煌名族」、饒宗頤主編『敦煌邈眞讚校録并研究』、46頁。

⁴ 姜伯勤「敦煌邈眞讚與敦煌名族」、饒宗頤主編『敦煌邈眞讚校録并研究』、30頁。

⁵ 『新唐書』卷二二一『西域傳下』、中華書局、1975年、6243頁。

羅、白米史曹何」のうち、安、康、石、米、史、曹、何の7つの姓は「昭武九姓」に属している。

土肥義和「8世紀末—11世紀初頭燉煌近在氏族人名姓別數一覽」の纏めによると、敦煌文獻に登場する安氏の人數は約723（第7位）、曹氏は約619（第8位）¹、康氏は約389（第12位）、石氏約311（19位）、羅氏約203（27位）、何氏は約179（30位）、史氏は約152（32位）、白氏は約85（43位）、米氏は約103（38位）となっている。この表によれば、「安康石平羅、白米史曹何」の九姓（平、吉を除く）の總人數は、「8世紀末—11世紀初頭燉煌近在氏族人名姓別數一覽」の14%を占めた。敦煌文獻に見られた人口數を見てみると、確かにこれらの姓の人數が多く、多數は從化郷に住んでいた²。張廣達の研究によれば、「敦煌は昭武九姓が集まった重要な場所の1つである。750年以降、沙州がチベットに占領された前、大部分の昭武九姓は城東一里の從化郷に住んでいた。從化郷は沙州十三郷の1つであり、また少數の昭武九姓が他の郷に住んでいた。……ここに昭武九姓は約300戸、人口は約千四、五百という」とある³。多くの學者が、P.2657+P.2803+P.3018+P.3559「天寶十載（751）敦煌縣差科簿」を利用し、唐前期敦煌のソグドを研究している。P.3559に從化郷の居民の記載により、康（48人）、安（39）、石（31）、曹（30）、羅（23）、何（20）、米（10）、賀（7）、史（6）、裴（4）、辛（3）、唐（2）、張（2）、李（2）、王（2）、郭（1）、雷（1）、範（1）、黃（1）、翟（1）、索（1）、夫蒙（1）、22姓ある⁴。その中で康、安、石、曹、羅、羅、何、米、史等の8姓は從化郷での人數の上位にあるが、この8姓は「安康石平羅、白米史曹何」にある。「安康石平羅、白米史曹何」は、敦煌人が境内の西域胡族の大姓を俗語として使われていたと推測できる。

「張王李趙、陰薛唐鄧、令狐正等。安康石平羅、白米史曹何」という俗語は、基本的に敦煌の漢族と西域胡族の大姓であり、歸義軍の中で活躍し、高い政治・社會・經濟的地位を有していた。この19の姓を除いて、『敦煌姓氏雜錄』は濟北氾氏、太原閻氏、廣平宋氏、潯陽翟氏、京兆杜氏、扶風馬氏、敦煌吳氏、武昌程氏、豫章劉氏、安定梁氏、敦煌渾氏等大姓もある⁵。王仲榮はP.2995に對して、「中原腹地の姓名も少なくないが、さらに隴西の李、牛、彭、辛、聞等、西平の麴姓、武威の賈、陰諸姓、敦煌の氾、索、曹諸姓、焉耆の龍姓、龜茲の白姓、鄯善の鄯姓、吐火羅の羅姓、昭武諸國の康、米、安、石等が紹介された」と述べる⁶。『敦煌姓氏雜錄』は、沙州地區の大姓が並ぶようにしてある。宋代の『百家姓』に單姓は408點、複姓は30點、全438姓がある。『敦煌姓氏雜錄』に姓氏は152點あり、『百家姓』の三分の一を占めている。沙州地域の姓氏が全ては含まれていないであろう。また『敦煌姓氏雜錄』は、土肥義和「8世紀末—11世紀初頭燉煌近在氏族人名姓別數一覽」に纏められて

¹ 土肥義和は敦煌の曹氏が胡人であると主張しているという。

² 池田温「8世紀中葉における敦煌のソグド人聚落」、『ユーラシア文化研究I』、1965年、49-92頁。

³ 張廣達「唐代六胡州等地的昭武九姓」、『北京大學學報（哲學社會科學版）』1986年第2期、79頁。

⁴ 馮培紅「漢宋間敦煌家族史研究回顧與述評（上）」、『敦煌學輯刊』2008年第3期、44頁。

⁵ 姜伯勤「敦煌遼真讚與敦煌名族」、饒宗頤主編『敦煌遼真讚校録并研究』、25-47頁。

⁶ 王仲榮「敦煌石室出殘姓氏書五種考釋」、北京大學中國中古史研究中心編『敦煌吐魯番文獻研究論集』第3輯、19頁。王仲榮『崑崙山館叢稿』、460頁。

いる敦煌文献に登場した姓氏（385 点）の 4 割を占めている。敦煌莫高窟の中に多くの供養者の識語が残されているが、これらの供養者はその時に一定の財力、地位によって、供養活動を行うことができる。『敦煌莫高窟供養人題記』によると、約 70 点の姓氏が残されている。ほとんどの姓氏が『敦煌姓氏雑録』の中に見られ、その半分近くを占めている。そのため、『敦煌姓氏雑録』の姓氏はほぼ沙州地区の大姓であり、その性格は沙州の郡望書に類似していると推測できる。

つまり、『敦煌姓氏雑録』の冒頭と寫本流行の時代から、その編纂時代は張議潮がチベット統治を覆し、歸義軍を立てた後と推測される。「張王李趙、陰薛唐鄧、令狐正等。安康石平羅、白米史曹何」は俗語であると考えられる。P. 3070V について、陸慶夫は「昭武九姓と漢人の大姓が同時に敦煌蒙童の習字書に登場したことから、ソグドの姓氏は地元の漢人大姓と同じく、敦煌地方の重要な姓氏とされている」と述べた¹。しかし、寫本の中では、冒頭の「張王李趙、陰薛唐鄧、令狐正等。安康石平羅、白米史曹何」以外、書かれている内容がまちまちである。

二 『敦煌姓氏雑録』の用途

『敦煌姓氏雑録』は姓名の啓蒙書である。実際の寫本内容、書寫者の身分、書寫時代、字體状況、寫本中他の内容を分析する必要があるため、以下 18 件の『敦煌姓氏雑録』の書寫年代で順番を並べる。

寫本 番號	書寫者	書寫 年代	字體 狀況	寫本の中に字體が 類似の内容
P. 3369V	學生 索什德	乾符三年（876）	稚拙	姓名、『上大夫』、社司轉帖
S. 1392		庚子年（880 或いは 940）	稚拙	
P. 3070V		乾寧三年（897）	稚拙	社司轉帖、行人轉帖、『諸星母陀羅尼經』
BD5673V		乾寧三年（897）	稚拙	社司轉帖、九九歌鈔
P. 2331V		戊午年（898 或いは 958）	稚拙	社文、願文、舍施文、『五臺山贊文』 供養人識語、『十大弟子文』
P. 3692V		龍德二年（922）	稚拙	『千字文』、五言詩、社司轉帖
S. 4504V		清泰二年（935）	稚拙	『十願歌』、『讚大聖眞容七言詩』、 敦煌の寺名と郷名、菩薩の名、行人轉帖、契約、『千字文』

¹ 陸慶夫「唐宋間敦煌粟特人之漢化」、鄭炳林主編『敦煌歸義軍史專題研究』、蘭州大學出版社、1997 年、366 頁。

P. 3197V		乾德四年 (966)	稚拙	『新撰時務纂集珠玉要略抄一卷』、 習字「南無」
P. 4525V		太平興國八年 (983)	優秀	佛經の習字、數字
P. 3145V		端拱元年 (988)	良好	社司轉帖(寫本の正面)、『上大夫』、 『牛羊千口』、『上士由山水』、官職、 姓名、敦煌の郷名
S. 4106V		10 世紀中後期	稚拙	『門來善遠』、『上士由山水』、『上大 夫』、『牛羊千口』、數字、姓名
P. 2995	沙彌		良好	七言詩
P. 3558V			稚拙	社司轉帖
S. 865V			稚拙	社司轉帖
S. 4443V	乾元寺 宋苟兒	10 世紀後期	良好	僧官、職官、姓名、「妙法華蓮經觀 世音菩薩」、『地藏菩薩經十齋日』
S. 5104			稚拙	社司轉帖、佛名
BD3955V			稚拙	『上大夫』、敦煌の寺名
羽 29V	學郎 梁		良好	『郎君須立身』、『百行章』、曲子

18 件の寫本のうち、2 件だけが學郎や學生に書寫されたと確認できたが、13 件の寫本は字體が稚拙である。また、『上大夫』、『千字文』、社司轉帖、數字、詩歌等と一緒に書かれていることから、書寫者は學郎と推測できる。そして、基礎的な識字と習字の教材である『上大夫』、『上士由山水』および『千字文』等が書寫されていることが分かる。そのため、『敦煌姓氏雜錄』も基礎的な識字材料と考えられる。字體が稚拙であるため、勉強を始めたばかりの時に書かれたと考えられる。P. 2331V、P. 2995、P. 3145V、P. 3070V、P. 3558V の寫本のうち、「汜」「范」「樊」同音の字を一緒に勉強するように心掛けたと見られる。

『敦煌姓氏雜錄』から學び始めたのは、実用性が高いからである。顏師古は『急就篇注敘』に「篇首廣陳諸姓及名字、以示學徒、令其識習、擬施用也」と述べている¹。數點の敦煌寫本に、『敦煌姓氏雜錄』中の姓氏を用いて、その姓に名を加えて書寫する方法が見られている。

P. 4017 (圖 1) は、89 行が残され、『口分地出賣契』、「恐人無信、故立此契為後憑」、『雜字一本』、「乙酉年七月廿一日徐僧政」、「乙酉年七月廿三日安郎君」、「乙酉年七月廿三日立契」、社司轉帖 (6 編)、『詠九九詩一首』、『曲子長相思』、『曲子鵲踏枝』、『太子讚一本』が連続して書かれており、最後の頁が雜寫となっている。その中に『雜字一本』と社司轉帖 (5 編) は同じ人によって書かれているのであろう。「乙酉年」により、土肥義和は 985 年と推測した。『雜字一本』の内容は 6 行が残され、字體が稚拙である。内容を繋げて見ると、「張

¹ (漢) 史游著、曾仲珊校點『急就篇』卷一、岳麓書社、1989 年、35 頁。

醜子」「王瘦斤、李頹兒、趙搗搗、陰物堆、薛國成、康南山、石勝定」となる¹。このことから、完全に『敦煌姓氏雜録』の順序によって書かれていることが分かる。また重複の字が使われていないである。

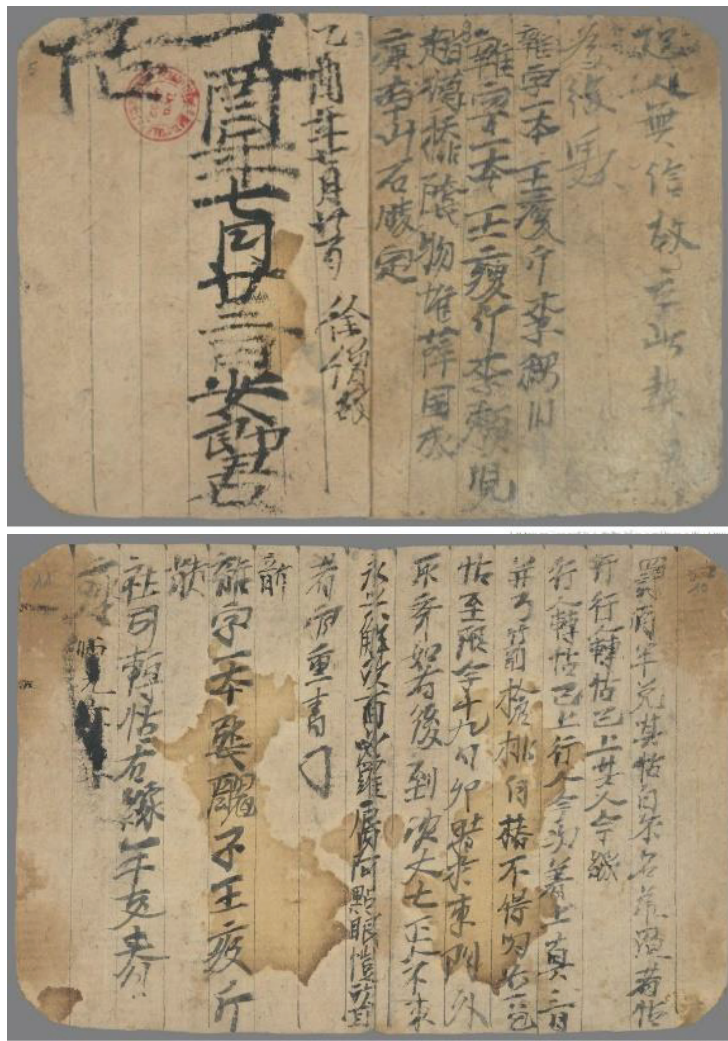


圖1 P. 4017 (部分)

P. 3211 は、正面が『王梵志詩』卷第二である。背面には「千字文一卷」、識語「乾寧三年歲丙辰二月十九日學士郎汜賢信書記之也」、及び雜寫が書かれている。この寫本にも12件の殘片が含まれている。その中の3件に姓名が書かれてあることから、3件は1つの寫本から分裂したと推測する。P. 3211p7 (圖2) は1行を残し、題目は『人名目一本』であり、内容は「張富郎、王保子」である。P. 3211p8 (圖3) は、1行を残し、内容は「李賢集、趙再盈」である。P. 3211p9 (圖4) は、3行を残し、第1行は「田子、鄧留延、令狐王子」であり、第2行は「子、康保子」を残し、第3行は「白磨子」を残す。以上の姓名は、「子」を

¹ 張涌泉主編『敦煌經部文獻合集』(第八冊)「雜字一本」、4272頁。

除いて重複の字がなく、『敦煌姓氏雜録』の順序に姓氏を書き出している。

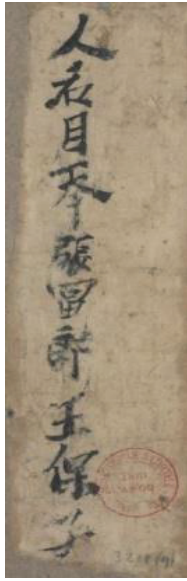


圖 2 P. 3211P7



圖 3 P. 3211P8



圖 4 P. 3211P9

P. 3894 は、正面が『太公家教』である。背面には『光化四年正月都僧録帖』、「轉經帖」、姓名、雜寫が書かれている。この寫本にも 5 件の残片が含まれている。P. 3894p1 (圖 5) は、10 行を残し、字體もやや稚拙である。またその内容は、「馬義□、良佛□(如)、齊義□、遊通信、吳像子、方義子、汜政子、趙閏子、田壹翔、高文昌」であり、姓氏の順序は「馬良齊游吳方汜趙田高」によって書かれている。P. 3894p2 (圖 6) は、11 行が残され、字體がやや稚拙である。その内容は「張賢君、王辛通、李君子、趙文賢、安文德、康像通、石像如、平信子、羅安□(信)、白如□」であり、姓氏は「張王李趙、安康石平羅、白」の順序に書かれている。P. 3894P2 は、明らかに『敦煌姓氏雜録』によって練習している。目的としては識字及び姓名を勉強することにあると考えられる。「賢君」「君子」「文賢」「文德」「信子」「安信」「義□」「義子」「文昌」という姓名が選ばれたのは、特別な意味がある。學郎の品性を高めるように勉強していく意識があったと推測する。

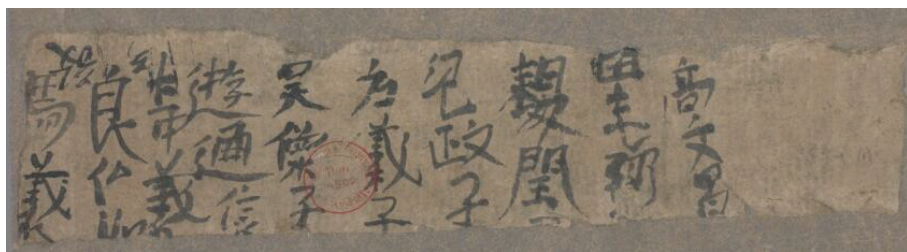


圖 5 P. 3894p1

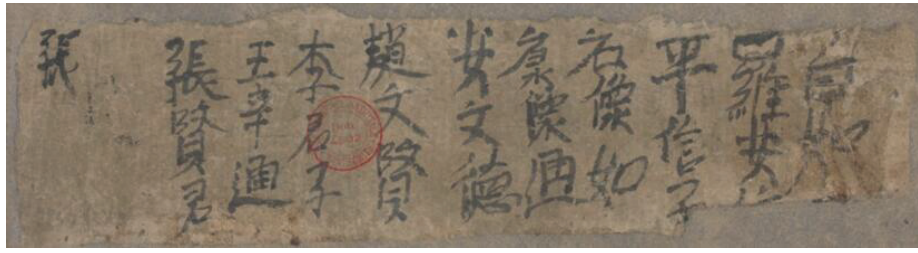


圖 6 P. 3894p2

實は、『急就篇』では、姓氏と名を結びつけて勉強することがある。開編に「宋延年、鄭子方、衛益壽、史步昌、周千秋、趙孺卿」等が書かれている。「宋延年」というのは、顔師古は「微子、紂之庶兄。周武王克商、封之于宋、其後或以國為姓、遂有宋氏。延年之義、取于壽考無疆也。漢有李延年、杜延年、田延年」と解説した。「鄭子方」について、顔師古は「鄭桓公友、周厲王之子、宣王母弟也。宣王封之于鄭、其後或以國為氏。…子者、男子美稱。方者、言其正直不回也」と解釋している¹。「宋延年」と「鄭子方」は歴史上の人物ではなく、作者史遊の創作であることが分かる。「宋」は姓氏で、微子の息子が宋に封入され、後人は國の姓を自分の姓としていた。「延年」は長壽の意味である。宋氏の出所や歴史知識を學んだだけではなく、「延年」という良い言葉を學ぶことになり、良い名を付けるための見本でもある。また、顔師古は「漢有李延年、杜延年、田延年」を挙げ、歴史上の人物を知ることでもできる。「鄭子方」やその後ろの姓名には、全てこのような形式となっている。『敦煌姓氏雜録』が姓名を結びつけて勉強する方法は『急就篇』を引き継いだものであると考えられる。

三 『敦煌姓氏雜録』と社司轉帖

敦煌地區では社邑が非常に流行していた。社司轉帖は社邑の基礎的な日用文書として用いられていた。敦煌文獻には、實用的な社司轉帖と非實用的な社司轉帖が多數保存されている。多くの非實用的な社司轉帖は、學郎によって書かれたものである。社司轉帖は一般的に2つの部分に分けられ、前半部分では具體的な内容が書かれており、緣由、時間、場所、持參するものや不参加者に對する罰則を説明する。後半の一部は回覽用の、社の構成員の姓名が書かれている。社司轉帖を書くのは、識字や社司轉帖の書き方を勉強するためである。また、社司轉帖を書きながらその中の姓名の部分も勉強することができる。さらに『敦煌姓氏雜録』と結びつけると、學習の効率を向上させることになる。

P. 3145、正面（圖 7）は非實用的な社司轉帖であり、17行を残し、識語に「戊子年潤五月録事張」とある。背面に20行を残し、『上大夫』、『牛羊千口』、『上土由山水』、官職、姓名、敦煌の郷名、『敦煌姓氏雜録』が連続して書かれている。正面の社司轉帖の姓名は、計6行、21点である。字體から判断するに、正面の社司轉帖と背面の『敦煌姓氏雜録』を書いたのは同一人である。以下は姓名を校録する。

¹ (漢) 史遊著、曾仲珊校點『急就篇』卷一、35-37頁。

景慶進、梁繼紹、胡醜撻、竇不藉奴、蘇富寧、黑骨兒、程祐住、穆再温、彭章午、
 麴山多、屈幸全、郝端兒、鄧流潤、祝懷義、就願受、崔馬兒、橋（喬）兵馬使、申衍悉
 鷄、傅粉塢、候遂子、任昌進¹

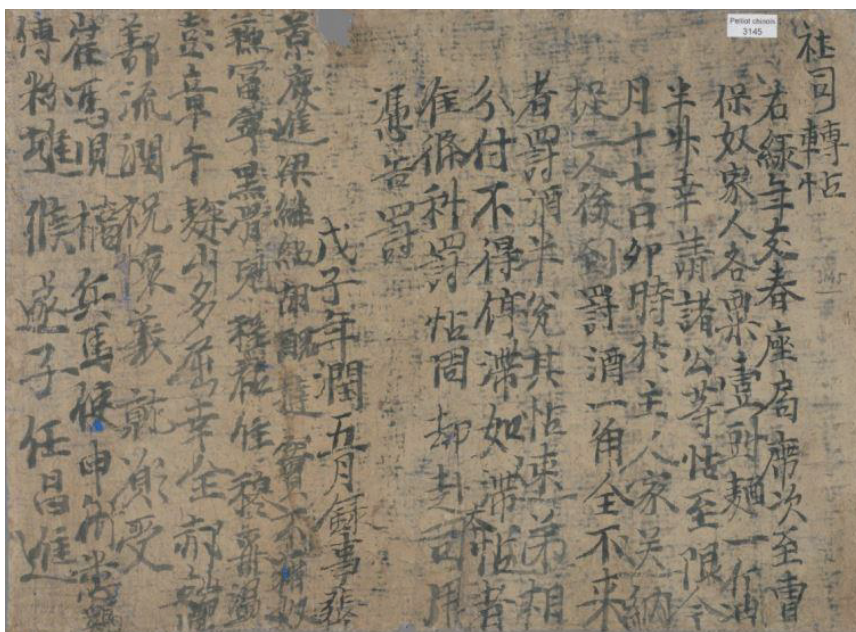


圖7 P. 3145

姓氏「景」から「任」まで、その背面に書かれた『敦煌姓氏雜錄』の順序と基本的に同じであり、重複はない。書寫者は、『敦煌姓氏雜錄』の中の姓氏に、日常生活で使用している名をつけて、社司轉帖の姓名を作ったと言える。

S. 2894 は、正面は『四分戒本含注一卷』である。背面は『千字文』、壬申年の社司轉帖 6 編、『社邑名簿』、「孝經一卷并序」、「壬申年正月一日淨土寺南院學士郎安教信、安長子到官樓蘭諾道長坐轉經、僧曹願長、柔（齋）來者」、「開寶悟（五）年癸酉正月廿日淨土寺學士郎辛延晟、曹願長二人等同心一會、更不番悔、記願長、記」等が連続して書かれている。「開寶悟（五）年」（972）は壬申年であり、「癸酉」は次の年である。寫本の書寫年代が概ねこの2年間であると推測できる。そして、「五」を誤って「悟」と書いたこと、また書體がやや稚拙であることから、書寫者の習字經驗がまだ浅いことと、淨土寺の學士郎安教信、曹願長、安長子、辛延晟の中の1人であると推測できる。

寫本の中央の『社邑の名簿』（圖8）には、「張王李趙、陰薛唐鄧、安康石吉羅、曹白米史…」の順に従って姓名が書かれており、計15行、79點が確認される。以下に姓名の校録をする。

¹ 海野洋平「敦煌童蒙教材「牛羊千口」史料輯覽」、『一關工業高等專門學校研究紀要』第46號、2011年、27頁。

張富德、王清兒、李万定、趙沒利、陰彥弘、薛什子、唐慶住、鄧福勝、安員吉、康幸深、石海全、吉崑崗、羅瘦兒、曹達怛、白搗搗、米不勿、史幸豐、唐文通、宋苟奴、邦醜撻、泊知客、辛懷恩、孫昌晟、令狐万端、鄭夔禍、程滿福、劉建昌、郭幸司、高慙灰、陽繼受、汜再昌、樊賢者、范丑奴、菜魄莘、董胡八、賀吉昌、索善通、翟大眼、尹酉子、孔阿朵、閻員保、鬪碑魁、左山榮、馮阿察、馬良興、桑阿率、陳喜昌、温員遂、雒咄拙、就彥深、雙佛德、傅奴子、星粉堆、沈尚慙、竇討擊、善姜住、達麴麵、史大頭、盧漸勝、彭悉矧、譚什德、韓通達、郝延、郝安定、蘇丑兒、解儒晟、吳頹奴、呂端絕、武明藤、柳敏頭、姚延郎、嬌病温、姜午子、姜黑頭、雷灰子、黑住奴、仍歸盈、燒不勿、周押衙、城將頭、麴像子。

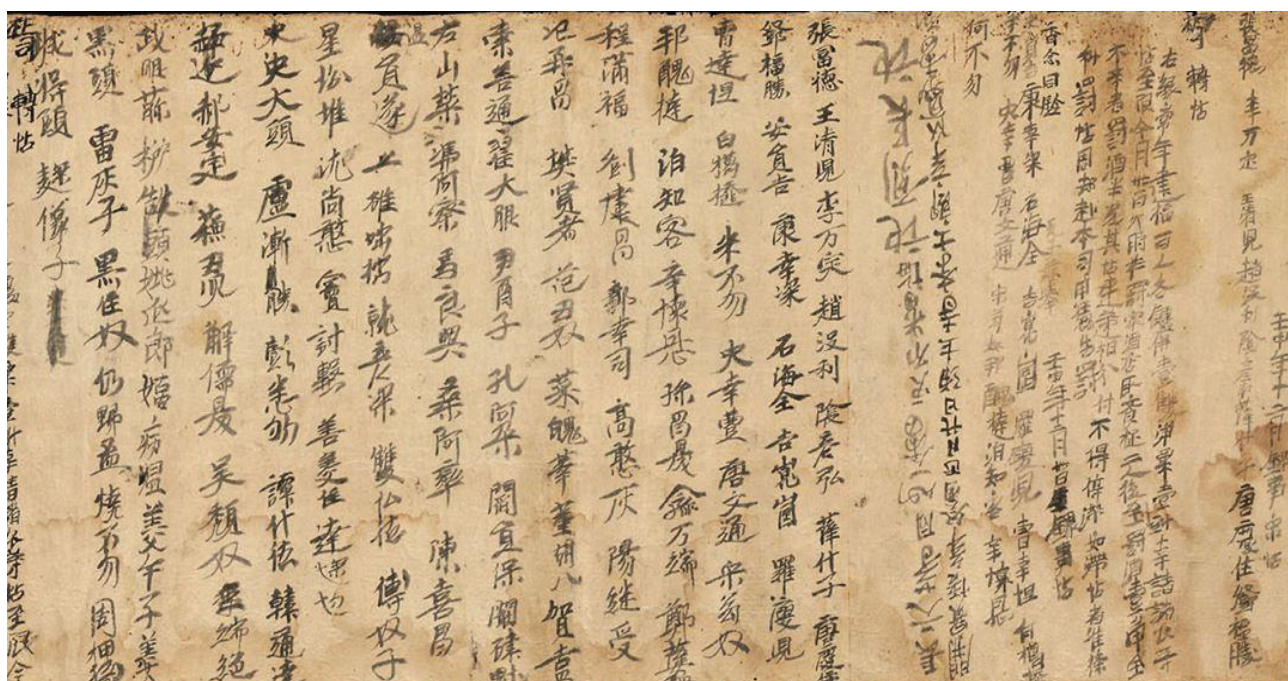


圖 8 S. 2894V (部分)

79 點の姓名に、重複は少ない。漢人の姓名だけではなく、胡人の姓名の特徴を備える曹達怛、米不勿、桑阿率、雒咄拙、彭悉矧、燒不勿等も見られている。これらの姓名の前に書かれた2つの社司轉帖（圖8の右側）は、注目すべきものである。その第1件目の内容は、「張昌德、李万定、王清兒、趙沒利、陰彥弘、薛什子、唐慶住、鄧福勝」であり、第2件目の内容は「史員吉、康幸深、石海全、吉崑崗、羅瘦兒、曹達怛、白搗搗、米不勿、史幸曹、唐文通、宋苟奴、邦醜撻、泊知客、辛懷恩」である。この2つの社司轉帖の姓名は合せて22点であり、『社邑名簿』と照らしながら書き写していたと推定する。この學郎は「富」を誤って「昌」、「安」を誤って「史」、「豐」を誤って「曹」と書いているが、それらの字をよく知らないため、誤書したのであろう。

P. 3145 と S. 2894 により、『敦煌姓氏雜錄』と社司轉帖を組み合わせて學んだことが分か

る。

社司轉帖には、『敦煌姓氏雜錄』が日常生活に影響を与えるものであることが見て取れる。S. 5139V は、『涼州節院使押衙劉少晏狀（抄）』、『千字文』、親情社の轉帖等が、報恩寺の沙彌善住によって書かれており、その字體はやや稚拙である。その中で、親情社の轉帖の姓名は、「知客張郎文德、張郎、王郎、李郎、楊郎、翟郎、康郎」と書かれており、書寫者が「張王李趙」の影響を受けて、「張王李」の順に従って「張郎、王郎、李郎」を書いたものと考えられる。

四 他の姓名寫本について

敦煌文獻には、姓名、官職、僧名、僧官等を續けて書いた寫本が存在している。これらの用途については、先學はあまり言及していない。學郎は官吏になるため、官職、僧官等の名稱を學習していたのだろう。

S. 395 は、正面は『孔子項托相問書』であり、背面は雜寫である。背面の『人名一本』に、「周盈通、張□□、□□進、王昌德、王繼昌」と書かれている¹。「盈通」、「昌德」、「繼昌」等は幸せな生活への憧れが含意されており、當時の良い名前だったのであろう。

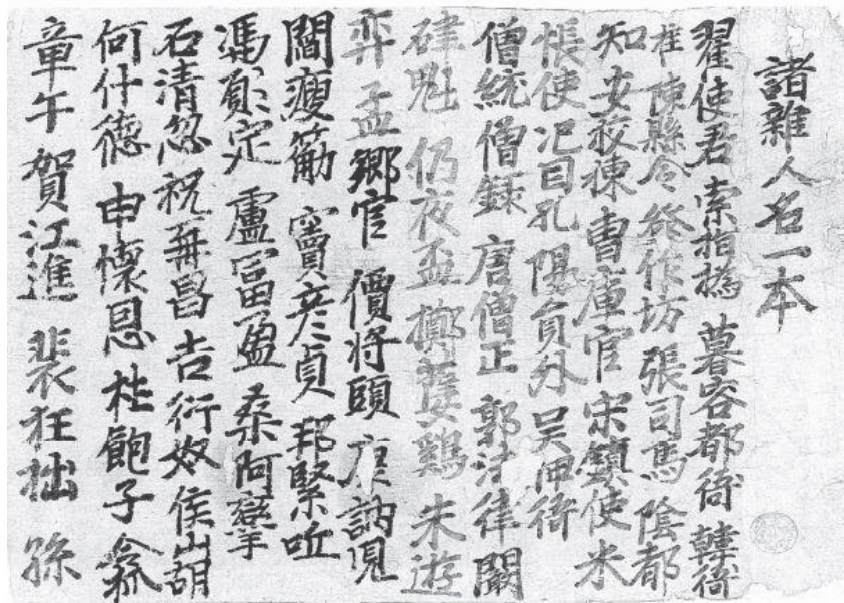


圖9 S. 1153

S. 1153（圖9）は、13行を残し、『諸雜人名一本』と首題、姓氏、官職、僧官、姓名等が續けて書かれている。郝春文、金澄坤編著『英藏敦煌社會歷史文獻釋録』（第五卷）によれば、この寫本は學郎が人名を練習するために書いたものである²。以下に寫本の校録をする。

¹ 郝春文編著『英藏敦煌社會歷史文獻釋録』（第二卷）、社會科學文獻出版社、2003年、285頁。方廣錫、（英）吳芳思主編『英國國家圖書館藏敦煌遺書』第六冊「條記目錄」、廣西師範大學出版社、2011年、15頁。

² 郝春文、金澄坤編著『英藏敦煌社會歷史文獻釋録』（第五卷）、146頁。

翟使君¹、索指搗、暮（慕）容都衙、韓衙推、陳縣令、鄧作坊、張司馬、陰都知、安校揀（練）²、曹庫官、宋鎮使、米帳使³、汜目孔（孔目）、陽員外、吳押衙、僧統、僧録、唐僧正、郭法律、鬪碑魁、仍夜盃、擲（鄭）夔鷄、朱游弈、孟鄉官、價（賈）將頭、康訥兒、閻瘦筋、竇彥貞、邦緊吐、馮願定、盧富盈、桑阿攀、石清忽、祝再昌、吉衍奴、侯山胡、何什德、申懷恩、杜飽子、令狐章午、賀江進、裴狂拙、孫（後缺）

姓氏 41 點、歸義軍の官職 18 點、僧官 4 點、普通の姓名 20 點がある。その中でも、「翟使君」⁴、「索指搗」、「慕容都衙」、「陰都知」という 4 名の名前が S. 4121+S. 4643+S. 4700「甲午年（994）五月十五日陰家婢子小娘子榮秦客目」にも見られている。そのため、これらの官吏が実際に存在することが分かる。これらの姓名には、胡人も漢人もあるが、字は重複していない。これらの情報から見ると、『諸雜人名一本』は任意に書かれたものではなく、特定の内容を選んだものであり、姓名、官職、僧官の學習材料としてを使われたものと考えられる。

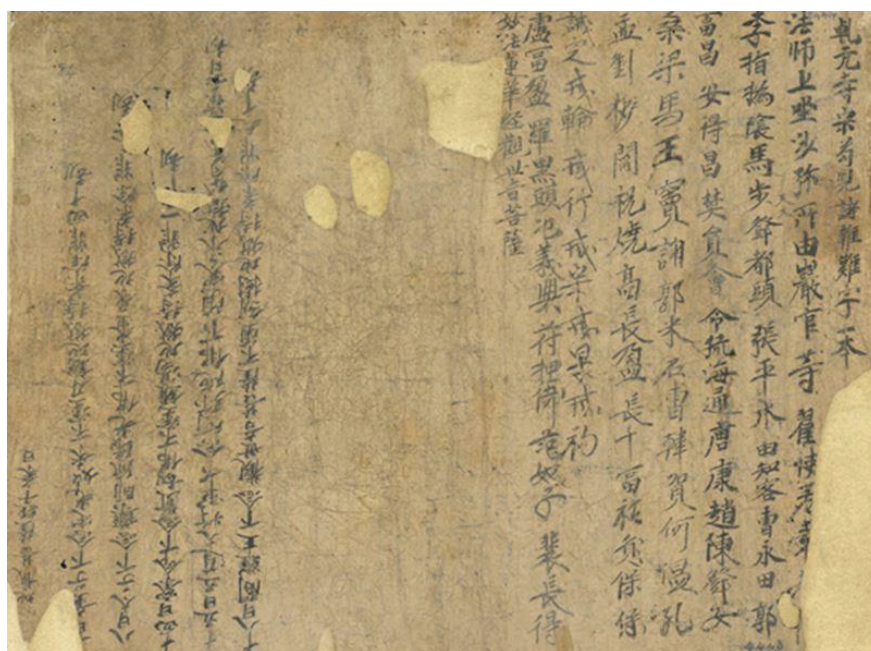


圖 10 S. 4443

S. 4443（圖 10）は、正面は『維摩讚』である。背面に 15 行を残し、『乾元寺宋荀兒諸雜難字一本』（8 行）、「妙法華蓮經觀世音菩薩」（1 行）、『地藏菩薩經十齋日』（6 行）が書かれ


¹ 中國科學院歷史研究所資料室編『敦煌資料』、中華書局、1961 年、206 頁。榮新江「唐五代歸義軍武職軍將考」、《敦煌學新論》、甘肅教育出版社、2002 年、53 頁。郝春文、金澄坤編著『英藏敦煌社會歷史文獻釋録』（第五卷）、146 頁。

² 「揀」、「練」と校正。『敦煌資料』「唐五代歸義軍武職軍將考」は「練」と校正。『英藏敦煌社會歷史文獻釋録』は「檢」と校正。

³ 「帳使」、「唐五代歸義軍武職軍將考」は「長史」と校正。

⁴ 陳菊霞「翟使君考」、《敦煌研究》2009 年第 5 期、84-90 頁。

ている。『乾元寺宋荀兒諸雜難字一本』に姓氏、官職、僧名、姓名等が續けて書かれている。

法師、上坐、沙彌、所由、巖官等。翟使君、 (索都衙)、李指搗、陰馬歩、鄧都頭、張平水、田知客、曹永田、郭富昌、安得昌、樊員會、令狐海通。唐康趙陳鄧安桑梁馬王竇詡郭米石曹韓賀何温孔孟劉柳閻祝燒高。長盈、長千、富祜、願保、保、誠定、戒輪、戒行、戒宗、戒果、戒初、盧富盈、羅黑頭、汜義興、苻押衙、范奴子、裴長得¹

姓氏 46 點、僧職 5 點、歸義軍の官職 8 點、普通の姓名 10 點、僧名 10 點が記録されている。『敦煌經部文獻合集』によれば、この寫本中の數多くの官職や姓名、僧名が他の實用文書にも見られている。寫本の年代がほぼ 10 世紀後期であると考えられる²。宋荀兒は乾元寺の學郎かもしれない。

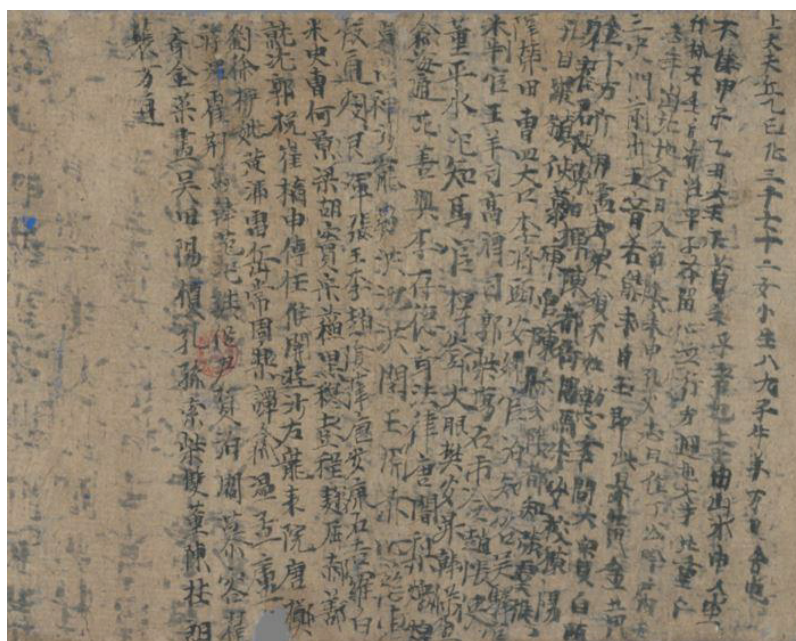


圖 11 P. 3145V

P. 3145V(圖 11)は、前文に言及した通りであり、正面は社司轉帖が書かれ、背面は『上大夫』、『牛羊千口』、『上土由山水』、官職、姓名、敦煌の郷名、『敦煌姓氏雜錄』が續けて書かれている。前數點の寫本に比べると、この寫本の用途はより明らかである。『上大夫』、『牛羊千口』、『上土由山水』、『敦煌姓氏雜錄』は習字と識字の内容であることから、官職、姓名等も學習のために書かれたと考える。

翟使君、索指揮、陳都衙、閻馬歩、安校揀(練)、陽孔目、羅鎮使、慕庫官、陳縣

¹ 張涌泉主編『敦煌經部文獻合集』(第八冊)、4269-4270 頁。

² 張涌泉主編『敦煌經部文獻合集』(第八冊)、4269 頁。

令、陰都知、張虞候、薛榮田、曹四大口、李將頭、安鄉官、泊知客、吳驛官、米判官、王羊司、高酒司、郭柴場、石市令、趙帳使、董平水、汜知馬官、押牙鄧大眼、樊安升、韓保盈、令狐海通、範善興、李存德、齊法律、唐閻梨¹

この寫本の正面には、識語「戊子年閏五月録事張」があり、それが988年に書かれたものであることが先學により既に推斷されている²。字體が比較的良く、初學者のものではない。寫本の中には、姓氏33點、官職23點、僧官2點、普通の姓名5點が書かれている。翟使君、索指揮、安校棟（練）、陳縣令、陰都知等の一部の内容はS. 1153と同じである。S. 4443Vに翟使君、令狐海通も見られている。これら3つの寫本の書かれた時代が近いと考えられるだろう。

官職、僧官、僧名、普通の姓名と一緒に書かれているため、學郎達の學習の目的は、歸義軍の官吏や寺院の僧官になることにあったものと推測できる。

小結

『敦煌姓氏雜録』は敦煌地區の特色を持つ姓氏を學ぶ教材と言える。發見された18件の寫本の中には合計152の姓があり、「張王李趙、陰薛唐鄧、令狐正等」という敦煌漢族姓氏の後、「安康石平羅、白米史曹何」という西域胡族の姓氏が續けて書かれている。この後の内容は、寫本によっては句讀することができず、編集の特徴が不可解なところがある。これらの姓名はほとんどが沙州地區の大姓で、歸義軍時代の沙州地區の姓氏郡望を表わしていると考えられる。張議潮の歸義軍が建てられた後に、俗語の「張王李趙」が『敦煌姓氏雜録』の冒頭になってきた。張氏は敦煌の首望であり、また張議潮の功勞に対する宣傳効果も期待できるだろう。また、敦煌の漢族と胡族の大姓を加える編集方式は、當時の政權の構築や社會の安定に一定の作用があった。

『敦煌姓氏雜録』の寫本は、やや稚拙な字體が多い。ある寫本では『上大夫』、『千字文』、社司轉帖、數字、姓名、敦煌の郷名と寺名等と一緒に書かれており、勉強したばかりの初學者にとって、姓名、氏名等の知識は重要な内容と考えられていたことが分かる。學郎は姓氏を勉強する時、『敦煌姓氏雜録』を直接に書き寫した場合もあれば、『敦煌姓氏雜録』と姓名を組み合わせて練習する場合もある。例えばP. 4017、P. 3211、P. 3894では、姓名が完全に『敦煌姓氏雜録』の順序によって書かれている。特にP. 3894の「張賢君、王辛通、李君子、趙文賢、安文德」等では「賢君」「君子」「文賢」「文德」という名前から、良い徳行に対する期待が込められていることも分かる。また當時、『敦煌姓氏雜録』と社司轉帖が同じ水準

¹ 張涌泉主編『敦煌經部文獻合集』（第八冊）、4128頁。海野洋平「敦煌童蒙教材『牛羊千口』史料輯覽」、『一關工業高等專門學校研究紀要』第46號、2011年、28頁。

² 竺沙雅章「敦煌出土『社』文書の研究」、『中國佛教社會史研究』（増訂版）、朋友書店、2002年、482-483頁。藤枝晃「敦煌曆日譜」、『東方學報』（京都）第45號、1973年、431頁。郝春文「敦煌寫本社邑文書年代匯考（二）」、『首都師範大學學報（社會科學版）』1993年第5期、79頁。海野洋平「敦煌童蒙教材『牛羊千口』史料輯覽」、『一關工業高等專門學校研究紀要』第46號、2011年、27頁。

の學習内容であったようで、『敦煌姓氏雜錄』の姓氏と社司轉帖の姓名を組み合わせて書かれた寫本も見られている。さらに、學郎達は恐らく官吏になる目的から、姓氏と歸義軍の官職、寺院の僧官とを一緒に書いたものと見られ、そのような内容の書かれた寫本も數點が残されている。S. 1153、S. 4443、P. 3145Vにより、「翟使君、索指搗、暮（慕）容都衙、韓衙推、陳縣令」、「唐僧正、郭法律」、「唐闍梨」等、現實に存在した官員の姓氏と官職が利用され、官職に関わる文字や用語を學ぶ目的があったと考えられる。

漢代の『急就篇』から宋代の『百家姓』まで、『敦煌姓氏雜錄』はこれらの間の時代の姓氏に関する學習内容の空白を補っている。さらに『敦煌姓氏雜錄』の編纂方式は『急就篇』と同じではなく、『百家姓』に近いと見られることが分かる。そして、9、10世紀の姓名の學習方法を知るのみではなく、歸義軍時代の社會、文化をある程度反映しており、歸義軍政權の消滅とともに、「趙錢孫李」という内容から始まった『百家姓』も、宋初に敦煌地區に伝えられ、『敦煌姓氏雜錄』は失われていくのである。

第六章 『開蒙要訓』

『開蒙要訓』は、長きに渡り、失傳とされてきた文献である。幸い、敦煌とトルファンの文献中に数多くの寫本が発見され、更には全文を残すものも数点発見された。それにより、『開蒙要訓』は唐五代の重要な識字用蒙書であることが知られるようになったのである。発見当初より、多くの學者が内容について検討を進め、寫本の整理・内容・音韻・價值等の面で多く成果を獲得してきた¹。汪泛舟『『開蒙要訓』初探』は、27件の寫本を紹介し、識字、國を管理したり、家を管理したりする内容を納めるという特徴を指摘した。そして、各學校に採用されていた兒童の教材であることを指摘し、また音韻と價值について検討を進めた²。また、鄭阿財、朱鳳玉『敦煌蒙書研究』によれば、『開蒙要訓』は當時の州學、縣學、寺學に採用されていた子供の識字教材と考えられる。そこで兩氏は37件の寫本を紹介し、全文の校録を行い、形式や内容の検討を通して、その編撰内容が平易であることを指摘するとともに、現實生活における知識面や庶民の教育としての特色を持っていると述べた³。張新朋『敦煌寫本『開蒙要訓』研究』は、79件の寫本を紹介し、さらに全文について詳細な校録を行い、その研究價值や寫本の特徴を分析し、文字學の角度から、寫本中の異なる字の使用を研究した。また、張新朋は『開蒙要訓』と『千字文』との内容と影響面の違いを検討し、『開蒙要訓』が普通の人々の生活を反映すると指摘した。一方、アメリカの倪健(Christopher M. B. Nugent)「敦煌蒙書中の層累知識」は、P. 2578に對して寫本の特徴と使用狀況についてを検討した。また編纂の目的について異なる見方をしている。『開蒙要訓』の知識は一般の商人と民衆に必要なものではなく、當時の士人が使っていた可能性が考えられるとし、詩歌の創作と政府文書を書く基礎を提供するものであると述べた⁴。このように、『開蒙要訓』は明らかに識字の蒙書であるが、その編纂の目的に關しては、先學の見解はまだ定まてはいないのである。筆者は倪健の見解を支持する立場にある。『開蒙要訓』の編纂目的と學郎の出身により、これは官吏になることを希望する學郎の識字と習字の教材であり、彼らが勉強した後は、行政文書、手紙、記帳等を書けるようになっている。もちろん庶民もそれを使って勉強することができる。それらを総合的に考えると、敦煌寫本を中心に考えるに、『開蒙要訓』の學習過程と方法については、『千字文』の後に使われた教材であったと考えられるのである。

一 『開蒙要訓』の編纂と用途

敦煌とトルファンの寫本『開蒙要訓』には、作者に關する記載がない。『雜抄』P. 2721では、「經史何人修撰制注」には、「『開蒙要訓』、馬仁壽撰之」とある。藤原佐世編『日本國見

¹ 張新朋「敦煌寫本『開蒙要訓』研究」、浙江大學博士學位論文、2008年、10-12頁。張新朋『敦煌寫本「開蒙要訓」研究』、中國社會科學出版社、2013年、22-26頁。(以下、頁の番號は2013年に中國社會科學出版社の『敦煌寫本「開蒙要訓」研究』からである)

² 汪泛舟『『開蒙要訓』初探』、『敦煌研究』1999年第2期、138-145頁。

³ 鄭阿財、朱鳳玉『敦煌蒙書研究』、甘肅教育出版社、2002年、51-68頁。

⁴ 中國人民大學文學院古代文本文化國際研究中心主催「寫本及其物質性國際研討會」、2018年4月6-7日。

在書目録』「小學家」には、『開蒙要訓』一卷、馬氏撰」とある¹。その作者は馬仁壽であるとともに、學者の研究により、成書の時代は六朝の可能性があると考えられる²。

まずその主題を見てみよう。「開蒙」は理解しやすく、「啓蒙」という意味を持つ。西晉・著作郎束皙の『發蒙記』、東晉・散騎常侍顧愷之の『啓蒙記』が『隋書・經籍志』に記載されている。この「要訓」はどのような意味であろうか。「訓」は、教え・戒め・法則・訓練・解説等と理解できる。内容を見ると、『開蒙要訓』は字書に似ていることから、教え、戒めの意味は強くないと考えられる。「要訓」は重要な内容の解釋という意味と考えられる。そして、『開蒙要訓』の最後の言葉に「童蒙初學、易解難忘」とあり、「易解」は分かりやすいとの意味である。字を羅列しているだけで、解釋がないのは、理解しにくいであろう。

秦漢時代の字書は、後人が訓詁をしてから、理解することができる。例えば、揚雄の『蒼頡訓纂』、杜林の『蒼頡訓纂』、張揖の『三蒼訓詁』、『埤蒼』、樊恭の『廣蒼』、郭璞の『三蒼注』、釋智騫の『急就章音義』、顏師古の『急就篇注敘』等がある。魏晉南北朝時代は先人の字書を訓詁するだけでなく、新しい字書が大量に生まれた時代である。その中に「訓」字がついた字書について、『隋書・經籍志』には『字義訓音』、『常用字訓』、『訓俗文字略』が記載され、『新唐書・藝文志』には『古文字訓』、『文字釋訓』が記載されている。これらは全て文字を解釋する本であると見なされている。

『開蒙要訓』も六朝に生まれ、文字の訓詁が盛んであった時期であることから、『開蒙要訓』はもともと文字を解釋するもののため、注文があり、『俗務要名林』の形式に似たものであっただろう。

S. 5514 (圖 1) は、24 行を残す不完全な寫本であり、題目がない。その内容としては、自然、土地、人體、衣服、鐵器等が残されており、『開蒙要訓』と類似する。この寫本の文字の下側に注音が見られている。『開蒙要訓』の原容にも同じく注音されていたのではないかと考える。

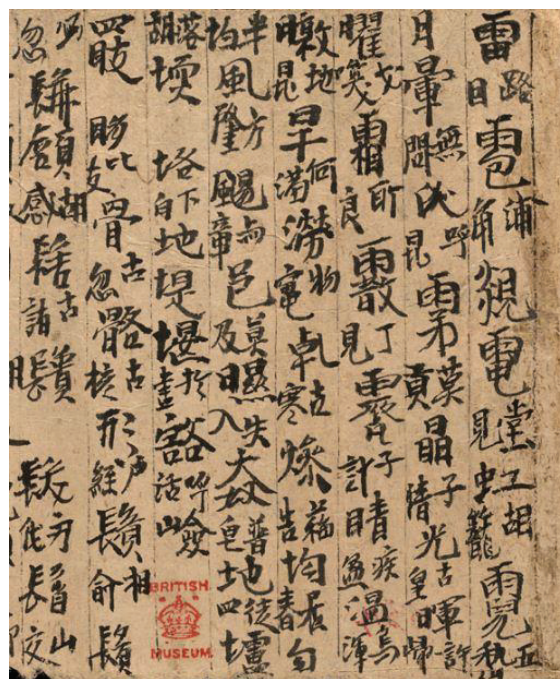


圖 1 S. 5514

¹ 藤原佐世編『日本國見在書目録』下冊、(清) 黎庶昌校刻『古逸叢書』本、江蘇廣陵古籍刻印社、1997 年、739 頁。

² 王重民『敦煌遺書總目索引』は「六朝仁壽馬氏撰」と言った(中華書局、1983 年、461 頁)。天理圖書館編『善本寫真集』第 31 冊『古冊殘葉』(天理大學出版部、1968 年)は「隋文帝仁壽年間(601-604)、馬氏撰といふ。…平安朝時代にかなり行はれたらしいが、その後散佚した」と説明した。張新朋『敦煌寫本「開蒙要訓」研究』(19 頁)は「魏晉六朝之際」と推斷した。鄭阿財、朱鳳玉『敦煌蒙書研究』にも検討した(61 頁)。

『開蒙要訓』のはじめは天文と地理であり、『千字文』の最初と似ている。天文地理の知識は最も奥妙で、學郎の勉強の興味を高めることができる。それに、この編纂の方式は當時の史籍編纂の影響を受けたものと思しい。北齊・魏收の『魏書』で、「天象志」「地形志」を他の志の前に置き、『漢書』以来の「律曆志」からの編纂體系が變更された。初唐の編纂になる『晉書』もまた「天文志」「地理志」が始めにあり、大型類書『藝文類聚』、『初學記』も天文と地理の内容が前に置かれている。

『開蒙要訓』の内容は4字1句、350句から成る。その文章の質は明らかに『千字文』より見劣りするものであり、多くの句は単独の字と單語から構成されている。例えば「霧露霜雪、雲雨陰晴」や「湍波漂浪、沉溺渦沓」等である。『開蒙要訓』の内容は種類が非常に多く、天文歳時16句、山川河岳8句、君臣の礼儀10句、宴會の描寫8句、樂器4句、人倫と家庭の知識16句、居間10句、女子工服38句、人體の知識16句、疾病の知識15句、都市と田舎の知識2句、心理状態を表す1句、寶石の知識6句、鐵器及び制作12句、農業生産の知識28句、貸借や喧嘩や訴訟等の知識14句、外出及び道具等12句、職人側の知識8句、飲食及び器具30句、屋敷と園林等24句、木2句、果物と野菜に関する12句、動物26句、乗馬と射矢等6句、犯罪と執行面の知識22句、筆墨紙硯2句となっている。これらの知識は日常生活、生産を中心としており、忠孝と徳行に関する内容は非常に少ない。よって『開蒙要訓』は、識字を主な目的とし、雜字類の蒙書に属するものと考えられる。勸學の意味が薄いことから、『千字文』とは性格を異にし、また『太公家教』のように人倫や徳行教育が重視されるもでもない。

このことから、『開蒙要訓』の主な用途は識字であるが、學郎の識字目的は何であると考えられるだろうか。敦煌の學郎の大部分は敦煌の大族から成る。『開蒙要訓』寫本の識語には、「宋文獻」「安文徳」「張□□」「張彦宗」という學郎の名が記載されているが、そのうち「張」「安」「宋」の三姓は、敦煌の世家大族である。つまり彼らの出身から、彼らは官吏や僧になることが最終目的なのである。確かに、官吏と僧が文化の代表者として、天文と地理を知り、忠君、臣の道を知り、宴會に参加し、さらに少しの醫術もできるのは望ましいだろう。事務處理を行い、行政文書を書くために、官吏と僧たちは貸借、喧嘩、訴訟、犯罪、法の執行に関する知識がなくてはならない。記帳と物を記録するためには、もちろん生活の中の各種用具、動植物の字を書く必要がある。従って、『開蒙要訓』は實用的な識字書であるのだろう。倪健は、『開蒙要訓』は當時の士人の階層が使用していた可能性があり、詩歌の創作と政府文書を書く基礎能力を提供したものと考える。筆者の觀點は氏の觀點とほぼ一致するが、詩歌の創作の基礎を提供したという見解には再考の餘地があると考える。

『開蒙要訓』と似た性格の文獻として、早くには『蒼頡篇』と『急就篇』があった。張金光は「論秦漢的學吏制度」において、「秦の『蒼頡』『博學』『爰曆』の中で、漢の『急就篇』は當時官吏になりたい人に向けた勉強材料であり、また物を知るための教科書であって、一般的な啓蒙教材ではない」と指摘したが¹、妥當な見解であろう。居延で出土した漢簡『蒼

¹ 張金光「論秦漢的學吏制度」、『文史哲』1984年第1期、35頁。張金光「論秦漢的學吏教材—睡地虎秦簡

頡篇』の篇首は「蒼頡作書、以教後嗣。幼子承昭、謹慎敬戒。勉力諷誦、晝夜勿置。苟務成史、計會辯治」である。この最後の一言は、學童の學ぶ目的が「史」になるためであり、「計會辯治」の能力を身につけるべきであると言っている。甘肅省水泉子で出土した『七言蒼頡篇』の1段には、「勉力諷誦傳出官、晝夜勿置功□□、□□□（苟務成）史臨大官。計會辯治推耐前、超等秩群□□□、□□□□（出尤別異）白黒分」とある¹。これより、「傳出官」や「臨大官」が勉強によって官になれることを意味している。「白黒分」とは、事柄の「白黒」を分けられるようになることである。『蒼頡篇』が、官吏の教材であることが分かる。漢簡『蒼頡篇』は、よく整った字體である。それらは當時の基層官吏の習字であると考えられる。秦時代には、「以史為師」（史を師とする）という制度がある。史は様々な事務を處理するため、まず『蒼頡篇』を學び、必要な基礎知識を身につけねばならなかった。そして、書道にも高い水準が求められることから、書道の練習もしなければならなかったのである。

しかし、この見解には疑問を抱く學者もいる。張傳官は、「字書を教材として學ぶ學史者は、基層の庶務をより良く處理することを目的となるが、これらの使用範圍を學史者に制限することはできない」と指摘するとともに、「秦漢字書の性質から、やはり舊説を採用し、通用する啓蒙教材と見なされる」と述べる²。この見解は、より説得力を有するが、ここでは字書編纂の目的が見逃されている。『漢書・藝文志』には、「『史籀篇』者、周時史官教學童書也」とあり³、學童を「史學童」と言う。學童の勉強の目標は「史」に務めることであり、『史籀篇』は専用の教材である。『蒼頡篇』は『史籀篇』と同じ性質を持っている。ここで、秦漢時代の字書の作者を見てみよう。『漢書・藝文志』によると、秦の丞相・李斯の『蒼頡』、車府令・趙高の『爰歷』、太史令・胡毋敬の『博學』、西漢・司馬相如の『凡將篇』、黃門令・史遊の『急就篇』は、將作大匠・李長の『元尚篇』とある。李斯は「以史為師」という制度を強調したが、趙高は車府令である。胡毋敬は太史令であり、史學童の試験を担当している官である。司馬相如、史遊、李長も高官である。彼らの地位や立場から言えば、編纂した字書の主な目的は、文字を統一し、官吏を育成し、官吏の書道の水準を向上させると考えられる。識字教育を普及させるために、彼らが社會の各階層の人たちに字書を勉強させるとは、考え難いのである。従って、秦漢時代における字書の編纂の目的は、官吏の教材として、及第の官吏を育てるためのものであろう。

社會の發展により、字書の用途も変わってきた。官吏が字書を廣く使用するため、字書は社會の各階層に傳わたった可能性が考えられる。當時、庶民の教育のために編纂された字書はほぼなく、庶民が勉強したい時には『蒼頡篇』や『急就篇』等をそのまま使っていたと考えられる。そのため、字書は社會の中で識字蒙書として利用されるようになる。後漢・崔寔の『四民月令』には、「研凍釋、命幼童入小學、學書『篇章』。」と記載されている。「篇章」に

為訓吏教材説」の主張も類似である（『文史哲』2003年第6期、65-72頁）。

¹ 復旦大學出土文獻與古文字研究中心讀書會「讀水泉子簡『蒼頡篇』札記」、2009年。

² 張傳官「談『急就篇』等秦漢字書の性質—與張金光先生商榷」、『辭書研究』2012年第3期、70、71頁。

³ 『漢書』卷三十『藝文志』、1720頁。

ついて、注文には「『六甲』『九九』『急就』『三蒼』之屬」とある¹。その際、『蒼頡篇』と『急就篇』は、既に一般的な啓蒙教材となっていた可能性がある。顔師古は『急就篇注叙』において、「蓬門野賤、窮郷幼學、遞相承稟、猶競習之」と述べており²、唐代では、貴賤を問わず、『急就篇』を利用して習字した。トルファン文獻には『急就篇』の習字寫本が残されている。

このようにして、『開蒙要訓』もまた學郎が文書を書き、記帳を行い、手紙を書くことの基礎を學ぶのに用いられたのである。

『蒼頡篇』や『急就篇』は習字の教材であり、『開蒙要訓』も例外ではない。敦煌寫本『開蒙要訓』では、P. 2703のように師範の範字のある寫本が残されていないが、ある學郎が1字を1行あるいは2行に書いた寫本P. 2249V、P. 2717V、上圖 110Vがある。特に、上圖 110Vには『千字文』の習字もある。つまり、學郎は『開蒙要訓』を使って、習字をすることもできたのである³。

二 『開蒙要訓』の學習

『開蒙要訓』に関する敦煌寫本はこれまで79件が発見された⁴。それらは綴合し得る寫本もあり、計40件にまとめられた。内容の完全なものは5件あり、それぞれP. 2578、P. 3610、P. 2487、P. 3054、P. 3875Aである。トルファン文獻には14件の寫本が残されている⁵。寫本の數量が『千字文』に次ぐ多さであり、敦煌とトルファン地域では非常に流行していたことが分かる。多數の寫本は不完全だが、内容が多く残されている。1行または何行かが書寫された寫本が少しある。

S. 705、P. 2578、P. 3189、S. 5463には學郎の識語があり、學郎が書いたことを明らかにしている。他の寫本には識語がないが、多くのは學郎の作品であると考えられる。寫本の品質はまちまちである。書道の水準が高い寫本は、P. 2578、P. 2588、P. 3102、P. 3189、P. 3875、P. 4937V、S. 6128、上圖 17等がある。一部分の寫本は「筆法がやや稚拙、多くの誤脱がある」⁶のものであり、P. 2717V、S. 5464、S. 5431、Дx. 6582、Дx. 11048等が挙げられる。

『開蒙要訓』は文字數が多く、比較的複雑な内容であるため、初學者には適切な資料ではない。學郎が『開蒙要訓』を學ぶ時は、冒頭を書くだけではない。S. 5464（圖2）には、『開蒙要訓』の2編が残されている。第1編は5行、第2編は約142行であり、「鴻鶴」で終わっている。寫本の冒頭に「金剛經讚」、「庚辰年十月十六日立契赤心郷百姓」、「之大天子」の習字等が書かれている。最後の頁には識語「己卯年十月十三日」と書かれている。この寫本を他の寫本と比べると、字體はやや稚拙であるが、『千字文』寫本と比較すると、『千字文』

¹ (漢) 崔寔著、石漢聲校注『四民月令校注』、中華書局、1965年、9頁。

² (漢) 史游著、曾仲珊校點『急就篇』、岳麓書社、1989年。

³ 鄭阿財、朱鳳玉『敦煌蒙書研究』『千字文』は、識字の教材として使われている他、習字と模寫の使用を兼ねている。『開蒙要訓』は識字の用途に集中していると主張している。(66頁)

⁴ 張新朋『敦煌寫本「開蒙要訓」研究』、44頁。

⁵ 張新朋『敦煌寫本「開蒙要訓」研究』、18頁。

⁶ 張新朋『敦煌寫本「開蒙要訓」研究』、71頁。

の最も稚拙のものよりは能筆である。従って、『開蒙要訓』は、學郎がある程度の基礎を習得して勉強するものと考えられる。

清・陸世儀『思辨錄輯要』には、「先儒教小兒習字、先令影寫趙子昂『大字千字文』、稍長、習智永『千字文』。每板影寫十紙、既畢、後歇讀書一二月。以全日之力、通影寫一千五百字、添至二千三千四千字、如此一二月乃止。必如此方能日後寫多、運筆如飛、不至走樣、亦是一法」とある¹。清代の學童は最初に『千字文』を學び、一定の基礎を習得して後、一日に一千五百字を書き、徐々に一日に二千から四千字まで書き續けた。もし唐代の學郎もこのような方法によって習字をしたのならば、『開蒙要訓』が一千四百字であり、まさに「以全日之力、通影寫一千五百字」という習字の段階にあると言える。多數の寫本の中には『開蒙要訓』だけと書かれているものもある。更に、最初から最後まで書かれたものであり、且つ書體が整っていることから、書寫者は明らかに長い期間にわたって習字の訓練を積んでいたと考えられる。

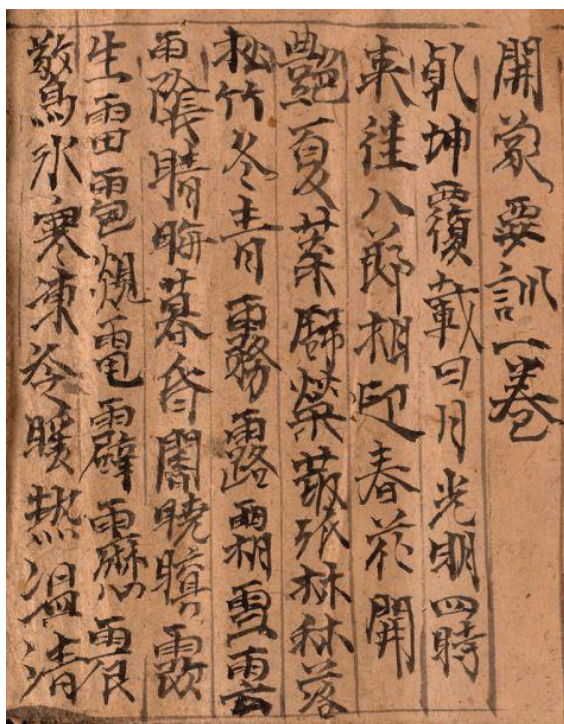


圖 2 S. 5464 (部分)

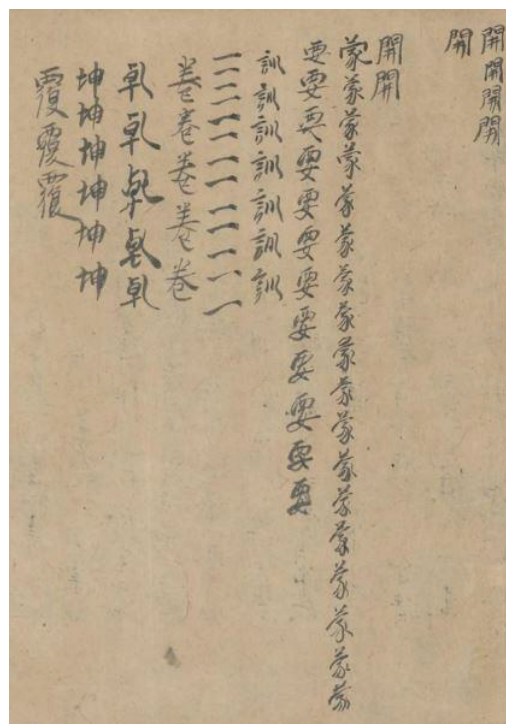


圖 3 P. 2249V (部分)

『開蒙要訓』を上手に書くために、學郎は1字ずつ練習しなければならない。P. 2249V (圖3)は、正面が『大般若波羅密多經』であり、背面が58行の雜寫である。背面は「大大大大大目乾連神通第一」、「潤月、正月、一日、二日」等の日付、「佛說閻羅王授記四衆預修生七齋往生淨土經」、「惠惠惠德德德德」、「開蒙要訓」、「全子押衙」、「癸未年正月一日立契」、「壬

¹ (清) 陸世儀『陸桴亭思辨錄輯要』、王雲五主編『叢書集成初編』、2頁。

午年正月一日慈惠郷百姓康保住僱工契』、『太公家教』、「王梵志書集壹卷」、甲子紀年、『悉達太子修道因縁』等が連続して書かれている。書寫者は、習字をしていたのである。『開蒙要訓』の習字については、9行が書かれ、内容は「開蒙要訓一卷乾坤覆」である。「開」は3行共7字書かれ、「蒙要訓一卷乾坤覆」の8字は各字を1行に書いている。このような習字の方式は『上大夫』、『千字文』と似たものである。

繰り返し習字をした寫本は、P. 2717+Дx. 5260+Дx. 5990+Дx. 10259 と上圖 110V にも見られている。

P. 2717+Дx. 5260+Дx. 5990+Дx. 10259 の正面は『字寶碎金』であり、背面は3編の『開蒙要訓』の習字である。第1編は繰り返し習字である。その中の「雪、雲雨蔭（陰）晴。晦暮閔（昏）、曉命（暝）霞」の1段は、1字が2行に書かれ、行約10から15字である。「雷電閃、霹靂振（震）驚。氷寒凍冷、暖熱温情。岳嵩華、霍恒。江河（河）淮濟、海紬（納）吞并。湍波漂」の1段は、1字が1行に書かれた。「浪（浪）溺」から「萬國」まで等の19字は、横に書かれたが、1行に1字だけ書かれた。この編の習字は、字體がやや稚拙で、脱字と誤字のところが多く、習字の能力は高くないと見られている。この書寫者は『開蒙要訓』を學ぶ時間が長いわけではない。第2編に34行が残され、「開蒙要訓一卷」と首題して、内容は最初から「腫癩肌膚」まで、字體がやや稚拙であるが、書寫の能力は第1編により比較的高い。その後、『開蒙要訓』とは関係のない文字が書かれ、内容は「丁卯年五月廿八日酉時、北方三處頻頻現雷光、至廿九日天明則息不現也。已後不知何事記知、後定數日月為準則也」であり、稲妻現象が記録された。第3編は左から右へ、32行が書かれ、寫本の裂けりて欠落がある。「開蒙要訓一卷」と首題して、内容は冒頭から「儒癩」までの間に約160字が欠けた。この編の筆跡は P. 2738V と非常的類似で、同一の書寫者であると考えられる。P. 2738V には識語の「咸通十年己丑年六月八日男文英、母因是」が書かれて、この第3編の書寫者も男文英であり、書かれた年代も咸通十年（869）のことであろう。寫本の3編の用字状況を對比すれば、第2編と第3編は同じ寫本から書き寫すべきであると予想され、2人の書寫者の學習レベルは近い。しかし、第1編の書寫者は明らかに第3編を照らして習字をした。これらの誤字は同じである。例えば、2つの「命」を1つの字と見なして書かれた。また、第3編の「電閃」の右側に修正記號があつて、正しくは「閃電」と表し、第1編の習字は「電閃」の順に「電」「閃」をそのままに直接書き寫した。つまり、第1編の書寫者は、寫本の中に存在していた第3編の『開蒙要訓』を利用して習字を行い、本來の誤りを受け継いでいるだけでなく、習字の過程に新た誤字や脱字が見られている。そちらの推論から考えると、敦煌の學郎が習字を始めたばかりの時は、他の學郎が書いていた寫本を使い、そのまま寫すことが多いので、間違いが多い。

上圖 110V の正面には『阿毘曇心論』卷第二であり、背面は『千字文』、『開蒙要訓』等の習字である。『開蒙要訓』は『千字文』の習字の間に、97行が残され、「帷帳」まで、1字の書く回数の多いものと少ないものがある。この書寫者の習字の能力は既に高くなっていて、誤字がない。學郎は習字の過程に、絶えず進歩して、誤字はますます少なくなり、書道の能

力はますます高くなっていた。

『千字文』の寫本には師範の範字があつて、學郎が範字と照らし合わせながら、習字を行った。逆に、『開蒙要訓』の寫本には師範の範字を發見したことがなくて、『開蒙要訓』を基礎とした習字の教材ではないと考えている。「描紅」というの習字の形式はこの時期の學郎に適合しなかったの、彼らが別の寫本を参照して、勉強し續けていた。

『開蒙要訓』の内容の特徴の1つは、多く同じ部首の字を並べていることである。學郎は『開蒙要訓』を學ぶ時、同じ部首によって字を纏めて寫したことがある。S. 5513 は正面（圖4）に27行を残しているが、それらは『開蒙要訓』の中から摘出した内容となっている。右から左へ見ていくと、最初の2行目は部首が「糸」であり、第3、4行目は主に部首が「ネ」であり、衣服と関係がある。第9～13行目は主に部首が「金」であり、鐵器に關連する。第14、15行目は部首が「才」と「木」である。敦煌の俗字で「才」と「木」は區別されないため、それらの内容が同じ部首として書かれている。第16、17行目は部首が「食」であり、食品である。第18、19行目は部首が「麥」「石」「米」であり、食糧および生産に關連する。第20行目は部首が「車」であり、車に關連する。第21行目は部首が「革」であり、靴に關連する。第22、23行目は部首が「虫」であり、虫類と關係がある。第23、24行目は部首が「魚」であり、魚と關係がある。第25、26行は部首が「木」であり、果物と關係がある。最後の部首は「艸」であり、植物と關係がある。

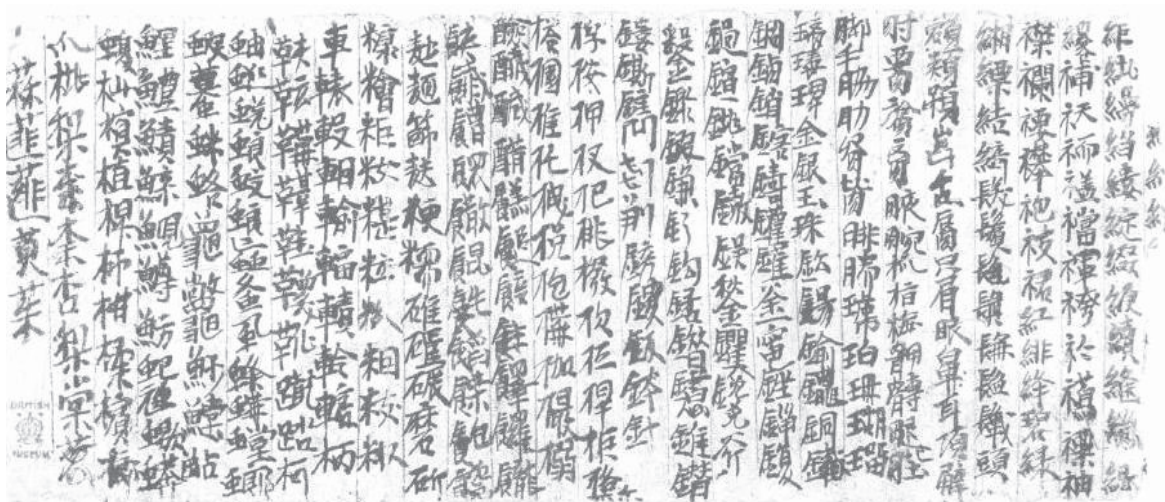


圖4 S. 5513

S. 5513の背面（圖5）には13行を残し、左から右へ書かれていた。第1から3行目は部首が「氵」であり、水と關係がある。第4、5行目は部首が「禾」であり、農作物と關係がある。第6、7行目は部首が「木」であり、木と關係がある。第8から12行目は「送遠還通達、逍遙近道邊。路逢遐邇過、進退_遊遊蓮。追_進逐_迎逐、遂這遣逢迴。造隨遷籛、篋速述遮。遶_迎遶_運」である。最後の1行は「毛穠稔_穠穠」である。書寫者の意圖は明らかであり、それは、『開蒙要訓』の内容を崩し、同じ部首の字を並べることにあつたのである。

『送遠還通達』という詩は「聯邊詩」と呼ばれ、敦煌文獻に9點が残されている¹。これは同じ部首の字をまとめて、學びやすくした詩歌の形である。『開蒙要訓』には、「走」の部首の字がないため、書寫者はこの種類の字を加入したのである。これは書寫者が識字効率を高めるための學習方法である。

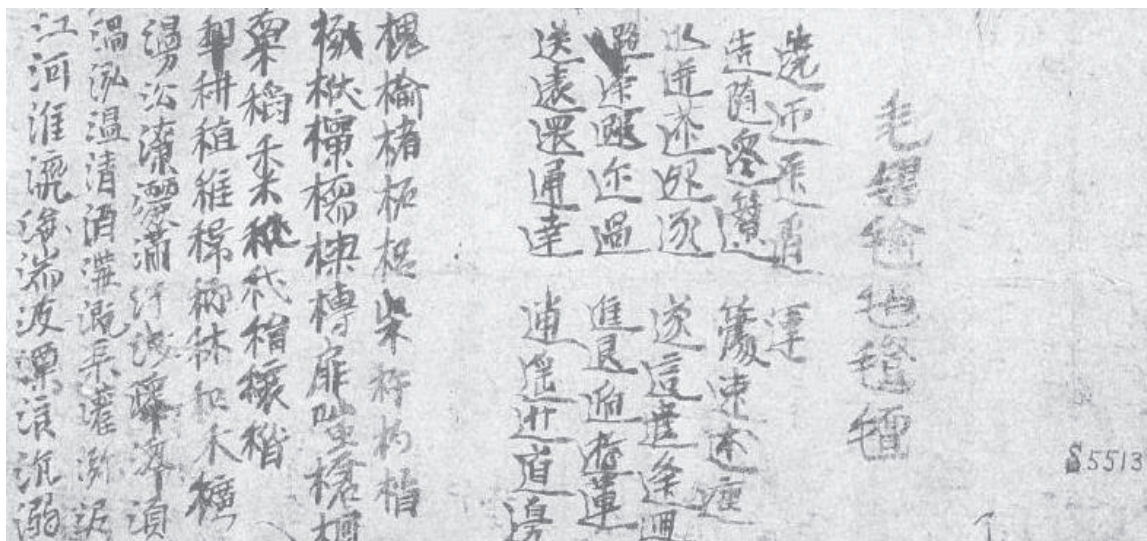


圖5 S.5513V

學習の効率を高めるために、1人の學郎が読み上げ、もう1人の學郎が聞いて書くという方法を採用していた例がある。S.705（圖6）は83行を残す寫本であるが、1行約15から20字であり、比較的整っている。識語には「大中五年（851）辛未三月廿三日學生宋文獻誦、安文德寫」とあることから、1人が読み、もう1人が書くという、2人で行った姿が読みき取れるのである。またP.2825『太公家教』の識語に「大中四年（850）庚午正月十五日學生宋文顯讀、安文德寫」とある。この「宋文顯」とは「宋文獻」である。この2人は同級生で、1年間以上同學であったことが推測できる。吏として文書を書くことが多く、聞きながら書寫しなければならない。それ故、學郎は『開蒙要訓』を學ぶことは、書き取りの練習をし、今後の仕事において速く正確に書寫できるための練習であったと考えられる。

¹ 張新朋「敦煌詩苑之奇葩—敦煌文獻中的「送遠還通達」初探」、《敦煌研究》2016年第5期、120-124頁。

學郎の使用した寫本について、紙や學習材料の貴重さにより、學郎が捨てることなく、寫本が他の學郎の手に渡って、引き続き使用されていたことも確認されている。

P. 2578 (圖7) は、112行を残し、1行約6から16字であり、非常に整っている。識語は「天成四年(929)九[月]十八日燉煌郡學仕郎張[?] (書)」とある¹。朱點で句讀をしたが、誤りが多い。いくつかの字の右または右の下側には注がある。例えば、「夏葉舒榮」の「舒」右には「書」と注されており、「霧露霜雪」の「霧露」の右側に「武」「路」を書寫している。常用字や簡単な字で不慣れな字に注音している。注意が必要なのは、注音の字の書き方が本文と異なる点である。例えば「諂」は、注では「昏」であり、「召」の俗字である。また、正文「降」は、注が「降」であり、「牛」の書き方が異なる。全て楷書だが、文字の筆の長さが違い、注音の字は本文より成熟しているので、本文と注音とは別人によって書かれていたと考えられる。また、寫本の最後には「開蒙要訓一卷」とあり、その「開」の右上側に朱筆で「𠂔」型記號が書かれている。これは敦煌寫本の中でよく見られる俗寫で、「門」が「𠂔」に変わり、朱筆の書寫者と本文の書寫者が同じでないことを示唆している。朱筆の書寫者が「門」を「𠂔」に書く習慣があり、本文を書き直したということである。また、この寫本には「燉煌郡學仕郎張[?]」と書かれている。その後、別の人の手に入ったのであろう。その人物が勉強する時、朱筆で句讀と注音を施したのである。恐らく彼もまた敦煌郡學仕郎である。苗字も同じく「張」であろうか。前人の名前を苗字だけ残し、この寫本を自分の所有にしたのである。

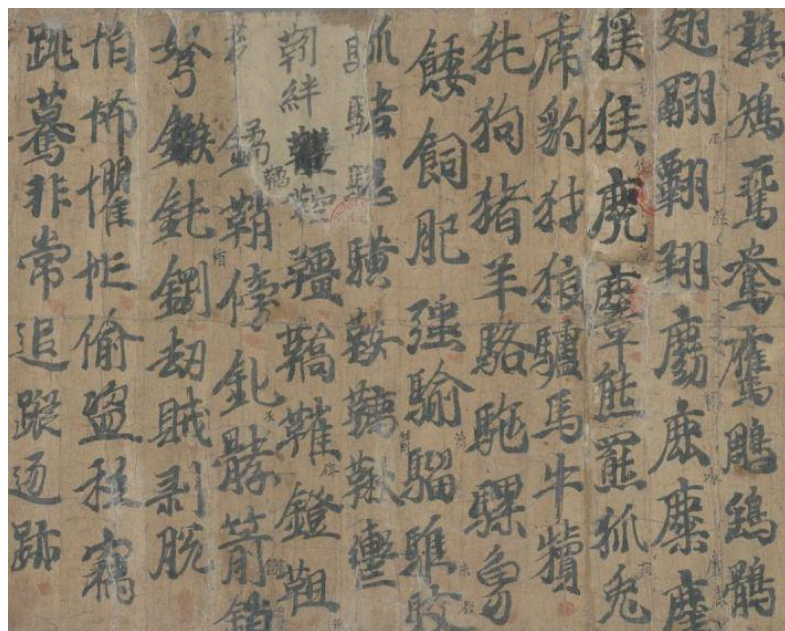


圖8 P. 3243+Dx. 19083R (部分)

¹ 「張」の後三字が塗りつけられた。李正宇「敦煌學郎題記輯注」は「張顯順書」と推斷した(『敦煌學輯刊』1987年第1期、31頁)。

P. 3243+Дx. 19083R (圖 8) は、72 行を残し、1 行約 8 から 10 字であり、非常に整っている。朱筆で句讀、行間に小字の注があり、書體が本文と異なる。注は注音、解釋、校訂が含まれている。寫本は基本的に毎行 8 字、2 句 1 行で句讀が容易である。本文の字は良く、小字の注字は比較的に下手である。故に、これは一人で書いたものではない。注文は後の使用者が書いたのであろう。本文の中では「驄」「鞞絆(鞞)鞞」「帶録(鞞)」等の字が欠けており、注文を施した使用者が補字を行っている。

當時、紙は貴重なものであり、寫本の正面も背面も利用されていた。そして、寫本は多くの人の手を渡るものであった。以上の 2 件の寫本のように、1 人が書き上げた後に、他の人の手に渡し、また句讀、注を通して、學習を續けられていった。

このように、敦煌寫本『開蒙要訓』の全體的な状況を見てみると、學郎はまじめに全文を書き写しており、『千字文』と比べて誤字が少ないことから、確かに學習時間が長かったであろう。また彼らは高い書寫能力を備えており、多様な學習方法を行っていた。習字によって書寫能力を高めるだけでなく、内容を理解し、暗唱したり書寫したりできる故に、誤字も多くない。

小結

秦漢の字書が現れて後、六朝時代に誕生した『開蒙要訓』は、内容と用途の面において、最も『蒼頡篇』に近い性質を有しており、多くの内容に『蒼頡篇』を模倣した可能性が指摘し得る。唐五代においては、『開蒙要訓』は非常に流行し、敦煌寫本の数は『千字文』に次ぐ多さである。敦煌の學郎はそれを識字の教材として學習し、行政文書、手紙、記帳等の基礎用字を身につけていった。

『開蒙要訓』の利用者は既に一定の書寫能力を備えた學郎である。敦煌文獻に師範の範字を残す『開蒙要訓』の寫本は未だ発見されていないことから、初學者から使用した類の習字教材ではないと考えられる。ある程度の書く能力を備えた學郎に対しては、師範は範字を書くという教え方を採用せず、學郎が自分で書寫する形式の學習方法だったのである。學郎は、他の人物が書寫した寫本を再利用することによって、多くの誤りをしている。この時期に、學郎はうまく書けるようになるべく、大量の習字を行う。よって、『開蒙要訓』を書寫していた。そして、學郎は往々にして最初から最後までを眞面目に書寫し、『千字文』習字のように任意に書寫するのではなかった。學郎は、『開蒙要訓』を利用して聴取能力をも訓練する。1 人が読み、もう 1 人が書寫するという方法によって、記憶を深められるだけでなく、學郎の後に官吏になるにあたって非常に役立ったであろう。學郎は、識字の効率を高めるために、部首によって字を並べて書寫し、『開蒙要訓』にはない字を補い、それを併寫していった。ある學郎は他の人が書いた寫本を持ってきて再び勉強し、寫本に対して句讀、注音、注義、校改を行っていた。

先學は、よく『千字文』と『開蒙要訓』とを比較して検討を行ってきた。『千字文』は基礎の習字の教材であり、『開蒙要訓』は識字量を擴充して、様々な文書を書くために重要な

字を學ぶ教材であると考え。敦煌寫本から見ると、『千字文』は初學者向けであるが、『開蒙要訓』は一定の書寫能力を備えた學郎に適したものと言える。両者は唐五代に敦煌で流行していたが、宋代以降では、『千字文』は廣く使われていた一方、『開蒙要訓』はその姿を消していった。史籍には『開蒙要訓』に對する記載が少ないため、その原因は未だ不明である。これは今後の更なる研究を必要とする問題であろう。

結論

本論にも論じてきたように、敦煌文獻の中には唐五代時期の識字寫本が多く保存され、當時の識字の過程を知ることができる。このように當時の識字の状況を段階をおって詳しく理解することができる資料はこれまでのところ敦煌文獻以外には見つかっていない。

多くの敦煌學郎は當地の大族の出身である。教育を受ける大きな目的の一つは、歸義軍政權で官吏となるか、或いは僧侶になることである。そのため啓蒙教育を受ける際、習字をし、書道能力を上げることが1つの重要課題となる。また、各知識、規範礼儀、徳行も勉強し、各種行政文書、記帳、手紙を書くための基礎的知識とそれに關わる文字を勉強しなければならない。

『上大夫』はこれまで29件の寫本が発見されている。内容は簡単で、唐代には學童が最初に字を書く時に使用した教材である。當時に「半字」という言い方がある。入學したばかりの學郎は年齢が小さく字體もやや稚拙である。彼らは往々にして寫本の餘白の所と背面を利用して『上大夫』の1、2句を習字することもあった。例えば、P. 2178V、BD1640、BD1745、BD1774V、S. 6019V等がそれにあたる。『上大夫』一文だけだと短過ぎるため、『牛羊千口』や數字と一緒に書くこともあるが、或いは當時の師範からそれを教わったのだろう。5件の寫本に『上大夫』と數字が連続に書かれている。これらは全て筆畫が簡単で、初めての習字にふさわしい教材である。13件の寫本に『上大夫』と『牛羊千口』が連続して書かれている。

『牛羊千口』は儒家の勸學効果があり、『上大夫』と組み合わせて、使われていたと考えている。『上大夫』の寫本の中で、ある寫本は「七十二、女小生」と書かれてあり、ある寫本は「七十士、尔小生」と書かれてある。後者は後世の『上大人』との類似から『上大夫』の原容に近いと考えられる。宋代の『上大人』の最後には「佳作仁、可知礼也」が加えられて、勸學の意味がより補完されていた。

『上士由山水』は五言詩である。敦煌文獻にP. 3145V、S. 4106V、P. 2896V、P. tib. 2219Vという4件の寫本が残され、P. 3145Vの内容は完全に14句が保存されている。内容より見るに、儒家の勸學の意味が全文を貫いている。王生の賢明、顔回の徳行、王充の學問が學習の対象である。逆に、王澄の傲慢、丁公の不忠を學んではならないことも言っている。學郎は道德が高い人になることを望む。そして、『史記』、『漢書』、『後漢書』等歴史書や「宮商角徵羽」についての音樂知識を學習することも必要である、ともいう。『上士由山水』は學郎の習字教材として使われていた。14句から成るの詩歌は學郎の習字にとって、長過ぎるのかもしれない。S. 4106Vの中には、「今日入南音」までの前8句しか書かれない。短い詩歌は學童習字に適していると考えられる。

『上士由山水』を除いて、敦煌文獻の『送遠還通達』、『沉淪深浪波』、そして王羲之の『蘭亭詩』、トルファン文獻の『詠月』、『詠魚』等の詩歌が學童の習字の内容として使われていた。

『千字文』の流行時間は長く、影響は大きかった。作者は鐘繇である。晉・中宗元皇帝時

期、王羲之が『千字文』を改めて書き寫したために保存されることになった。梁武帝の時、周興嗣が『千字文』を次韻した。これは識字文獻であり、かつ習字蒙書も兼ねており、習字の手本としてもよく知られている。内容から見ると、徳行類の蒙書に似ており、勸學の意味が全文を貫いている。唐五代時期においては『千字文』が重要な習字書として、初學者から書道能力を持っている學郎までよく使われていた。S. 2703、P. 3114、S. 5723 の中では、師範が書いた模範字と學郎の模寫字が書かれている。高い習字能力を持っている場合、書寫能力高めるために、學郎は自ら手本を照らしながら練習する。例えば、S. 4852、上圖 110V である。寫本に誤字が多く見られていることについて、學郎の不注意とも考えられるが、もう 1 つには寫本を書く際に、書き取りという方法を採用されたためとも考えられる。内容に習熟していない上に聴き取って書いたための誤記と見られるのである。

『正月孟春猶寒』に関する敦煌寫本はこれまで P. 2738V、P. 3705V、P. 2633、S. 1163V、羽 663R、P. 4994V、S. 10275、羽 712 の 8 件が確認されている。寫本の書寫年代から見ると、最も早いのは 869 年、最も遅いのは 958 年である。『正月孟春猶寒』は、十二カ月、節氣や氣温を並べている時令文であり、短く読みやすく、文字の習得や書簡の常套句が並んで、実用性が高い簡易な書儀である。既存の敦煌書儀から見るに、『正月孟春猶寒』の内容は、張敖の『新集吉凶書儀』に基づいた可能性が指摘できる。『正月孟春猶寒』は主に識字用のものであり、學郎が識字と同時に、季節と氣候等知識、手紙を書くこと、言葉遣い、挨拶用語の學習、延いては行政文書や文章の執筆を身につけるのである。

『敦煌姓氏雜録』はこれまで 18 件の寫本が発見され、「張王李趙、陰薛唐鄧、令狐正等」の漢族大姓を始め、「安康石平羅、白米史曹何」という胡族の大姓を續けて書かれている。寫本によってはこの後の内容を句讀することができない。寫本の時代を見ると、一番早いのは乾符三年（876）であり、最も遅いのは 10 世紀後期で、ちょうど歸義軍の統治時代である。また「張王李趙」から書き初められたものの作成年代は、張氏が歸義軍を建てた後であると考えている。學郎は姓氏を勉強する時、『敦煌姓氏雜録』と姓名に組み合わせて練習する場合もあり、書かれていた姓名が完全に『敦煌姓氏雜録』の順序によっている。『敦煌姓氏雜録』の姓氏と社司轉帖の姓名を組み合わせて書かれた寫本も見られる。また、姓氏と歸義軍の官職名、寺院の僧官名と一緒に書かれた寫本も數點残されているのは、學郎が官吏となることを目指して字の練習をしていたことを思わせるのに十分である。

『開蒙要訓』は、學郎の識字教材として、行政文書、手紙、記帳等の基礎用字を勉強するものである。内容は 4 字 1 句、350 句から成る。その文章の質は明らかに『千字文』より見劣りし、多くの句は單独の字と單語から構成され、識字を主な目的とする。『開蒙要訓』の使用者は既に一定の書寫能力を備えた學郎である。このレベルに達すると、學郎はうまく書けるように、大量の習字を行うのに『開蒙要訓』を書き寫していた。學郎は『開蒙要訓』を利用して聴取能力を練習する。1 人が読み、1 人が書くという方法を通じて、記憶を深めることができるだけでなく、將來、吏になるのに役に立てられると考えられている。

『上大夫』、『上土由山水』を勉強する主要目的は習字である。さらにそこには勸學、徳行

教育も含まれている。そうした中で、先に學んだのは『上大夫』であろう。敦煌寫本の中、『上大夫』の習字寫本が一番稚拙であることからそれは間違いのないことであろう。宋代以後の史籍記載によっても、學童の初學習字材料が『上大夫』であることを裏付けることができる。南宋陳郁の『藏一話映』には、「孩提之童才入學、使之徐就規矩、亦必有方、發於書學是也。故『上大人、丘乙己、化三千、七十士、尔小生、八九子、佳作仁、可知礼也』、殊有妙理」とある¹。また、南宋陳元靚の『事林廣記』にも、「寫字時、先寫『上大』二字、一日不得過兩字。兩字端正、方可換字。若貪字多、必筆劃老（潦）草、寫的不好。寫得好時、便放歸。午後亦上學」とある²。次に『上士由山水』を挙げたが、これを使用する段階は『上大夫』の後と考える。まず、『上大夫』と比較すると『上士由山水』の文字が複雑であり、数も多いである。また、明代の葉盛『水東日記』によると、「『上大人、丘乙己、化三千、七十士、尔小生、八九子、佳作仁、可知礼也』。『尚仕由山水、中人坐竹林。王生自有性、平子本留心』。『王子去求仙、丹成入九天。山中方七日、世上已千年』。已上數語、凡鄉學小童、臨仿字書、皆昉於此、謂之描朱」とある³。おそらくこれは學習の前後順序で書かれているものであろう。現代に中國のブログの「遊走雪」という人の「私塾六年」という文によれば、「我七歲啓蒙自十三歲失學、共讀私塾不到六年。任何開蒙學生能夠第一本書都要先從『人之初』開篇。初學習字是用毛筆、先生寫好一二三四五六七八九十字頭、學生然後謀（摹）寫、這叫學寫扁擔字。一次字頭至少謀（摹）寫一個月。二次字頭是謀（摹）寫『上士由山水、中人坐竹林』。三次就要謀（摹）寫多一點壁（筆）畫的『王子去求仙、丹人入九天』とあり⁴、民國時期の彼の習字教育過程を記録している。先に數字から習字をはじめ、一か月後『上士由山水』を練習し、その後、「王子去求仙」を練習したことを記録しているのである。敦煌寫本の中では、數字と『上大夫』の内容が同水準のものと見なされるため、『上士由山水』を使う順序は『上大夫』の後になると考えられる。『千字文』は、文字数も多くかつ複雑である。一定の書寫能力を持っている學郎は、『千字文』を練習し、自分の書道能力を上げ、日常によく使われている書體を把握することができるのである。しかし、このような習字順序は完全に固定されているわけではなく、實際の状況により變化もある。

學郎後に仕事に使うであろう文字も學習しなければならない。次の訓練としては、『正月孟春猶寒』を用いて、時令、挨拶用語、手紙の書き方を習い、『敦煌姓氏雜錄』を用いて、姓氏、姓名を習い、社司轉帖と組み合わせて、社司轉帖の書き方も習い、官職と組み合わせて、歸義軍の官職、僧官の名を習う。『開蒙要訓』及び各雜字類寫本を用いて、行政文書、記帳、記事に使う基礎文字を習う。『開蒙要訓』中の文字数が最も多く、最も複雑である。また、寫本の内容も多く、書かれた字體も書きなれたものであることが多いことから、『開蒙要訓』に對する學習が上記に紹介した寫本の後になると考えられる。

¹ (宋) 陳郁『藏一話映』、載 (明) 陶宗儀等編『說郛三種』之『說郛』卷六十、上海古籍出版社、1988年、911頁。

² (宋) 陳元靚『事林廣記』、『和刻本類書集成』第一輯、上海古籍出版社、1990年、253頁。

³ (明) 葉盛『水東日記』卷十、中華書局、1980年、105-106頁。

⁴ http://blog.sina.com.cn/s/blog_40ea0211010005r0.html。

本論では、識字段階の学習内容とくにその段階的な学習過程について検討を行った。學郎に習字、識字学習に使われた教材と言え、本論で検討した教材以外、他にもあると考えられるが、代表的な寫本を通じて、當時學郎の識字段階の学習過程を見てきた。なお、識字というのは継続的な学習過程である。讀書や書寫する間に識字することもできる。この識字方法も引き続き注目し、今後の研究で検討する予定である。

參考文獻

古籍

- (宋)樓鑰『攻媿集』、『四部叢刊·集部』、民國涵芬樓刊本。
- (漢)應劭『風俗通義』、(宋)劭思『姓解』、王雲五主編『叢書集成初編』、上海商務印書館、1935年。
- (元)李治『敬齋古今註·拾遺』、王雲五主編『叢書集成初編』、上海商務印書館、1935年。
- (清)陸世儀『陸桴亭思辨錄輯要』、王雲五主編『叢書集成初編』、上海商務印書館、1936年。
- (清)王筠『教童子法』、王雲五主編『叢書集成初編』、上海商務印書館、1937年。
- (宋)王溥撰『唐會要』、中華書局、1955年。
- (漢)司馬遷撰、(南朝宋)裴駟集解、(唐)司馬貞索隱、(唐)張守節正義『史記』、中華書局、1959年。
- (漢)班固撰、(唐)顏師古注『漢書』、中華書局、1962年。
- (清)曹寅等奉敕輯『全唐詩』、中華書局、1960年。
- (漢)張奐『誠兄子書』、(唐)歐陽詢撰『藝文類聚』卷二三『鑒誠』、上海古籍出版社、1965年。
- (漢)崔寔著、石漢聲校注『四民月令校注』、中華書局、1965年。
- (南朝宋)范曄撰、(唐)李賢等注『後漢書』、中華書局、1965年。
- (唐)姚思廉等撰『梁書』、中華書局、1973年。
- (唐)魏徵、令狐德棻撰『隋書』、中華書局、1973年。
- (北齊)魏收撰『魏書』、中華書局、1974年。
- (唐)李延壽撰『南史』、中華書局、1975年。
- (五代)劉昫等撰『舊唐書』、中華書局、1975年。
- (宋)歐陽修、宋祁撰『新唐書』、中華書局、1975年。
- (明)宋濂等撰『元史』、中華書局、1976年。
- (清)王琦注『李太白全集』、中華書局、1977年。
- (五代)王定保『唐摭言』、上海古籍出版社、1978年。
- (唐)張鷟『朝野僉載』、中華書局、1979年。
- (明)葉盛撰、魏中平點校『水東日記』、中華書局、1980年。
- (漢)應劭撰、王利器校注『風俗通義校注』、中華書局、1981年。
- (唐)元稹撰、冀勤點校『元稹集』、中華書局、1982年。
- (宋)道原纂『景德傳燈錄』、大藏經刊行會編『大正新修大藏經』冊51、新文豐出版公司、1983年。
- (唐)張彥遠『法書要錄』、人民美術出版社、1984年。
- 朱謙之撰『老子校釋』、中華書局編輯部編『新編諸子集成』(第一輯)、中華書局、1984年。
- (元)脫脫等撰『宋史』、中華書局、1985年。

- (宋) 羅泌『路史』、『影印文淵閣四庫全書』第三八三冊、臺灣商務印書館、1986年。
- (元) 梁益『詩傳旁通』、『影印文淵閣四庫全書』第七六冊、臺灣商務印書館、1986年。
- (元) 謝應芳『龜巢稿』、『影印文淵閣四庫全書』第一二一八冊、臺灣商務印書館、1986年。
- (明) 王世貞『弇州四部稿』、『影印文淵閣四庫全書』第一二八一冊、臺灣商務印書館、1986年。
- (漢) 劉向撰、向宗魯校證『說苑校證』、中國古典文學基本叢書、中華書局、1987年。
- (宋) 陳郁『藏一話腴』、載(明)陶宗儀等編『說郛三種』之『說郛』卷六十、上海古籍出版社、1988年。
- (漢) 史游著、曾仲珊校點『急就篇』、岳麓書社、1989年。
- (宋) 陳元靚『事林廣記』、長澤規矩也編『和刻本類書集成』第一輯、上海古籍出版社、1990年。
- (宋) 正受編『嘉泰普燈錄』、『卍續藏經』冊137、新文豐出版公司、1995年。
- (唐) 房玄齡等撰『晉書』、中華書局、1996年。
- 藤原佐世編『日本國見在書目錄』下冊、(清)黎庶昌校刻『古逸叢書』本、江蘇廣陵古籍刻印社、1997年。
- 『古事記』、東京五洲出版社、1997年。
- (宋) 佚名撰、桂弟子譯注『宣和書譜』、湖南美術出版社、1999年。
- (周) 左丘明撰、(晉) 杜預注、(唐) 孔穎達正義『春秋左傳注疏』、李學勤主編『十三經注疏』、北京大學出版社、1999年。
- (漢) 鄭玄注、(唐) 孔穎達疏、龔抗雲、王文錦審定『禮記正義』、李學勤主編『十三經注疏』、北京大學出版社、1999年。
- (唐) 李綽撰、蕭逸校點『尚書故實』、上海古籍出版社本社編『唐五代筆記小說大觀』(下)、上海古籍出版社、2000年。

論著

- 劉復輯『敦煌掇瑣』、國立中央研究院歷史語言研究所、1925年。
- 中國科學院歷史研究所資料室編『敦煌資料』、中華書局、1961年。
- 張志公『傳統語文教育初探』、上海教育出版社、1962年。
- 尾形裕康『我國における千字文の教育史的研究』(本編)、校倉書房、1966年。
- 天理圖書館編『善本寫真集』第31冊『古冊殘葉』、天理大學出版部、1968年。
- 那波利貞『唐代社會文化史研究』、創文社、1974年。
- 王重民『敦煌遺書總目索引』、中華書局、1983年。
- 小川環樹、木田章義『注解千字文』、岩波文庫、1984年。
- 雷僑雲『敦煌兒童文學』、學生書局、1985年。
- 黃永武博士主編『敦煌叢刊初集』第十五冊、新文豐出版公司、1985年。
- 漢語大詞典編輯委員會漢語大詞典編纂處編纂『漢語大詞典』(第1卷)、上海辭書出版社、

1986年。

王仲榮『崑崙山館叢稿』、中華書局、1987年。

陳祚龍『敦煌資料考屑』、臺灣商務印書館、1987年。

田彰、後藤昭雄、東野治之、三木雅博編著『上野本注千字文注解』、和泉書院刊、1989年。

天秀『千字文綜述』、紫禁城出版社、1990年。

池田温『中國古代寫本識語集録』、東京大學東洋文化研究所、1990年。

中國社會科學院歷史所等編『英藏敦煌文獻（漢文佛經以外部分）』、四川人民出版社、1990—1995年。

東野治之『遣唐使と正倉院』、岩波書店、1992年。

張志公『傳統語文教育教材論—暨蒙書書目與書影』、上海教育出版社、1992年初版、中華書局、2013年（修訂本）。

俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所等編『俄藏敦煌文獻』、上海古籍出版社、1992—2001年版。

趙和平『敦煌寫本書儀研究』、新文豐出版公司、1993年。

周一良、趙和平『唐五代書儀研究』、中國社會科學出版社、1995年。

上海古籍出版社、法國國家圖書館編『法藏敦煌西域文獻』、上海古籍出版社、1995—2005年。

黃徵、張涌泉校注『敦煌變文校注』、中華書局、1997年。

汪泛舟編著『敦煌古代兒童課本』、甘肅人民出版社、2000年。

項楚『寒山詩注』、中華書局、2000年。

郝春文編著『英藏敦煌社會歷史文獻釋録』（第二卷）、社會科學文獻出版社、2003年。

任繼愈主編『國家圖書館藏敦煌遺書』、北京圖書館出版社、2005—2012年。

郝春文、金澄坤編著『英藏敦煌社會歷史文獻釋録』（第四卷）、社會科學文獻出版社、2006年。

伊藤美重子『敦煌文書にみる學校教育』、汲古書院、2008年。

郝春文、趙貞編著『英藏敦煌社會歷史文獻釋録』（第六卷）、社會科學文獻出版社、2009年。

項楚『寒山詩注』、中華書局、2000年。

方廣錫、（英）吳芳思主編『英國國家圖書館藏敦煌遺書』第六冊、廣西師範大學出版社、2011年。

張娜麗『西域出土文書の基礎的研究—中國古代における小學書・童蒙書の諸相—』、汲古書院、2006年。

榮新江、李肖、孟憲實主編『新獲吐魯番出土文獻』（上）、中華書局、2008年。

張涌泉主編『敦煌經部文獻合集』、中華書局、2008年。

朱鳳玉『敦煌俗文學與俗文化研究』、上海古籍出版社、2011年。

張新朋『敦煌寫本『開蒙要訓』研究』、中國社會科學出版社、2013年。

土肥義和『八世紀末期～十一世紀初期 燉煌氏族人名集成—氏族人名篇・人名篇』、汲古書院、2015年。

論文

- 那波利貞「唐鈔本『雜抄』攷一唐代庶民教育史研究の一資料一」、『支那學』10、1942年。
- 尾形裕康「教育上から見た千字文の研究」、『日本學士院紀要』第11卷第3號、1953年。
- 池田温「8世紀中葉における敦煌のソグド人聚落」、『ユーラシア文化研究I』、1965年。
- 藤枝晃「敦煌曆日譜」、『東方學報』（京都）第45號、1973年。
- 台靜農「蔣善進眞草千字文殘卷跋」、『敦煌學』第一輯、1974年。
- 小島憲之「海東と西域：啓蒙期としてみた日本上代文學一斑」、岩波書店編『文學』51(12)、1983年。
- 張金光「論秦漢的學吏制度」、『文史哲』1984年第1期。
- 高國藩「敦煌寫本『太公家教』初探」、『敦煌學輯刊』1984年第1期。
- 東野治之「李暹『注千字文』について」、五味智英、小島憲之編『万葉集研究』第13集、塙書房、1985年。
- 王仲榮「敦煌石室出殘姓氏書五種考釋」、北京大學中國中古史研究中心編『敦煌吐魯番文獻研究論集』第三輯、北京大學出版社、1986年。
- 汪泛舟「『太公家教』考」、『敦煌研究』1986年第1期。
- 張廣達「唐代六胡州等地的昭武九姓」、『北京大學學報（哲學社會科學版）』1986年第2期。
- 李正宇「一件唐代學童的習字作業」、『文物天地』1986年第6期。
- 李正宇「敦煌學郎題記輯注」、『敦煌學輯刊』1987年第1期。
- 王利器「跋敦煌寫本『上大夫』殘卷」、『文獻』1987年第4期。
- 朱鳳玉「敦煌寫本雜抄研究」、『木鐸』12、1988年。
- 劉銘恕「敦煌遺書叢識」、杭州大學古籍研究所等編『敦煌語言文學論文集』浙江古籍出版社、1988年。
- 汪泛舟「敦煌的童蒙讀物」、『文史知識』1988年第8期。
- 符力「關於『千字文』的製作、別本以及對『千字文』傳入日本一事的淺見」、『四川外語學院學報』1989年第3期。
- 王利器「敦煌寫本『上大夫』殘卷跋尾」、『社會科學戰線』1990年第3期。
- 周一良「書儀源流考」、『歷史研究』1990年第5期、第95頁。
- 趙和平「敦煌寫本書儀略論」、中國敦煌吐魯番學會編『敦煌吐魯番學研究論文集』、漢語大詞典出版社、1990年。
- 鄭阿財「敦煌蒙書析論」、『第二屆敦煌學國際研討會論文集』、漢學研究中心編印、1991年。
- 王利器「試論『上大人』的用途」、『河北師院學報（社會科學版）』1992年第4期。
- 郝春文「敦煌寫本社邑文書年代匯考（二）」、『首都師範大學學報（社會科學版）』1993年第5期。
- 姜伯勤「敦煌逸眞讚與敦煌名族」、饒宗頤主編『敦煌逸眞讚校錄并研究』、新文豐出版公司、1994年。
- 王喆「『珠玉抄』成書年代及作者考」、『松遼學刊』（社會科學版）1996年第2期。

陸慶夫「唐宋間敦煌粟特人之漢化」、鄭炳林主編『敦煌歸義軍史專題研究』蘭州大學出版社、1997年。

王利器『『上大夫』備考』、『曉傳書齋集』、華東師範大學出版社、1997年。

汪泛舟『『開蒙要訓』初探』、『敦煌研究』1999年第2期。

楊秀清「淺談唐、宋時期敦煌地區的學生生活—以學郎詩和學郎題記為中心」、『敦煌研究』1999年第4期。

朱鳳玉「敦煌寫本蒙書『上大夫』研究」、『第五屆唐代文化學術研討會論文集』、麗文文化事業公司、2001年。

榮新江「唐五代歸義軍武職軍將考」、『敦煌學新論』、甘肅教育出版社、2002年。

竺沙雅章「敦煌出土『社』文書的研究」、『中國佛教社會史研究』(增訂版)、朋友書店、2002年。

張金光「論秦漢的學吏教材—睡地虎秦簡為訓吏教材說」、『文史哲』2003年第6期。

鄭阿財「敦煌蒙書」、『敦煌與絲路文化學術講座』(第一輯)、北京圖書館出版社、2003年。

小高裕次「東アジア漢字文化圏における識字教育の一例—『千字文』『百家姓』と『新集金碎掌置文』」、『東アジア言語研究』(6)、2003年。

王鐵鈞「王仁獻書說辨疑」、『江西師範大學學報』(哲學社會科學版)第38卷第3期、2005年。

劉長東「論中國古代的習字蒙書—以敦煌寫本『上大夫』等蒙書為中心」、『社會科學研究』2007年第2期。

李肖、朱玉麒「新出吐魯番文獻中的古詩習字殘片」、『文物』2007年第2期。

馮培紅「漢宋間敦煌家族史研究回顧與述評(上)」、『敦煌學輯刊』2008年第3期。

張新朋「若干新認定『千字文』寫卷敘錄及綴合研究」、『敦煌學輯刊』2008年第1期。

張新朋「敦煌寫本『開蒙要訓』研究」、浙江大學博士學位論文2008年。

復旦大學出土文獻與古文字研究中心讀書會「讀水泉子簡『蒼頡篇』札記」、2009年。

張新朋「吐魯番出土『千字文』殘片考」、『文獻』2009年第4期。

陳菊霞「翟使君考」、『敦煌研究』2009年第5期。

伊藤美重子「敦煌の學郎題記にみる學校と學生」、『唐代史研究』第14號、2011年。

海野洋平「敦煌童蒙教材『牛羊千口』史料輯覽」、『一關工業高等專門學校研究紀要』第46號、2011年。

海野洋平「童蒙教材『上大人』の順朱をめぐる：敦煌寫本P.4900(2)・P.3369vに見る『上大人』黎明期の諸問題」、『歴史』第117號、2011年。

海野洋平「敦煌童蒙教材『牛羊千口』校釋—蒙書『上大人』の姉妹篇—」、『一關工業高等專門學校研究紀要』第47號、2012年。

丁志軍「從習字訓蒙到大眾娛樂—論蒙書『上大人』功能的歷史演變」、『湖北民族學院學報(哲學社會科學版)』2012年第2期。

張傳官「談『急就篇』等秦漢字書的性質—與張金光師範商榷」、『辭書研究』2012年第3期。

高啓安「一張據說是『莫高窟藏經洞』照片的考索」、中央文史研究館、敦煌研究院、香港大學饒宗頤學術館編『慶賀饒宗頤先生九十五華誕敦煌學國際學術研討會論文集』、中華書局、2012年。

張新朋「大谷文書中十三則『千字文』殘片之定名與綴合」『敦煌研究』2013年第5期。

王元軍「說說敦煌本『千字文』」、『中國書法』2013年第6期。

徐梓「『上大人』淺說」、『尋根』2013年第6期。

吳喬「從敦煌『上大夫』看唐代民間書寫」、『大眾文義』2013年第10期。

高美林「敦煌『篆書千字文』字形研究」、廣西大學碩士學位論文、2014年。

陳麗萍「日本杏雨書屋藏羽663R號敦煌文書的定名」、『魏晉南北朝隋唐史資料』31輯、2015年。

鄧凱「『上大人』文本傳播中功能與涵義的變遷」、『中南大學學報（社會科學版）』2015年第5期。

張新朋「吐魯番、黑水城出土『急就篇』『千字文』殘片考辨」、『尋根』2015年第6期。

張新朋「東亞視域下的童蒙讀物比較研究—以『千字文』與『開蒙要訓』之比較為例」、『浙江社會科學』2015年第11期。

張新朋「敦煌詩苑之奇葩—敦煌文獻中的『送遠還通達』初探」、「敦煌研究」2016年第5期。

金澄坤「唐五代敦煌寺學與童蒙教育」、金澄坤主編『童蒙文化研究』（第一卷）、人民出版社、2016年。

張新朋「吐魯番出土『千字文』敘錄—中國、德國、英國收藏篇」、金澄坤主編『童蒙文化研究』（第二卷）、人民出版社、2017年。

海野洋平「童蒙教材としての王羲之『皀書論』（『尚想黃綺』帖）：敦煌寫本・羽664ノ二Rに見るプレ『千字文』課本の順朱」、武田科學振興財團杏雨書屋編『杏雨』（20）、2017年。

朱鳳玉「敦煌詩歌寫本原生態及文本功能析論」、『敦煌研究』2018年第1期。

常蓋心「從敦煌寫本看『千字文』在唐五代時期的使用」、金澄坤主編『童蒙文化研究』（第三卷）、人民出版社、2018年。

鄭阿財「敦煌吐魯番文獻呈現的唐代學童詩學教育」、『童蒙文化研究』（第三卷）。

倪健（Christopher M. B. Nugent）「敦煌蒙書中的層累知識」、中國人民大學文學院古代文本文化國際研究中心主編「寫本及其物質性國際研討會」、2018年4月6-7日。

附録

本論に数多くの敦煌識字寫本を對象とする。ここで統計した敦煌寫本に對して簡単に紹介する。

1、S. 264V 卷子

- ①正面：『大佛頂萬行首楞嚴經』卷第六
- ②存 163 行
- ③背面：『付法藏因緣傳』、「上大夫」
- ④存 114 行
- ⑤用紙：縦 26×横 286cm

2、S. 335V 卷子

- ①正面：佛經
- ②存 57 行
- ③背面：佛經（22 行）。「千字文勅員外散騎侍郎」、「千千字」等（10 行）
- ④存 32 行
- ⑤用紙：縦 31.1×横 82.5cm

3、S. 395 卷子

- ①正面：『孔子項託相問書』、識語「天福八年癸卯歲十一月十日淨土寺學郎張延保記」、社司轉帖
- ②存 62 行
- ③背面：社司轉帖、「張延保、曹延」、「戊申年三月十七日立契洪池郷」、「法寶、願梨」、「孔子項託相問」、「曹延德」、「甲辰年」、「開元寺律師法保」、「開運三年丙（946）午歲十一月〇〇淨土寺學仕郎〇〇」、「學郎小興王願昌」、「人名一本」、雜寫等
- ④存 32 行
- ⑤用紙：縦 28.5×横 91.4cm

4、S. 461V 卷子

- ①正面：『大智度論』卷九十
- ②存 29 行
- ③背面：佛經の難字、「千字文勅員外散騎侍」、「千字文勅員外散騎」
- ④存 20 行
- ⑤用紙：縦 25.8×横 45cm

- 5、S. 705 卷子
- ①正面：『開蒙要訓』（「開蒙要訓一卷」と尾題、「𪛗（沉）溺𪛗𪛗（渦泓）」から「𪛗（易）解難忘」まで）、識語「大中五年（851）辛未三月廿三日學生宋文獻誦、安文德寫」、「社司轉」、「開蒙要訓一卷」、社司轉帖、「乾坤覆載」、『開蒙要訓』（「開蒙要訓一卷」と首題、「春花」まで）、「勅歸義軍節度使」等
- ②存 86 行以上
- ③書寫年代：大中五年（851）
- ④背面：社司轉帖、天復八年、雜寫
- 6、S. 747V 卷子
- ①正面：『論語集解』
- ②存 79 行
- ③背面：「月」の習字、「上上上上大夫、丘一（乙）己、化三千、七十二、女」、「天」、「吳良義」、「申年八月廿八日上部落」（Jx. 1319V）、「申年十二月絲綿百姓唐悉索番」、チベット語 1 行、「𪛗𪛗下等奴汜婢婢、下等奴𪛗𪛗」、「酉年正月四日記」、「玉醜奴」、「申年十二月日故記之也、丙申年」等
- ④存 35 行
- ⑤書寫年代：丙申年（816）
- ⑥用紙：横 190.5cm
- 7、S. 865V 卷子
- ①正面：『父母恩重經』、『般若波羅蜜多經』
- ②存 31 行
- ③背面：社司轉帖（3 編）、『敦煌姓氏雜錄』（1 行、「張王李趙、陰薛唐」）
- ④存 9 行
- ⑤用紙：縦 22.5×横 45cm
- 8、S. 1308 卷子
- ①『開蒙要訓』（「開蒙要訓一卷」と尾題、「𪛗𪛗𪛗（炬照輝）盈」から「易解𪛗𪛗（難忘）」まで）
- ②存 79 行
- 9、S. 1153 卷子
- ①『諸雜人名一本』と首題、官職、僧官、姓名等
- ②存 13 行
- ③用紙：縦 30.3×横 47cm

10、S. 1163V 卷子

- ①正面：『太公家教』、識語「庚戌年十二月十六日永安寺學仕郎張順進自手寫記」
- ②存 65 行
- ③背面：「开蒙要訓一卷」、社司轉帖、便麥歷、「太公家教一卷」、『門來善遠』、『正月孟春猶寒』、識語「庚戌年五月一日 \square 進書記」等
- ④存 47 行
- ⑤書寫年代：庚戌年（950）
- ⑥用紙：橫 114.3cm

11、S. 1232V 卷子

- ①正面：『大般若波羅蜜多經』
- ②存 43 行
- ③背面：「上大夫、丘乙己、化三千、七十二、女小生、八九子」、「牛羊千口、舍宅不受」
- ④存 2 行
- ⑤用紙：縱 27.3×橫 75cm

12、S. 1392 卷子

- ①正面：『孔子項託相問書』（82 行）。「孔子」、「庚子庚庚庚」、『敦煌姓氏雜錄』（「張安榮米陰翟康王高薛」、「夫豆粟」、「鄧都頭、木蒙子」（2 行）
- ②存 84 行
- ③背面：社司轉帖（2 編）。「鄧」、「藍」
- ④用紙：縱 29.2×橫 144.78cm

13、S. 1472V 卷子

- ①正面：『天地八陽神咒經』、識語「乙亥歲前四月四日、為亡阿姨師寫此經功德記、法界有情、同霑司福」
- ②存 118 行
- ③背面：「此是願德經卷、戒昌借書寫為記」。「住通」の習字、「一二三四五六七八九十」、「上大夫、丘乙己、化三千、七十二、女心（小）生、八九子」、「羊（牛）羊千口、舍」、當寺轉帖
- ④存 6 行
- ⑤書寫年代：10 世紀前期
- ⑥用紙：縱 25.4×橫 213cm

14、S. 1586V 卷子

①正面：『論語集解』卷第二

②存 31 行

③背面：姓名、「金光明寺學郎張再^四」、「三月、千字文勅員外散」、「社司」、「郎君須立身』等

④存 8 行

⑤用紙：縦 27.5×横 61cm

15、S. 2703 卷子

①正面：『乾元元年（758）七月史張元貞牒』、『天寶八載（749）三月廿二日史令狐良嗣牒』、『敦煌縣效穀等鄉名簿』等。『千字文』（81 行、「光。菓珎（珍）柰李、菜重芥薑。海鹹。騰致雨、露結為霜。金生麗水、玉出岷崗」の習字、各字を 3 から 4 行に書く）

②背面：天寶年間牒文等

③用紙：縦 27.3×横 350cm

16、S. 2894V 卷子

①正面：『四分戒本含注一卷』

②背面：『千字文』（3 行、「千字勅」から「菓珎李柰」まで）、壬申年の社司轉帖（6 編）、「孝經一卷并序」（1 行）、「壬申年正月一日浄土寺南院學士郎安教信、安長子到官樓蘭喏道長坐轉經、僧曹願長、柔（齋）來者」、「開寶悟（五）年（972）癸酉正月廿日浄土寺學士郎辛延晟、曹願長二人等同心一會、更不番悔、記願長、記」等。『社邑の名簿』

③存 70 行

④用紙：縦 29×横 220cm

17、S. 3011V 卷子

①正面：『論語集解』卷第六第七、「^四^四^四^四^四（金光明寺學郎）」、識語「戊寅年十一月六日僧馬永隆手寫論語一卷之耳」

②存 228 行

③背面：「沙州索使君」、「沙州燉煌」、「雜抄」、「今朝到此寺、壁上亭壹字。戊寅年十月十七日僧馬永隆撰」、社司轉帖、地籍、雜寫。『辛酉年十二月神沙鄉百姓李繼昌僱工契』。『詩格一部』、「千字文勅員外」、「社司」、「得人牛還人一馬」、「定兵馬使張弘慶押牙張彦^四」、「軍資庫司」、「伏以今月判支都頭曹住信」、「南無東方」、「大王下手張張」、「之」、「伏」、「大」等の習字

④存 85 行

⑤用紙：縦 28×横 450cm

18、S. 3287 卷子

①正面：『千字文』（41行、「仁慈隱惻」から「焉哉乎也」まで、「千字文」と尾題）、『今日書他智』、『尚想黃綺帖』（『額書論』（5行）、十五願禮佛懺、『六十甲子納音』、『早出纏』、『樂入山』、『樂住山』、『李涉法師勸善文』

②存 83 行

③背面：『吐蕃子年沙州百姓汜履倩等戸籍手實殘卷』。「千字文一卷勅」、『逍遙近道邊』、『尚想黃綺帖』（2行）

④存 46 行

⑤用紙：縦 26×横 162cm

19、S. 3835 卷子

①正面：『太公家教』（93行）、『千字文』（全文、49行、「千字文一卷」と尾題）、『白鳥名』（30行）、識語「庚寅年十二月日押牙索不子自手記耳」

②存 172 行

③書寫年代：庚寅年（930）

④背面：「弟子」の習字、「佛說東方不」、「太平興國九年（984）甲申歲四月二日莫高鄉百姓馬保定賣宅舍契」、「千字文勅員外散」、社司轉帖、「辛卯年十月廿八日」、詩歌、「陰家巷、陽家兒、杜家巷、田家女、雨个」、「法界」等

⑤存 46 行

⑥用紙：縦 30.5×横 259cm

20、S. 3877 卷子

①正面：葬經、社司轉帖、「丙辰年五月十一日」、「緇門百歲篇」、「病得除」、「搜神記一卷、太公家教一卷、孝經一卷、百鳥名一卷、茶酒一卷」、甲寅年五月廿八日龍鄉百姓張納鷄僱工契、「千字文勅員外散騎侍郎周興嗣次韻、天地玄、宇宙洪」、賣地契、社司轉帖等

②存 31 行

③背面：社司轉帖、葬經、乾寧四年（897）丁巳歲正月廿九日平康鄉百姓張義全賣舍契、天成貳年（902）壬戌歲赤心鄉百姓曹大行與令狐進通迴換舍地契、乾寧肆年丁巳歲正月拾貳日平康百姓張義全賣舍契、戊戌年正月廿五日洪潤鄉百姓令狐安定僱工契、丙子年正月廿五日赤心鄉百姓王再盈妻吳賣子契、天復玖年（909）乙巳歲十月七日洪潤鄉百姓安力子賣地契、戊戌年正月洪潤鄉百姓令狐安定請射同鄉女戸令狐什伍地畝狀、『下女夫詞一本』

④存 125 行

⑤用紙：縦 23.8×横 228.6cm

21、S. 3904+S. 4901 卷子

①正面：『韓朋賦』

②存 52 行

③背面：押衙張万千貸織物契抄、「妙法蓮經、妙法蓮華經」、「千字文勅員外散騎侍郎興同」、「新集嚴父孝（教）」、「太公家教一卷余及生逢」、「千字文勅員外散騎侍郎周」、「千字文勅」、「千字文勅員外散騎」

④存 33 行

⑤用紙：S. 3904（縦 30×横 40.6cm）、S. 4901（縦 30.2×横 47.5cm）

22、S. 4106V 卷子

①正面：『佛說法句經一卷』

②存 249 行

③背面：『門來善遠』（2 編）、數字（2 編、「壹貳三肆伍陸柒捌玖拾」）、『上士由山水』（2 編、「今入日（日入）南音」まで）、「上大夫、丘乙己、化三千、七十二、女小生、八九子」、「牛羊千口、舍宅不受、大下于（王下）[首]、申（甲）子乙丑、之夫（乎）者也」、「敦煌姓氏雜錄」（「索翟陳康刁男張」）、姓名等

④存 76 行、各行を 7 から 14 字に書き、字が大きい

⑤書寫年代：10 世紀中後期

⑥用紙：縦 27×横 420cm

23、S. 4443V 卷子

①正面：『阿彌陀經讚』

②存 22 行

③背面：『乾元寺宋荀兒諸雜難字一本』（8 行、官職、姓名、姓氏等）、「妙法蓮華經觀世音菩薩」、「地藏菩薩經十齋日』

④存 15 行

⑤書寫年代：10 世紀後期

⑥用紙：縦 30×横 41.5cm

24、S. 4504V 卷子

①正面：『四分律比丘含注戒本』

②存 173 行

③背面：十願歌、讚大聖眞容詩、敦煌の寺名、郷名、菩薩名、行人轉帖（2 編）、「東南西北」（2 編）、『敦煌姓氏雜錄』（5 行、「張王李趙、陰薛唐鄧。令狐鄭宋、

安康石吉羅、白米史曹何。董閻索韋陽橋蕪（蘇）就韓温高~~條~~雷消燒京荆慕容周武翟除翹郝黑祝孫孔梁盧採桑郭馬景憑（馮）譚寶龍尹吳汜魚范裴杜渾白陳）、『太子成道經抄』、乙未年三月七日押衙龍弘子貸生絹契、乙未年正月一日靈圖寺僧善友貸生絹契、『千字文』（15行、「千文一養（卷）」と首題、「夙興温情」まで）等。發願文、「三界寺僧福員上僕射牒」

④存 149 行

⑤書寫年代：乙未年（935）

⑥用紙：縦 30×横 305cm

25、S. 4747V 卷子

①正面：『新菩薩經一卷』

②存 12 行

③背面：『千字文』（「寒來暑往」まで）

④存 2 行

⑤用紙：縦 30×横 40.2cm

26、S. 4852 卷子

①正面：『千字文』（「殷湯。坐朝問道、垂拱」の習字、各字を 3 行に書く）

②存 22 行

③背面：「尚想黃綺」（4 行）、某寺付僧尼麵蘇歷

④存 19 行

⑤用紙：縦 27×横 65.2cm

27、S. 4948V 卷子

①正面：佛經

②存 38 行

③背面：『千字文』（「驚、圖寫禽獸」から「孤陋」まで）

④存 38 行

⑤用紙：縦 27×横 67.5cm

28、S. 5104 卷子

①正面：『觀世音經』（87 行）。社司轉帖、姓名、『敦煌姓氏雜錄』等（5 行、「社司轉年月日五。張王李、趙日昌、田留住、賀住三、杜安安、姚義分、南無諸大菩薩、張王李~~□□□~~、陰薛唐鄧」）

②存 92 行

③背面：社司轉帖

- ④存 2 行
- ⑤用紙：横 167.64cm

29、S. 5139V 卷子

- ①正面：『佛說無量壽宗要經』
- ②存 110 行
- ③背面：乙酉年六月涼州節院使押衙劉少晏狀抄、『千字文』（4 行、「海鹹河淡、鱗」まで）、社司轉帖、「勅河西國信使金紫光祿大」、『五言贈牛女詩』、親情社轉帖、「報恩寺沙彌善住記」等
- ④存 59 行
- ⑤用紙：縦 31.4×横 157.5cm

30、S. 5431 冊子

- ①『開蒙要訓』（「開蒙要訓一卷」と首題、「追□□□（蹤逐跡）」まで）
- ②存 28 頁、135 行
- ③用紙：縦 10×横 15cm（各頁）

31、S. 5437 冊子

- ①『漢將王陵變』、「開蒙要訓」、僧名
- ②存 19 頁、133 行
- ③用紙：縦 13×横 14cm（各頁）

32、S. 5441 冊子

- ①『捉季布傳文』、「一二三四五六七八九十、上大夫、二」（第 130 行）、『王梵志詩集』、識語「太平興[國]三年（978）戊寅歲四月十日汜孔目學仕郎陰奴兒自手寫季布一卷」
- ②存 30 頁、277 行
- ③用紙：縦 15.5×横 21.5cm（各頁）

33、S. 5449 冊子

- ①『開蒙要訓』（「開蒙要訓一卷」と尾題、「虱、蜂蝶螳螂」から「易解難忘」まで）
- ②存 4 頁、25 行

34、S. 5454 冊子

- ①『千字文』（全文、「千字文一卷」と尾題）

- ②存 16 頁、96 行
- ③用紙：縦 14.1×横 10.5cm（各頁）

35、S. 5463 冊子

- ①『諸雜字一本』（5 行）、『開蒙要訓』（29 行、「開蒙要訓一卷」と尾題、「□（豎）蕨埋槍」から「易解難忘」まで）、識語「顯徳伍年（958）十二月十五日大雲寺學郎」
- ②存 6 頁、35 行
- ③用紙：縦 14.9×横 10.5cm（各頁）

36、S. 5464 冊子

- ①「金剛經讚」、庚辰年十月十六日赤心郷百姓契約、「之大天子之之」、『開蒙要訓』（5 行、「開蒙要訓一卷」と首題、「松竹冬青、霧」まで）、『開蒙要訓』（143 行、「開蒙要訓一卷」と首題、「鴻鸛□□（鳳凰）まで）、『金剛經讚』、「懺悔夫輪懺悔」、「己卯年十月十三日」
- ②存 23 頁、161 行
- ③用紙：縦 12.5×横 14.7cm（各頁）

37、S. 5467 冊子

- ①『妙法蓮華經』、『六字千文』（「六字千文」と首題、「梁遣（帝）乃付周興」から「衆水海鹹河炎（淡）」まで）、吳、汜住興、願盈等
- ②『六字千文』存 3 頁、13 行
- ③用紙：縦 15×横 10.5cm

38、S. 5513 卷子

- ①正面：『開蒙要訓』
- ②存 27 行
- ③背面：『開蒙要訓』、『送遠還通達』（5 行）
- ④存 13 行
- ⑤用紙：縦 15×横 38.1cm

39、S. 5584 冊子

- ①識語「後唐清泰貳年（935）乙未歲二月十五日連臺寺比丘願丞略述寫記」、『開蒙要訓』（47 行、「開蒙（蒙）要訓一卷」と首題、「衣裳疊襪」まで）、患文
- ②存 17 頁、88 行
- ③用紙：縦 15×横 11cm（各頁）

40、S. 5592 冊子

- ①正面：『千字文』（「切磨箴規」から「俯仰廊」まで）
- ②存 10 頁、61 行
- ③用紙：縦 13.7×横 14cm（各頁）

41、S. 5594 冊子

- ①『開元釋教大藏經目錄』、『千字文』（12 行、朱筆、「天地玄黃」から「鱗潜羽翔、龍」まで）（特に「潜」、「羽」、「翔」、「龍」が經名の上に書かれているころから、『千字文』で目録番號が制作されていたと考える）
- ②存 12 頁、72 行
- ③用紙：縦 15×横 10.5cm（各頁）

42、S. 5631V 卷子

- ①正面：庚辰年正月十四日社司轉帖、『佛經戒律』
- ②存 85 行
- ③背面：『天生淳善』、「上大夫、丘乙己、化三千、七十二、女小生、八九子」、「牛羊千口、舍宅不售、大王下手、甲子乙丑、之夫（乎）者也」、「一二三四五六七八九十百千万億」
- ④存 10 行
- ⑤書寫年代：庚辰年（980）
- ⑥用紙：縦 21.5×横 142.5cm

43、S. 5657V 卷子

- ①正面：『四威儀』、『卧輪禪師偈』
- ②存 14 行
- ③背面：『千字文』（「霜。金生麗水、玉出崑」の習字、各字を 2 行に書く）、「丑年三月十九日於龍興寺鍾樓倉付正額僧糧具名如後」
- ④存 15 行
- ⑤用紙：縦 34×横 26.5cm

44、S. 5711 卷子

- ①正面：『千字文』（「千字文一卷」と首題、「蘇（藉）甚無竟」まで）
- ②存 19 行
- ③背面：『今朝寫盡天者名』、龍勒鄉百姓王再慶狀、『郎君須立身』、『此院有個劉法和』、「文」「之」の習字

- ④存 10 行
- ⑤用紙：縦 29.7×横 33.6cm

45、S. 5723 卷子

- ①正面：『千字文』（「徳建名立、形端表正。空谷傳」の習字、各字を 1 から 2 行に書く）
- ②存 12 行
- ③背面：『千字文』（「空谷」）、書儀、雜寫等
- ④存 16 行
- ⑤用紙：縦 29×横 27cm

46、S. 5754V 卷子

- ①正面：『新集文詞九經抄』
- ②存 1 頁、14 行
- ③背面：「開蒙要訓一卷」、「上大夫」、「丑年」
- ④存 3 行
- ⑤用紙：縦 31.4×横 23.2cm

47、S. 5787 卷子

- ①正面：『千字文』（「姿、工嘸」、「布射遼丸、嵇琴阮」の習字、各字を 2 行に書く）
- ②存 18 行
- ③背面：『千字文』（「阮嘯。恬筆倫紙、釣巧任」の習字、各字を 2 行に書く）
- ④存 17 行
- ⑤用紙：縦 29.7×横 33cm

48、S. 5814 卷子

- ①『千字文』（「誰共（垂拱）平章、愛」まで）
- ②存 12 行
- ③用紙：横 53.34cm

49、S. 5829 卷子

- ①『千字文』（「寒來暑往」から「乃服衣裳、推」まで）
- ②存 5 行
- ③用紙：縦 27.5×横 9.9cm

50、S. 5961 卷子

①正面：『新合六字千文』（「新合六字千文一卷」と首題、「鍾鍊撰集千字文、唯擬教訓童男」から「輜攸畏」まで）

②存 71 行

③背面：地畝籍、「赤心郷百姓」、「癸酉年十一月 \square 日龍興」等

④存 5 行

⑤用紙：縦 27×横 137cm

51、S. 6019V 卷子

①正面：『御注孝經』

②存 10 行

③背面：「夫大丘」

④存 2 行

⑤用紙：縦 26.7×横 25cm

52、S. 6128 卷子

①正面：『開蒙要訓』（「廠商（廂）扉板」から「周迺遮 \square （防）」まで）

②存 8 行

③用紙：縦 16.7×横 13cm

53、S. 6131+S. 6224+ \square x. 4799 卷子

①『開蒙要訓』（「開蒙要訓一卷」と首題、「賞賚 \square 口（功勳）」まで）

②存 10 行

54、S. 6173V 卷子

①正面：『太公家教』

②存 47 行

③背面：『千字文』（「長。化被草木、頼及萬方。蓋此身髮、四大五常。恭惟鞠養、豈敢毀傷。女慕貞潔、男效才良。知過必改、得能莫忘。罔談彼矩（短）、靡恃己場（長）。信」の習字、各字を 1 から 2 行に書く）

④存 51 行

⑤用紙：縦 28.2×横 15.4cm

55、S. 6606V 卷子

①正面：『妙法蓮華經』

②存 482 行

③背面：「上大夫、丘乙己、化三千、七十士、女小子」

④存 4 行

⑤用紙：横 853.44cm

56、S. 6960V 卷子

①正面：『佛説佛母經』、『佛説善惡因果經』

②存 188 行

③背面：「佛説阿彌陀經」、「如具」、識語「乙酉年五月十五日夫人西宅索奴子」、
「佛説八陽神咒經」、「上大夫、丘乙己、化三千、[七]十二、女少（小）生」、
「奴子」、「社司」。「大王并諸」

④存 8 行

⑤書寫年代：乙酉年（925）

⑥用紙：横 227.3cm

57、S. 8197V 卷子

①『千字文』（13 行、「玄黃」から「玉出」までの習字、各字を 4 回から 8 回
に書く）。「千字文勅員外散」（1 行、各字を 2 回に書く）。靈修寺尼菩提意為役
事上僧正狀（10 行）

②存 24 行

③用紙：縦 31×横 46.5cm

58、S. 8668V 卷子

①正面：「經」

②存 1 行

③背面：「□□夫、丘乙己、化化三千、七十二、女小生、八九子」、「牛羊」（硬
筆）

④存 3 行

⑤用紙：縦 26×横 11cm

59、S. 9448+S. 9449+S. 9470 卷子

①正面：『開蒙要訓』

②存 9 行

③背面：『開蒙要訓』

④存 7 行

60、S. 9988V 卷子

①正面：亡僧文

②存 11 行

- ③背面：『千字文』（1行、「師火帝、鳥官人皇、始」）、雜寫
- ④存2行
- ⑤用紙：縦16.4×横15.2cm

61、S. 10275 卷子

- ①正面：『正月孟春猶寒』
- ②存4行
- ③背面：「千字文、勅員外散騎待（侍）郎周興□（嗣）。□（天）地玄黃、宇宙洪荒。日月」、行人轉帖
- ④存6行
- ⑤用紙：縦20×横10.35cm

62、S. 11421+S. 12173+S. 12458A

卷子

- ①『千字文』（「育」、「黎」、「首」、「雨」の習字、各字を1行に書く）
- ②存5行

63、S. 12144A 卷子

- ①正面：『千字文』（「律呂」の習字、各字を2行に書く）
- ②存3行

64、S. 12492 卷子

- ①「千字文勅員外散」
- ②存1行
- ③用紙：縦26×横20.7cm

65、P. 2059V 卷子

- ①正面：『三階佛法』卷第三
- ②背面：『千字文』（「海鹹河淡、鱗」まで）、天福伍年（940）庚子歲正月一日
- ③存8行
- ④用紙：縦27-27.5×横703.6cm

66、P. 2178V 卷子

- ①正面：『戒疏』
- ②存458行
- ③背面：『佛說灌頂章句拔除過罪生死得度經』燃燈文、『般若波羅蜜多心經疏』

『大寶積經菩薩見實會第十六之五緊那羅授記品第十一』 齋琬文「上大夫兵(丘) 大大兵(丘) 乙」

④存 443 行

⑤用紙：縦 29.5×横 665.5cm

67、P. tib. 2219 卷子

(元番號 P. 2415P5) ①正面：「 (化) 三千、七十二、女小生、八九子」、「牛」、チベット語
②存 3 行

③背面：「坐竹林王」、「張之中」(硬筆)

④存 2 行

⑤用紙：縦 26.2×横 10cm

68、P. 2249V 卷子

①正面：『大般若波羅蜜多經』卷第二百卅三

②背面：「大大大大目乾連神第一」、「潤月、正月、一日、二日、三日、四日、五日、六日、七日、八日、九日」、「佛說閻羅王授記四衆預修生七齋往生淨土經」、「成都府大慈沙門藏川述讚、如來臨」、「惠惠惠德德德」、「開蒙要訓一卷乾坤覆」の習字、「全子張押衙」、「大目乾連神通第一」、「癸未年正月一日立契」、「壬午年正月一日慈惠鄉百姓康保住僱工契」、「太公家教壹卷」、「王梵志書集壹卷」、甲子紀年、『悉達太子修道因緣』等

③存 59 行

④用紙：縦 26.5-27×横 288.1cm

69、P. 2331V 卷子

①正面：『比丘含注戒本并序』

②存 123 行

③背面：『敦煌姓氏雜錄』(7 行、「張王李趙、陰薛唐鄧、令狐正等。安康石必(平)羅、白米吏(史)曹何…」)、社文、願文、捨施文、五臺山贊文、雜寫、佛名經、便麵歷

④存 59 行

⑤用紙：縦 30.7-31.3×横 168.6cm

70、P. 2457V 卷子

①正面：『閱紫錄儀三年一説』、識語「開元廿三年太歲乙亥九月丙辰朔十七日丁巳河南府大弘道觀」等

②存 97 行

③背面：『千字文』（「玉出崑崗」まで）

④存 6 行

⑤用紙：縦 24.9×横 181.3cm

71、P. 2487 卷子

①正面：『開蒙要訓』（2 行、「開蒙要訓一卷」と首題、「春花開艷、夏」まで）
『開蒙要訓』（全文、74 行、「開蒙要訓一卷」と首題、尾題）

②存 76 行

③背面：「乾坤覆載、日月光明」、「大」、「八節」、「勅歸」、「龍興寺學☒」、「陰☒
☒便麥」、「開蒙要訓一卷」等

④存 14 行

⑤用紙：縦 29.4-30.2×横 139.4cm

72、P. 2545V 卷子

①正面：『孝經』

②存 61 行

③背面：「開蒙」、姓名、社司轉帖、「同光三年（925）乙酉」

④存 4 行

⑤用紙：縦 28.8-29.8×横 101.7cm

73、P. 2555 卷子

①正面：『詩文集』、「千字文勅員外、難鑑鍋煮鏃」（1 行）

②背面：『詩文集』、『宣示表』

③用紙：縦 27.4-28.3×横 629.5cm

74、P. 2564V 卷子

①正面：『晏子賦』、『齟齬新婦文』、『太公家教一卷』

②存 191 行

③背面：『佛頂尊勝陀羅尼經略抄』、『百行章疏』、『上大夫』（全文、第 52、53、
54、146、149、150、151 行）、「牛羊千口、舍宅」（第 53 行）、「千字文員外」
（第 109 行）、「千字文」（第 177 行）、『新合孝經皇帝感詞一十一首』、『聽唱張
騫一新歌』等。「辛巳年二月十日盧博士付生絹壹匹、長裁衣尺量得三丈四尺、
福（幅）壹尺柒寸三☒」、「乙酉年五月八日立契永安寺王定長白羊」、「乙酉年足
羊人程長☒受記耳」

④存 186 行

⑤書寫年代：乙酉年（925）

⑥用紙：縦 29.9-30.4×横 285.9cm

75、P. 2578 卷子

①正面：『開蒙要訓』（全文、「開蒙要訓一卷」と首題、尾題）、識語「天成四年（929）九[月]十八日燉煌郡學仕郎張」

②存 112 行

③書寫年代：天成四年（929）

④背面：文書、「右廂馬步都押衙銀青光祿大夫檢校」、「開蒙要訓、乾坤覆載」、「經經」等

⑤存 7 行

⑥用紙：縦 29.6-30.1cm

76、P. 2588 卷子

①正面：『開蒙要訓』（57 行、「開蒙要訓一卷」と首題、「餽餼資料」まで）、亡文、燃燈文、社齋文

②存 76 行

③背面：佛堂、嘆像、慶經文、慶幡文、造彌勒大像發願文

④存 106 行

⑥用紙：縦 28.7-30.1×横 201.7cm

77、P. 2633 卷子

①正面：『斷嗣新婦文』、『正月孟春猶寒』、『雜抄』、『宣宗皇帝御製勸百寮』、『酒賦』、『崔氏夫人訓女文』、『楊滿山詠孝經壹拾捌章』。識語「正月孟春猶寒一本、書手判官汜員昌記」、「辛巳年五月五日汜員昌、龍賓上」

②存 106 行

③背面：燃燈文、「酒賦一本、江州刺史劉長卿」、「第三阿羅漢敬奉佛勅不入涅槃久住世間」、「丑撻閣梨」、「正月孟春猶」、「太公家教一卷」、「辛巳年十二月壹日立」、「辛巳年二月十三立契慈惠鄉百姓康不子…」、「郎曰一千僧、住在寺山林、百鳥同科宿、相看兒兄弟、趙與尋何行」、「郎時有個靈山寺、有三百僧、壹歌和尚、五十个上捉弟子、二百五十个散行僧」、社司轉帖等。識語「壬午年正月九日淨土寺南院學仕郎[印]」、「新婦文壹卷并」、「孝經卷并矛（序）孝經孝大太太大大大」、「南無章花來向」、「第三阿漢」、便麥歷、契約等

④存 52 行

⑤書寫年代：辛巳年（922）と壬午年（923）

78、P. 2647V 卷子

①正面：『大乘無量壽宗要經』、「李加興寫」

②存 120 行

③背面：『晏子賦』(6 行)、『五更轉』(8 行)、『千字文』(5 編、第 1 編 9 行「殿盤鬱鬱樓」まで、第 2 編 2 行「辰宿列章(張)九」まで、第 3 編「千千字字文文勅勅員員外外散散綺綺(騎騎)」、第 4 編「千字文勅勅員外散綺(騎)侍郎周興嗣韻」、第 5 編「天地玄黃、宇宙」まで(各字を 2 行に書く)

④存 77 行

⑤用紙：縦 30.9-31.9×横 175.6cm

79、P. 2667V 卷子

①正面：『算書』

②存 61 行

③背面：大順三年(892)十二月社司轉帖、都頭知宴設使梁幸德狀(2 件)、赤心郷百姓索番番狀、「大順年正月李文忠」、『千字文』(10 行、「靡恃己長」まで)

④存 33 行

⑤用紙：縦 28.5-29.2×横 78.4cm

80、P. 2677p1 卷子

①『千字文』(「散騎」から「崑崙、劍」まで)

②存 5 行

81、P. 2717+㊦x. 5260+㊦x. 5990+㊦x. 10259

卷子

①正面：『字寶碎金』

②存 198 行

③背面：『開蒙要訓』(72 行、「雪、雲雨蔭(陰)晴」から「萬國」までの習字、各字を 1 から 2 行に書く)、『開蒙要訓』(34 行、「開蒙要訓一卷」と首題、「腫焮肌膚」まで)、「丁卯年五月廿八日酉時、北方三處頻頻現雷光、至廿九日天明則息不現也。已後不知何事記知、後定數日月為準則也」、『開蒙要訓』(32 行、「開蒙要訓一卷」と尾題、「儒癡」まで)

④存 140 行

⑤用紙：P. 2717 縦 26.8-28.3×横 354.2cm

82、P. 2738V 卷子

①正面：『太公家教』

②存 119 行

③背面：「千字文、勅員外騎待（侍）郎」、「千字勅」、『尚想黃綺帖』（2編）、「千字文、勅」、牒文の習字、『正月孟春猶寒』（全文）、社司轉帖（4編）、「千字文勅員、千字文勅員外」、『學問當時苦』、『送遠還通達』、『沉淪深浪波』、敦煌の寺名、郷名、蘭若の名、「上大夫」、「上大夫、丘乙己、化三千、七十二、女囧（小生）、女小生、八九子」、「牛囧（羊）」、識語「咸通十年己丑六月八日男文英、母因是」等

④存 114 行

⑤書寫年代：咸通十年（869）

⑥用紙：縦 24.7-25.9×横 228.2cm

83、P. 2759+P. 2771+P. 4066V 卷子

①正面：『太上一乘海空智藏經』卷三『法相品』

②背面：『千字文』（8編）。第1編19行、「近恥」から「焉哉乎也」まで。第2編11行、中間欠落、「焉哉乎也」まで。第3編8行、「吊民伐罪」まで。第4編35行、「悅感武丁」まで。第5編6行、「悅感武丁」まで。第6編2行、「天地」まで。書儀6行。第7編2行、「天地玄」まで。第8編2行、「寒」まで

③存 88 行

④用紙：縦 24.9-25.2×横 118.7cm

84、P. 2769V 卷子

①正面：某寺上座帖（8行）。「尚想黃綺意想」、謹「請西南方經足山頗羅賓頭盧上座、和尚」（2回）、「勅河西歸義軍張郎度使」等

②存 12 行

③背面：「謹請西南方經足山頗羅賓頭盧上座、和尚」（2回）、「官有處分人各」、「應管行人渠人帖」、「千字文勅員外散騎侍郎周興嗣」、「千字文」（「辰宿列張、寒」まで）、行人轉帖、姓名、「盈」、「懷」、「見」の習字等

④存 12 行

⑤用紙：縦 29.7-29.9×横 21.6cm

85、P. 2803V 卷子

①正面：天寶十載敦煌縣差科簿、天寶九載八月廿七日燉煌縣史楊元暉牒、天寶九載八月廿八日至九月十八日敦煌郡倉納穀牒。景福二年二月押衙索大力牒、押衙張良眞牒、願文、詩歌、大唐中興三藏聖教序、布薩唱道文、『開蒙要訓』（3行、「賓奏設伎樂酣觴飲囧髮」）

②背面：『深密解脫要略』

③用紙：縦 28.1-29.3×横 882.2cm

86、P. 2825p1 卷子

①「字（千字）文（勅）員外散騎」

②存 1 行

87、P. 2888 卷子

①正面：『千字文』（「安定薦誠美」から「俗並」まで）

②存 38 行

③背面：「千文一本張」、「千字文勅員外散騎」

④存 2 行

⑤用紙：縦 29.3-29.8×横 63.2cm

88、P. 2896V 卷子

①正面：『大乘密嚴經』

②存 148 行

③背面：『善財譬喻經』、「于闐使臣上于闐朝廷書」、詩歌（于闐語）。「上士由山水」、「從德」、「侯司空」、「夫聞」、「太子」、「勅」等（漢語）

④用紙：縦 26-26.2×249.9cm

89、P. 2995 卷子

①『敦煌姓氏雜錄』（12 行、「（張）王李趙、天下不少、陰薛唐鄧、（令）狐正等。安康石平羅、白米（史）曹何…」）、『沙彌天生道理多』七言詩

②存 15 行

③用紙：縦 29.3-29.9×横 42-42.5cm

90、P. 3029 卷子

①正面：『開蒙要訓』（「開蒙要訓一卷」と首題、「（針縷）（綴）」まで）

②存 24 行

③背面：「開蒙要訓一卷」、「夫人阿郎太保司空」、書儀、「金光明最勝王經」、「庚子年三月七日修鍾樓經樓抄經謹具名目如後」等

④存 30 行

⑤用紙：縦 31.5×横 44.5cm

91、P. 3054 卷子

①正面：『開蒙要訓』（全文、「開蒙要訓一卷」と首題、尾題）、識語「維大唐天福叁年（938）歲次己亥九月五日張富郎書也」

②存 96 行

③書寫年代：己亥年（939）

④背面：「維大唐天福叁年（938）歲次己亥五月六日張富郎自首之耳」、『宋家大門西面開』、『緇門百歲篇』、『國師唐和尚百歲書』、『男兒發憤見（建）功勳』、『癸亥年十月廿八日』、『維大晉天福伍年辛丑歲』、『再盈開蒙要訓（訓）一養（卷）』、『維大晉天福伍年歲次庚子七月』等

⑤存 26 行

⑥用紙：縱 29.2-29.9×橫 203cm

92、P. 3054p3 卷子

①『千字文』（「浮渭」據涇、宮殿）、（仙靈）、丙舍傍）

②存 2 行

93、P. 3062 冊子

①『千字文』（「列張」から「謂語助者」まで）

②存 18 頁、106 行

③用紙：縱 15-15.2×橫 10.3cm(各頁)

94、P. 3070V 卷子

①正面：『諸經要抄』

②存 88 行

③背面：社司轉帖（4 編）、『敦煌姓氏雜錄』（3 行、「張王趙、陰薛唐鄧、令狐正等。安康石必（平）羅、白米史曹何。柳後（侯）齊程杜橋屈韓吳高談汜范禁（樊）龍高通」）、『諸星母陀羅尼經』（25 行）

④存 66 行

⑤書寫年代：乾寧三年（897）

⑥用紙：縱 27.5×橫 142.5cm

95、P. 3102 卷子

①正面：『開蒙要訓』（「寐、憤悶煩情」から「雕」鑿刻鏤、剗まで）

②存 37 行

③背面：『孔子項託相問書』、『勅河西節度使牒』、『某社支麵名録』、『算書』

④存 24 行

⑤用紙：縱 28.8×橫 88.5cm

96、P. 3108 卷子

①正面：『千字文』（全文、「千字文一卷」と尾題）

②存 46 行

③背面：「庚辰年十二月廿日金光明寺僧惠員、惠進、惠_□」、便麥歷等。「甲戌年正月」、『千字文』（5行、「始制」まで）、「青清河邊草、猶如水上魚。界如不學問、如若一頭鳥」、「文書皆手記、趙勝佳寫千文一卷、押衙申潤昌書機（記）」等

④存 28 行

⑤用紙：縦 30.2-30.7×横 72.4cm

97、P. 3114 卷子

①正面：「千字文勅員外散騎侍郎」（各字を2行に書く）

②存 20 行

③背面：齋文

④存 18 行

⑤用紙：縦 30×横 43.2cm

98、P. 3145V 卷子

①正面：戊子年閏五月社司轉帖

②存 17 行

③背面：「上大夫、丘乙己、化三千、七十二、女小生、八九子」、「牛羊万口、舍宅不售、甲子乙丑、大王下首、之乎者也」、『上士由山水』（全文）、『黄金千万斤』、職官、姓名、僧官、敦煌鄉名、『敦煌姓氏雜録』（張王李趙、陰薛唐。安康石吉羅、白米史曹何…）

④存 20 行

⑤書寫年代：戊子年（988）

⑥用紙：縦 30.1-30.4×横 41.4cm

99、P. 3147 卷子

①正面：『開蒙要訓』（「開蒙要訓一卷」と首題、「_□_□_□_□（腕抓指拇）」まで）

②存 30 行

③背面：雜寫

④存 4 行

⑤用紙：縦 26.8-27.8×横 59.7cm

100、P. 3166V 卷子

- ①正面：禮懺文
- ②存 30 行
- ③背面：『開蒙要訓』（2 行、「開蒙要訓一卷」と首題、「藜林」まで）、『開蒙要訓』（四行、「開蒙要訓一卷」と首題、「霹靂」まで）、「辛亥年五月十八日」、「庚戌年十二月二日」等
- ④存 24 行
- ⑤用紙：縦 29.5-30×55 横 cm

101、P. 3168V 卷子

- ①正面：『女人百歳篇』
- ②存 22 行
- ③背面：『千字文』（6 行、「菜重芥薑」まで）、佛經の習字
- ④存 24 行
- ⑤用紙：縦 30.2×横 43cm

102、P. 3170 卷子

- ①正面：『千字文』（「静情逸」から「焉哉乎也」まで、「千字文一卷」と尾題）、識語「田歳三月十九日顯徳寺學士郎張成子書記也」
- ②存 35 行
- ③背面：「金光明寺」
- ④存 1 行
- ⑤用紙：縦 30.2×横 78.2cm

103、P. 3189 卷子

- ①正面：『開蒙要訓』（「開蒙要訓一卷」と尾題、「口田（調適）から「易解難忘」まで）、識語「三界寺學士郎張彦宗寫記」、「聞道側書難、側書實是難。側書須側立、還須側側立看」等
- ②存 30 行
- ③背面：「開蒙」、「張延進」等
- ④存 5 行
- ⑤用紙：縦 29×横 66.3cm

104、P. 3197V 卷子

- ①正面：『捉季布傳文』
- ②存 195 行
- ③背面：書儀、五言詩、七言詩、天福伍年庚子歳便麥歷等。「新撰時務纂集珠

玉要略抄一卷、聖教伎術院學士燉煌禮生翟奉達、「維大宋乾[德]四年歲次丙寅六月十七日大王夫人出南門巡邊」、「我是大羅天上女」、「南無」の習字、『敦煌姓氏雜錄』(2行、「張王李趙、陰薛堂(唐)鄧、令狐宋、安康石吉羅、白米史曹何。柴閻孔陳郭馮除馬田楊賈汜吳杜」)等

④存 85 行

⑤書寫年代：乾德四年(966)

⑥用紙：縱 27.9-28.3×橫 389.2cm

105、P. 3211 卷子

①正面：『王梵志詩』卷第二

②存 154 行

③背面：『千字文』(47行、「飛驚」から「焉哉乎也」まで)、識語「軋(乾)寧三年歲丙辰二月十九日學士郎汜賢信書記之也」、社司轉帖、「維大唐軋(乾)貳年乙卯歲三月十六日靈圖寺學郎書記之也」、『開蒙要訓』(「麩麵篩麩」)、「學郎大歌張富進」、「學郎大歌宋潤寧」、「千字文、勅員外散騎侍」、「丙戌年正月」、雜寫

④存 86 行

⑤書寫年代：乾寧三年(896)

⑥用紙：縱 26.3×橫 228.3cm

106、P. 3211p7、p8、p9 卷子

①『人名目一本』

②存 5 行

107、P. 3211p10 卷子

①『千字文』(「弗離」から「背芒(邛)」まで)

②存 3 行

108、P. 3243+Дx. 19083 卷子

①正面：『開蒙要訓』(「開蒙要訓一□(卷)」と尾題、「慳惜」から「易□(解)難妄(忘)」まで)

②存 72 行

③背面：チベット語、姓名。「索良義」、「開蒙要始始」等

④漢字存 15 行

⑤用紙：縱 26.7×橫 187.2cm

109、P. 3243p12 卷子

①「千字文勅員外散」

②存 1 行

110、P. 3243p13 卷子

①『千字文』（「史」、「魚」の習字）

②存 8 行

111、P. 3305V 卷子

①正面：『論語卷第五』「今朝悶會了、更將愁來對。好酒沽五升、送愁千理（里）外」、「學生李段段書一卷」（86 行）。『可連學生郎』、『寫書不飲酒』等（7 行）

②存 95 行

③背面：「甲子乙丑_今、丙寅丁卯_火」、「_{（咸）}通九年閏十一月十八日書_{（記）}」、「社司」、『今朝悶會了』、「勅」、『詩一首七言・男兒屈滯不須論』（4 編）、社司轉帖。『千字文』（1 行、多仕寔寧、晉楚更霸、趙魏困橫、假途滅）、「正月孟春漸暄」、「可連學生郎」

④存 35 行

⑤用紙：縦 29.2×横 171.2cm

112、P. 3311 卷子

①正面：『春秋正義永徽四年二月廿四日抄寫題記』

②存 19 行

③背面：『開蒙要訓』（「開蒙要訓一卷」と首題、「_{（浮泛流停）}」まで）、「沙彌寶宣」、「靈圖大寺面南開、千羅寶蓋滿來」

④存 11 行

⑤用紙：縦 27.2×横 33.6cm

113、P. 3332 卷子

①正面：『般若波羅蜜多心經』（7 行）。僧名、「千字文勅員外」（2 編、2 行）

②存 11 行

③背面：迴施文

④存 19 行

⑤用紙：縦 30.7×横 43cm

114、P. 3369V 卷子

①正面：『孝經』（82 行）。識語「乾符三年十月二十日學生索什德書卷書_{（記）}」

之也」、「咸通十五年五月八日沙州魯仲、索什德、索康七」、姓名（主に索氏である）（6行）

②存 88 行

③背面：『敦煌姓氏雜錄』（2行、「陰薛唐鄧、令狐正等、張王李趙、陳馬梁宋汜侯康索宗就程翟左右劉吳武」）、姓名（主に索氏である）、「上上夫夫己」、「上☒（上）大大夫夫丘丘□□（乙乙）☒（己）□□□□（己化化三）☒☒（三千）千七七七十☒☒（二二）女女小小生生八八九九子子牛牛☒☒（羊羊）万万口口☒☒☒☒（舍舍宅宅）不不受受甲」、「社司」の習字等

④存 22 行

⑤書寫年代：乾符三年（876）

⑥用紙：縦 28-30.5×横 177.5cm

115、P. 3369p13 卷子

①正面：『千字文』（「夙」、「興」の習字、各字を2行に書く）

②存 4 行

③背面：『千字文』（「莫」、「忘」、「罔」の習字、各字を2行に書く）

④存 5 行

116、P. 3391V 卷子

①正面：『雜字』

②存 58 行

③背面：『千字文』（5行、「玉出崑崗」まで）、結壇散食咒、僧名録、法會雜記。社司轉帖、丁酉年二月一日契、丁酉年四月契

④存 43 行

⑤用紙：縦 28.8×横 132.2cm

117、P. 3408+Дx. 4907 卷子

①正面：『開蒙要訓』（「開蒙要訓一卷」と首題、「☒☒□□（柯柯樞柄）」まで）

②存 43 行

③用紙：P. 3408 縦 30×横 69cm

118、P. 3416 卷子

①正面：星占書（4行）、『孝經』（98行）、『千字文』（全文、52行、「千字文一卷」と首題）

②存 154 行

③背面：願文

- ④存 18 行
- ⑤用紙：縦 28×横 229.4cm

119、P. 3486 卷子

- ①正面：『開蒙要訓』（「（姦邪憩惡）」から「頭額頰（頤）」まで
- ②存 20 行
- ③背面：乾符三年（876）納物歴、乾符貳年至方等道場題記、辟邪巫術、申年三月便麥歴、乙未年三月便麥歴、釋門文范、煩人讀自書偈
- ④存 22 行
- ⑤用紙：縦 27.5×横 76.8cm

120、P. 3558V 卷子

- ①正面：『王梵志詩』、識語「亥年正月十七日三界寺」
- ②存 103 行
- ③背面：『敦煌姓氏雜録』（10 行、「張王李趙、張王李趙、陰陽安汜宋范田就吳祝郭、崔彭龐薛龍泊譚康柳姚閻闕曹彭穆…」）、社司轉帖、雜寫
- ④存 13 行
- ⑤用紙：縦 29.5-30×横 211.5cm

121、P. 3610 卷子

- ①正面：『開蒙要訓』（全文、「開蒙要訓一卷」と首題、尾題）
- ②存 85 行
- ③背面：「之人大王入」
- ④存 1 行
- ⑤用紙：縦 30×横 168.6cm

122、P. 3614 卷子

- ①『千字文』（「陳根委翳」まで）
- ②存 46 行
- ③用紙：縦 31-31.5×横 101-103.5cm

123、P. 3616V 卷子

- ①正面：『春秋後語・趙語上』
- ②存 190 行
- ③背面：牒文の習字、便麥歴、『孝經一卷』、『千字文』（「騎侍郎周興嗣次韻天地玄黃、宇宙荒、日月、為霜、金生麗水、玉出、霜霜、調調調陽雲騰」）、書儀、

『郎君須立身』、丁亥年社司轉帖、『春秋後語一卷』、『雜字』、「千字文、勅員外散騎侍郎周興嗣次韻天」、姓名、布髡歷等

④存 159 行

⑤用紙：縱 27×橫 296cm

124、P. 3626 冊子

①『千字文』（「侍巾」まで）

②存 18 頁、105 行

③用紙：縱 14×橫 12cm（各頁）

125、P. 3658 卷子

①正面：『篆楷千字文』（15 行）、『千字文』（2 行、「雲騰致雨」まで）、雜寫

②存 19 行

③背面：繒梁歷、雜寫

④存 6 行

⑤用紙：橫 28.5cm

126、P. 3666V 卷子

①正面：『鷲子賦』

②存 115 行

③背面：便麥粟契、「咸通八年（867）正月」、『郎君須立身』（3 編）、「大順元年（890）十二月五日」、「千字文」、社司轉帖（3 編）、『直上青山望八都』、『一到龍沙十五年』、「文德元年（888）二十八日」、「千千字字文文勅」。社司轉帖、莫高窟百姓袁文信狀

④存 80 行

⑤書寫年代：大順元年（890）

127、P. 3692V 卷子

①正面：『李陵與蘇武書一首』、識語「壬午年二月廿五日金光明寺學郎索富通書記之耳」

②存 71 行

③背面：雜寫、『郎君須立身』、「千千字勅員外散騎侍郎周興嗣次韻。天地玄黃、宇宙洪荒。日月盈」、壬午年十一月二日社司轉帖、『敦煌姓氏雜錄』（3 行、「張王李趙、陰薛唐登（鄧）。安康石□□、□□□曹何。寶菜柴水黑孔長田□□□□□郭馮龍□」）

④存 27 行

⑤書寫年代：壬午年（922）

⑥用紙：縦 29.5×横 154cm

128、P. 3705V 卷子

①正面：『論語』

②存 105 行

③背面：『雜字』（10 行）。「千字文勅員」、姓名、『論語』（2 行）、數字（4 行）、『正月孟春猶寒』（2 行）、「中和二年十二月」、「上大_田（夫）、丘乙己、化三千、七_田（十）二、女_{田田}（小生）、八九子」（硬筆）、「牛羊_{田田}（千口）（硬筆）等

④存 75 行

⑤書寫年代：中和二年（882）

⑥用紙：縦 27×横 214cm

129、P. 3743 卷子

①『千字文』（「宗恒岱」から「焉哉乎也」まで、「千文一卷」と尾題）

②存 25 行

③用紙：縦 29.5×横 77cm

130、P. 3797V 卷子

①正面：『太公家教』、『新集嚴父教』

②存 67 行

③背面：「上大夫、丘一（乙）己、化三千、七十二、女小生、八九子」、「牛羊千口、宅字」、「太公家孝（教）一卷」、「四三年甲學德諫子自」、「長毛蓋託四學郎大歌李延」、「開寶九年丁丑年四月八日王會」、「王家定興頭上一仟」、「大元有量智慧」等。「維大宋開寶九年丙子歲三月十三寫子文書了」、「戸張富清、妻阿安、男長子、孫富奴、孫富住、男願弘、子」

④存 12 行

⑤書寫年代：丁丑年（977）

⑥用紙：縦 30×横 92cm

131、P. 3806V 卷子

①正面：『春秋經傳集解』

②存 128 行

③背面：『宣宗皇帝禦制勸百僚』、「上大夫、丘乙己、化三千、七十士、二（尔）小生、八九子、可知其禮也」、願文、社文

④存 113 行

⑤用紙：縦 29.6×横 309cm

132、P. 3849p 卷子

①正面：『佛説諸經雜緣喻因由記』

②存 3 行

③背面：『千字文』（「宙」、「洪」の習字、各字を 3 行に書く）

④存 6 行

⑤用紙：縦 29cm

133、P. 3875A 卷子

①正面：社司轉帖、『開蒙要訓』（97 行、「開蒙要訓一卷」と首題、尾題）

②存 106 行

③背面：社司轉帖

④存 7 行

134、P. 3875p8 卷子

①正面：『千字文』（「惟」、「鞠」の習字、各字を 2 行に書く）

②存 4 行

③背面：『千字文』（「名」、「立」、「形」の習字、各字を 2 行に書く）

④存 5 行

135、P. 3894p1 卷子

①馬義□、良佛□（如）、齊義□、遊通信、吳像子、方義子、汜政子、麴閏子、
田壹翔、高文昌

②存 10 行

136、P. 3894p2 卷子

①張賢君、王辛通、李君子、趙文賢、安文德、康像通、石像如、平信子、羅安
□（信）、白如□

②存 11 行

137、P. 3894p5V 卷子

①正面：『千字文』（「員外散騎侍郎周興嗣」、「來」、「騎」、「何」、「調」、「辰」
等）

②存 2 行

③背面：雜寫（「是人共」、「夾」等）

④存 2 行

138、P. 3908 冊子

①『雜字』、「訓一卷坤」、『新集周公解夢書一卷』、丙寅年正月一〔日〕慈惠鄉百姓張通子契約、『雜字』

②用紙：縦 16.7×横 12.5cm（各頁）

139、P. 4017 冊子

①『口分地出賣契』、「恐人無信、故立此契為後憑」、「乙酉年七月廿一日徐僧政」、「乙酉年七月廿三日安郎君」、「乙酉年七月廿三日立契」、社司轉帖等。『雜字一本』（6 行）、社司轉帖（5 編）。『詠九九詩一首』、『曲子長相思』、『曲子鵲踏枝』、『太子讚一本』

②存 18 頁、89 行

③書寫年代：乙酉年（985）

④用紙：縦 14.7×横 10.5cm（各頁）

140、P. 4525 (16) V 卷子

①正面：『大智度論釋實際品第八十』

②存 27 行

③背面：「金剛般若波羅蜜經」等の習字、「張王李趙」（2 編）、「太平興國八年九月」

④存 19 行

⑤書寫年代：太平興國八年（983）

⑥用紙：縦 25.6×横 45.8cm

141、P. 4578 冊子

①『千字文』（「舊老少異」の習字）、「八將徭邊圖壹榮退南陽張公手鈔」

②存 2 頁、8 行

③用紙：縦 14×横 11cm（各頁）

142、P. 4683AV 卷子

①正面：『大般若涅槃經』

②存 27 行

③背面：『千字文』（「秋收」まで）、禮儀問答（チベット語）、法眞等麥粟歷、乙巳年九月十七日領麥粟豆黃麻等歷、祈安求福符

④漢字存 24 行

⑤用紙：縦 27.5×横 45.6cm

143、S. 4696V 卷子

①正面：『論語集解』

②存 16 行

③背面：『千字文』（1 行、「宇宙洪荒、日月盈昃、辰宿列張、寒來」）、姓名

④存 4 行

⑤用紙：縦 16.5×横 26cm

144、P. 4809 冊子

①正面：『千字文』（「惡積」から「宮殿盤」まで）

②存 8 頁、49 行

③用紙：縦 4.2×横 7.1cm（各頁）

145、P. 4899V+P. 5546V 卷子

①正面：『太公家教』（24 行）、「伊州學生龍進通書本」

②存 27 行

③背面：社司轉帖（5 行）、『千字文』（10 行）、「軋（乾）寧貳年」等

④存 21 行

⑤書寫年代：乾寧貳年（895）

⑥用紙：縦 13.5×横 53cm

146、P. 4900 (2) 卷子

①「試文」と首題、『上大夫』の習字

②存 15 行

③書寫年代：咸通十年（869）

④用紙：縦 25.5×横 28.5cm

147、P. 4019 卷子

①『千字文』（「菓玠（珍）李柰、菜重」、「劍號俱」、「醜」の習字、各字を 2 行に書く）

②存 17 行

148、P. 4937V 卷子

①正面：『百行章』

②存 33 行

③背面：『開蒙要訓』（1 行、「𦉳（縵）幕懸垂、穉穉穉穉、孟闡須彌」）、『千字

文』(31行、「熟貢新」まで)

④存 31 行

⑤用紙：縦 27.2×横 52.5cm

149、P. 4972 卷子

①正面：『古賢集』

②存 20 行

③背面：「開蒙」(開蒙)要訓一卷乾坤覆[載]、日月光明(明)、四時來往(四時來往)

④存 1 行

⑤用紙：縦 29.2-29.5×横 32cm

150、P. 4994V 卷子

①正面：『毛詩』卷第九

②存 16 行

③背面：「諸雜記字録為用後流傳」と首題、『正月孟春猶寒』、『雜抄』、『王昭君』

④存 18 行

⑤用紙：縦 27.2×横 32cm

151、P. 5031+1896+2201+2204+2482+2507+3095A+3095B+5169+5171+5185+5614

卷子

①『千字文』(習字、各字を 2 行に書く)

②存 107 行

152、P. 5031p8 卷子

①『開蒙要訓』(「開蒙」(要訓)、「開蒙」(覆載)日明(月))

②存 2 行

153、BD38V 卷子

①正面：『受八關齋戒文』

②存 252 行

③背面：『千字文』(「烹宰」「嫡後嗣」)

④存 1 行

⑤用紙：縦 29.2×横 444cm

154、BD207V 卷子

①正面：『妙法蓮華經』卷第二

②存 224 行

③背面：佛經の雜寫（9 行）、識語「乙酉年十二月十八日安永興自手寫記」、『晏子賦』（「晏子賦壹首」と首題）、「之」「而」「人」「見」の習字、「社司轉帖右緣生子」、「丙戌年」、「千字文勅勅員」、『意欲千摘丙未齊』、戒律雜寫、習字、『千字文』（5 行、「千字文勅勅員」の習字、各字を 1 行に書く）、『七階佛名經』、渠人轉帖、「丙戌年五月廿一日立契赤心郷」、「志公和尚十念誦」等

④存 90 行

⑤用紙：縦 25.6×横 403cm

155、BD1640 卷子

①『維摩詰所說經』、「上大夫、丘乙己」

②存 48 行

③用紙：縦 26×横 79cm

156、BD1745V 卷子

①正面：『妙法蓮華經』

②存 84 行

③背面：「上大」

④存 1 行

⑤用紙：縦 25×横 146.3cm

157、BD1774V 卷子

①正面：『金有陀羅尼經』

②存 38 行

③背面：「大夫丘」

④存 1 行

⑤用紙：縦 26.5×横 64cm

158、BD1942V 卷子

①正面：『妙法蓮華經』卷五

②存 291 行

③背面：チベット語（14 行）、「周興」、「周」、「周」、「周興嗣次韻、天地玄黃、宇宙洪荒」、「千字文勅」、「千字文勅員外」、「千字」、「千字文勅員外散騎侍」、「千字文來」、「千字文勅」、「千字文勅員外散騎侍郎」、「千字文勅」、「服衣裳推位」等

④存 29 行

⑤用紙：縱 26.1×橫 516.9cm

159、BD3955V 卷子

①正面：『無量壽宗要經』

②存 130 行

③背面：「如春」、「上大夫、丘[乙]己、化三千、七十」、「張王李趙、李趙」、「龍興寺」

④存 4 行

⑤用紙：縱 31.5×橫 176cm

160、BD4083V 卷子

①正面：『因緣心釋論開決記』

②存 182 頁

③背面：「千字文」、「員外」、「勅員外散騎」、「大唐」、「燉煌」、「千字文」（「劍號巨闕」まで）、「大唐河西」、「大唐中和五年」、「大唐河中伍年叁月十八日沙彌」、「沙洲燉煌歸義君學士索孝順」、「四月十日靈圖」、「正月一日使持」等

④存 22 行

⑤書寫年代：中和五年（885）

⑥用紙：縱 27.3×橫 252.5cm

161、BD5203V 卷子

①正面：『大般若波羅蜜多經』卷二五九

②存 58 行

③背面：「放光明佛」、「開蒙要訓一卷乾坤覆載」、「月光明。四來往、八節相弔（迎）。春花開」

④存 3 行

⑤用紙：縱 25.2×橫 135.6cm

162、BD5673V 卷子

①正面：『無量壽宗要經』

②存 114 行

③背面：『雜字』、「張袞裳」、九九歌鈔、丙辰年潤（閏）二月八日社人詮信母亡轉帖鈔『敦煌姓氏雜錄』（67 行、「張張張張張張張張張張張張張張張張張王王王李趙、陰薛、崔盧柳鄭唐劉杜范董茶右蔣梁黃、康石必（平）羅、白米史曹河（何）、落陣（陳）齊白平竹岳價（賈）談尹麥郭汜羅何陽昌穆牛吳成胡秦告（吉）同~~轉~~

高衛遊朱馬鄧合索女壬)」

④存 80 行

⑤書寫年代：丙辰年（897）

⑥用紙：縱 192.5×橫 32cm

163、BD5772V 卷子

①正面：『大般若波羅蜜多經』卷二〇六

②存 31 行

③背面：「千字文勅員外散騎侍郎周興嗣次韻」、天地玄黃、社司轉帖、「子曰君子」

④存 5 行

⑤用紙：縱 26×橫 49.6cm

164、BD7089 卷子

①『妙法蓮華經』卷七。「上大夫、丘」

②存 101 行

③用紙：縱 26×橫 181.7cm

165、BD9087V 卷子

①正面：『大乘無量壽經』

②存 13 行

③背面：『千字文』（「金生麗水、玉」、「金生麗水、玉出崑崗、化被草木、賴及
☐（萬）」）

④存 2 行

⑤用紙：縱 30.8×橫 20.4cm

166、BD9089V 卷子

①正面：『佛說無量壽宗要經』（23 行）。雜寫、「沙彌僧張信達書經一本」等

②存 28 行

③背面：「千文（文）一卷」、「千字文（文）勅員外散騎侍郎周」。 「千字文勅員
外外散騎侍郎周興嗣次韻」、『千字文』（「寒來暑☐（往）」まで）、「尚想黃綺
意想於」等

④存 12 行

⑤用紙：縱 32×橫 44cm

167、BD14667 卷子

- ①正面：『開蒙要訓』（「開蒙要訓一卷」と首題、「樽壺榼鉢」まで）、「乾寧五年」
- ②存 52 行
- ③書寫年代：乾寧五年（898）
- ④背面：『三月十八日鄭從嗣上常侍狀』、「勅河西節度使銀青光祿大夫大夫檢校國子祭酒從嗣狀」、『乾寧五年永安寺條記』、『進尚書狀』。社司轉帖、姓名、雜寫等
- ⑤存 41 行
- ⑥用紙：縦 27×横 98.5cm

168、 D x. 269+ D x. 7861+ D x. 7864+ D x. 7870+ D x. 7902+ D x. 8107+ D x. 9365+ D x. 12661+
D x. 16781+ D x. 18950

卷子

- ①『千字文』（殘片）
- ②存 14 行

169、 D x. 895+ D x. 1442+ D x. 2655+ D x. 3991+ D x. 4410+ D x. 6236+ D x. 10258+ D x. 12600+
D x. 12601+ D x. 12673+ D x. 12715+ D x. 18959+ D x. 18960

卷子

- ①正面：『開蒙要訓』（「華、霍泰恒明」から「餽餼資料、饌」まで）
- ②存 53 行
- ③背面：『千字文』（6 行、「勅員外散騎侍郎周興」から「問道（道）」まで。「開蒙要訓一卷（乾坤）」、「曹元松」、「社司轉帖」等
- ④存 16 行

170、 D x. 528BV 卷子

- ①正面：『蘭亭序』習字（「至少」、「之」、「和」等）
- ②存 10 行
- ③背面：『千字文』習字（「命、臨深履薄、夙興（夙興）」）
- ④存 1 行

171、 D x. 1319V 卷子

- ①正面：『太玄真一本際經』卷第五
- ②存 23 行
- ③背面：「維摩」、「今日好風光」、「申年十二月十八日絲綿部落百姓」（參 S. 747V）、「千字文勅勅勅」
- ④存 8 行

172、Дx. 1402 卷子

- ①「開蒙要訓一卷、乾坤覆載」(1行)、雜寫
- ②存6行

173、Дx. 1495 卷子

- ①『千字文』(「陵(凌)摩絳霄」の習字、各字を4行に書く)
- ②存13行

174、Дx. 2485BV 卷子

- ①正面：記事文
- ②存5行
- ③背面：『開蒙要訓』(「袍」、「織織」)
- ④存2行

175、Дx. 2654 冊子

- ①『下女夫詞』(2行)、『開蒙要訓』(9行)
- ②存11行

176、Дx. 5427+Дx. 5451B 卷子

- ①『開蒙要訓』(「春花開□(艷)」から「運蓮提□(擎)」まで)
- ②存17行

177、Дx. 5839 卷子

- ①『開蒙要訓』(「糝粒研斷」から「嶠壑、崖崩」まで)
- ②存6行

178、Дx. 6050V 卷子

- ①正面：禮懺文
- ②存11行
- ③背面：「千、七十二、女小□(生)、八九子」、「牛羊千□(口)」
- ④存2行

179、Дx. .6028 卷子

- ①正面：『百行章』(「百行章一卷 杜正倫」と首題)
- ②存9行

③背面：『千字文』（淵澄取）

④存 11 行

180、Dx. 6586+Dx. 6136+Dx. 6582+Dx. 10277+Dx. 11048

卷子

①『開蒙要訓』（「開蒙要訓一卷」と尾題、「□□（膿血）鼻汚」から「易解難忘」まで）

②存 47 行

181、Dx. 8655V 卷子

①正面：『大般若波羅蜜多經』

②存 16 行

③背面：チベット語、「丘一（乙）己、化三千、七十二、尔、時妙言」

④存 10 行

182、Dx. 7544 卷子

①「字文」（習字）

②存 2 行

183、Dx. 7584 卷子

①『千字文』（「往」、「秋」の習字）

②存 2 行

184、Dx. 10422 卷子

①『千字文』（「有虞陶_□（唐）まで」）

②存 8 行

185、Dx. 10740p1+Dx. 10740p13 卷子

①『開蒙要訓』

②存 6 行

186、Dx. 11066 卷子

①正面：『開蒙要訓』

②存 7 行

③背面：「龍巖記開訓要」

④存 1 行

187、Дx. 11092+Дx. 19085R 卷子

- ①正面：『千字文』（「李柰」から「會盟。何」まで）
- ②存 37 行
- ③背面：「千字文」、「國」「光」「師」「龍」「芥」「呂」「崑」「官」「黃」「藏」「鳥」「有」「此是千文」「本」等の習字
- ④存 13 行

188、Дx. 12393V 卷子

- ①正面：『大般涅槃經』卷三『八迦葉菩薩品』
- ②存 5 行
- ③背面：『千字文』（「墨悲絲[□]（染）」、「景行維[□]（賢）」、「徳建名[□]（立）」、「空谷[□]（傳）」、「禍因」、「己長」、「[□]（難）量」）
- ④存 7 行

189、俄Φ103 卷子

- ①正面：『佛説觀音經』（27 行）、「千字文勅員外」（1 行）
- ②存 29 行
- ③背面：「周興嗣」
- ④存 1 行

190、羽 29V 卷子

- ①正面：『開蒙要訓』（「開蒙要訓一卷」と首題、「喫噉飽[□]（満）」まで）
- ②存 52 行
- ③背面：『郎君須立身』、「學郎大歌梁^{□□}」、「百行章」、「勅歸義軍節度使銀青光祿大夫」、「^{□□}元年丙戌歲十一月[□]日燉煌……」、「^{□□}元年丁亥歲…」、「敦煌姓氏雜録』（3 行、「黃[□]（祝）穆畫令狐[□]黃^{□□□}韓程齊[□]劉平[□]曹壬。張王李趙、安康石羅、白米[□]（史）[□]（曹）何、陰薛唐鄧、令狐賀^{□□}（段）[□]（陽）索^{□□□}」）
- ④存 32 行
- ⑤書寫年代：丁亥年（927 或いは 987）
- ⑥用紙：縦 30.3×横 120.9cm

191、羽 51 卷子

- ①『千字文』（「少異糧」から「焉哉乎也」まで、「千字文一卷」と尾題）
- ②存 13 行
- ③用紙：縦 28.2×横 23.8cm

192、羽 57V 卷子

- ①正面：『秦婦吟一卷』
- ②存 19 行
- ③背面：「千字文」、「見金光明寺學郎索文成」
- ④存 2 行
- ⑤用紙：縱 28.4×橫 43.6cm

193、羽 663R 卷子

- ①正面：『正月孟春猶寒』、『雜抄』
- ②存 20 行
- ③背面：「南無東方佛、南無南方佛、南無北方佛、南無西方佛」、識語「浄土寺學郎曹延祿」、『送遠還通達』、姓名、「於」の習字等
- ④存 10 行
- ⑤用紙：縱 30×橫 40.7cm

194、羽 707R 卷子

- ①正面：『賢却千佛名』卷下、『大寶積經四意斷品』第七十二之四、「節度押衙知案司書手銀青光祿大夫檢校太子賓客董延長到此寺内寫經、來後有人見更莫恠也。『千字文』(11 行、「鳴鳳在竹」まで)、「千字千千千千千」、「張幸端」、「李慶」、「張再盈」、「汜再盈」、「李慶郎」、「王幸端」等
- ②存 27 行
- ③背面：『增壹阿含經』卷第十、「般若波羅蜜多心經」等
- ④存 32 行
- ⑤用紙：縱 25.1×橫 48cm

195、羽 712 卷子

- ①『正月孟春猶寒』
- ②存 4 行
- ③用紙：縱 18.2×橫 10.6cm

196、羽 742R 卷子

- ①正面：『千字文』(周發殷湯)
- ②存 8 行
- ③背面：『佛說閻羅王經』
- ④存 9 行
- ⑤用紙：縱 28.2×橫 15.4cm

197、上圖 17 卷子

- ①『開蒙要訓』（「斲、鍤刮剝拏」から「易解難妄忘」まで）
- ②存 26 行

198、上圖 57V 卷子

- ①正面：『大般若波羅蜜多經』卷一七三『初分讚般若品』第卅二之二
- ②存 82 行
- ③背面：「千字文（文）」
- ④存 1 行
- ⑤用紙：縦 26.6×横 143cm

199、上圖 110V 卷子

- ①正面：『阿毘曇心論』卷第二
- ②背面：『千字文』（49 行、「禪主雲亭」まで、各字を 1 回から 4 回に書き、第 35 行から第 51 行までは『雜字』である）、咸通六年二月廿一日燉煌鄉百姓汜佛奴狀（7 行）、『雜字』（5 行）、『開蒙要訓』（97 行、「煩煩情情帷帳」まで、各字を 1 回から 29 回に書く）、『千字文』（106 行、「愛」「育」まで、各字を 1 から 2 行に書く）
- ③存 279 行

200、北大 D126V 卷子

- ①正面：『諸星母陀羅尼經』
- ②存 28 行
- ③背面：『千字文』（10 行、「千字文一卷」と首題、「罔談彼短」まで）、雜寫
- ④存 12 行
- ⑤用紙：縦 25.5×横 43.5cm

201、天理大學圖書館藏本+羅氏舊藏 卷子

- ①『開蒙要訓』
- ②存 54 行